福岡市博多区

那珂深ヲサ遺跡

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集

1981

福岡市教育委員会

福岡市博多区

那珂深ヲサ遺跡

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集

1981

福岡市教育委員会

序　　文

この報告書は、福岡市住宅供給公社が博多区大字那珂字深ヲサ地内に公営住宅を建設するに際し、事前の試掘調査により建設予定地域全域に古墳時代から鎌倉時代に至る水田に伴う遺構が確認されたため、福岡市教育委員会が昭和53年度から継続して、発掘調査を実施しておりますが、その調査のうち昭和53年度に実施した部分の報告書です。

発掘調査の結果は本書に記載いたしましたように、多くの成果を収めることができました。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において貢献することを念願いたしますとともに、調査に際してよせられました多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表する次第であります。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　西津茂美

例　　言

1．本書は福岡市住宅供給公社による那珂団地（仮称）建設に伴ない、福岡市教育委員会文化課が昭和53年度事業として昭和53年12月11日～同54年5月3日にわたって発掘調査を実施した那珂深ヲサ遺跡の第1次調査報告書である。

2．本書の執筆は浜石・横山がおこない、出土木材の樹種鑑定（第3章）については嶋倉巳三郎先生におねがいした。

3．現場での遺構実測は横山・山崎(龍)・浜石がおこなった他、池崎譲二氏(文化課)、西南大学・福岡大学学生諸氏の協力を得た。

4．遺物の実測、製図は横山・浜石の他、渡辺和子・小林義彦・大橋隆司氏に多大の援助を得た。

5．本書に掲載した写真のうち現場の写真撮影は宮島成昭氏、遺物写真撮影は文化課の二宮忠司・力武卓司氏によるところが大きい。

6．本書の編集は横山・浜石が行なった。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1

１．調査に至る経過…… 1

２．組　　織…… 1

３．遺跡の立地と歴史的環境…… 3

第２章　調査の記録…… 9

１．調査の概要…… 9

(1)　試掘調査…… 9

(2)　第１次発掘調査…… 10

(3)　第２次発掘調査…… 12

２．遺跡の層序…… 13

３．出土遺構…… 14

(1)　第４号溝…… 14

第１号柵状遺構…… 15

第２号柵状遺構…… 19

(2)　第３号溝…… 23

(3)　第２号溝…… 25

(4)　第１号溝と水田面…… 27

４．出土遺物…… 30

(1)　土　器…… 30

(2)　石　器…… 53

(3)　金属器…… 53

(4)　木　器…… 53

第３章　樹種の鑑定 …… 67

第４章　まとめ …… 71

図　版　目　次

本文対照頁

PL．1　那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真（1980年11月撮影：約1/1.5万）…… 3
PL．2　(1)那珂深ヲサ遺跡全景（東より）…… 3
　　(2)那珂深ヲサ遺跡全景（北より）…… 3
PL．3　第4号溝全景（西より）…… 14
PL．4　(1)第1号柵状遺構（西より）…… 15
　　(2)第1号柵状遺構（西より）…… 15
PL．5　(1)第1号柵状遺構（南より）…… 15
　　(2)第1号柵状遺構（北より）…… 15
PL．6　(1)第1号柵状遺構細部…… 15
　　(2)第1号柵状遺構細部…… 15
PL．7　(1)第2号柵状遺構（試掘トレンチ内）…… 19
　　(2)第2号柵状遺構（試掘トレンチ内）…… 19
PL．8　(1)第2号柵状遺構（西より）…… 19
　　(2)第2号柵状遺構と北側台地…… 19
PL．9　木器出土状況…… 15・19
PL．10　木器出土状況…… 15・19
PL．11　(1)第3号溝南側（東より）…… 23
　　(2)第3号溝南側（北より）…… 23
PL．12　(1)第3号溝北側（東より）…… 23
　　(2)第3号溝北側（西より）…… 23
PL．13　(1)第3号溝土層断面（試掘トレンチ内）…… 23
　　(2)第3号溝土層断面（北側）…… 23
PL．14　第2号溝全景（西北より）…… 25
PL．15　(1)第2号溝東南側（東より）…… 25
　　(2)第2号溝西北側土層断面（西北より）…… 25
PL．16　(1)第2号溝西北側（西北より）…… 25
　　(2)第2号溝西北側杭出土状況…… 25
PL．17　(1)第1・2号溝土層断面…… 25
　　(2)第1号溝畦畔断面…… 27
PL．18　第1号溝と水田面（東より）…… 27
PL．19　第1号溝と水田面（南より）…… 27
PL．20　(1)第1号溝と東側水田面（南より）…… 27
　　(2)第1号溝周辺（北より）…… 27
PL．21　(1)第3号水口遺構（南より）…… 28
　　(2)第3号水口遺構（東より）…… 28
PL．22　(1)足跡状遺構（第1号溝東側水田面）…… 29
　　(2)足跡状遺構細部…… 29
PL．23　出土土器（1）…… 30
PL．24　出土土器（2）…… 30
PL．25　出土土器（3）…… 30
PL．26　出土木器・木材（1）…… 53

PL. 27　出土木器・木材（2）…… 53
PL. 28　出土木器・木材（3）…… 53
PL. 29　出土木器・木材（4）…… 53
PL. 30　出土木器・木材（5）…… 53
PL. 31　出土木器・木材（6）…… 53
PL. 32　出土木器・木材（7）…… 53
PL. 33　出土木器・木材（8）…… 53
PL. 34　出土木器・木材（9）…… 53
PL. 35　出土木器・木材細部…… 53

挿　図　目　次

本文頁
Fig. 1　周辺の遺跡（1/2.5万）…… 2
Fig. 2　竹下駅付近採集土器…… 4
Fig. 3　那珂深ヲサ遺跡周辺地形図（昭和5年, 1/5000）…… 6
Fig. 4　那珂深ヲサ遺跡周辺地形図（昭和54年, 1/5000）…… 7
Fig. 5　那珂郡条里復元図（日野尚志氏による, 1/2.5万）…… 8
Fig. 6　試掘出土土器実測図（1/3）…… 10
Fig. 7　試掘出土木器実測図（1/4）…… 10
Fig. 8　試掘トレンチ配置図（1/1万）…… 折り込み
Fig. 9　発掘調査風景（第1号柵状遺構）…… 11
Fig. 10　発掘調査風景（第3号溝）…… 12
Fig. 11　南壁土層断面実測図（1/40）…… 13
Fig. 12　第1号柵状遺構実測図（1/40）…… 折り込み
Fig. 13　第2号柵状遺構実測図（1/40）…… 折り込み
Fig. 13　第2号柵状遺構実測図（1/40）…… 折り込み
Fig. 14　第2・3号溝土層断面実測図（1/40）…… 23
Fig. 15　第3号溝杭実測図（1/4）…… 24
Fig. 16　第3号溝実測図（1/150）…… 折り込み
Fig. 17　第2号溝北宋銭出土状況…… 25
Fig. 18　第1・2号溝土層断面図（1/40）…… 25
Fig. 19　第2号水口遺構実測図（1/40）…… 26
Fig. 20　第2号溝実測図（1/150）…… 折り込み
Fig. 21　第3・4・5号水口遺構実測図（1/40）…… 28
Fig. 22　足跡状遺構出土状況…… 29
Fig. 23　古式土師器分類図（1/6）…… 30
Fig. 24　出土土器実測図（1）（1/3）…… 32
Fig. 25　出土土器実測図（2）（1/3）…… 33
Fig. 26　出土土器実測図（3）（1/3）…… 34
Fig. 27　出土土器実測図（4）（1/3）…… 35
Fig. 28　出土土器実測図（5）（1/3）…… 36
Fig. 29　出土土器実測図（6）（1/3）…… 37
Fig. 30　出土土器実測図（7）（1/3）…… 38
Fig. 31　出土土器実測図（8）（1/3）…… 39
Fig. 32　出土土器実測図（9）（1/3）…… 40

Fig. 33　出土土器実測図（10）(1/3) …… 41
Fig. 34　出土石器・金属器実測図（1/1） …… 53
Fig. 35　出土木器・木材実測図（1）(1/4) …… 60
Fig. 36　出土木器・木材実測図（2）(1/4) …… 61
Fig. 37　出土木器・木材実測図（3）(1/4，1/2) …… 62
Fig. 38　出土木器・木材実測図（4）(1/4) …… 折り込み
Fig. 39　出土木器・木材実測図（5）(1/4) …… 63
Fig. 40　出土木器・木材実測図（6）(1/4) …… 64
Fig. 41　出土木器・木材実測図（7）(1/4) …… 65
Fig. 42　出土木器・木材実測図（8）(1/8) …… 66
Fig. 43　出土木器・木材実測図（9）(1/8) …… 折り込み
Fig. 44　那珂郡家推定地図（日野尚志氏による） …… 74

表　目　次

本文頁

Tab. 1　第1号柵状遺構木器・木材一覧表（1） …… 17
Tab. 2　第1号柵状遺構木器・木材一覧表（2） …… 18
Tab. 3　第1号柵状遺構木器・木材一覧表（3） …… 19
Tab. 4　第2号柵状遺構木器・木材一覧表（1） …… 21
Tab. 5　第2号柵状遺構木器・木材一覧表（2） …… 22
Tab. 6　出土土器観察表（1） …… 41
Tab. 7　出土土器観察表（2） …… 42
Tab. 8　出土土器観察表（3） …… 43
Tab. 9　出土土器観察表（4） …… 44
Tab. 10　出土土器観察表（5） …… 45
Tab. 11　出土土器観察表（6） …… 46
Tab. 12　出土土器観察表（7） …… 47
Tab. 13　出土土器観察表（8） …… 48
Tab. 14　出土土器観察表（9） …… 49
Tab. 15　出土土器観察表（10） …… 50
Tab. 16　出土土器観察表（11） …… 51
Tab. 17　出土土器観察表（12） …… 52
Tab. 18　樹種鑑定表（1） …… 67
Tab. 19　樹種鑑定表（2） …… 68
Tab. 20　樹種鑑定表（3） …… 69
Tab. 21　樹種鑑定表（4） …… 70
Tab. 22　樹種鑑定表（5） …… 70

付　図　目　次

付図 1　那珂深ヲサ遺跡全体図(1/750)
付図 2　第4号溝全体図（1/100）
付図 3　第1号溝全体図（1/80）

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

昭和53（1978）年、福岡市建築局が博多区那珂大字深ヲサ他の一帯に市営住宅建設の計画を行い、福岡市教育委員会文化課に対し事前に埋蔵文化財の有無の確認がなされた。当該地は、諸岡川をはさんで板付遺跡の北側にあたり、また西側には那珂の低丘陵が隣接することから、水田址を中心とする遺跡の存在が予想された。文化課では昭和53（1978）年9月に試掘調査を行い、その結果住宅建設予定地のほぼ全域に遺構・遺物の出土をみた。そこで文化課は建築局・福岡市住宅供給公社と協議をもち、発掘調査対象面積が大きいことなどの点から、対象地を三区分し、各年度に一地区の発掘調査を行うこととした。

第一次発掘調査は昭和53（1978）年12月11日に開始し、翌年5月3日に終了した。以後整理作業を進め、本報告書の刊行となった。また第二次発掘調査は昭和55（1980)年　6月に開始され12月に終了している。

2．組　織

調査委託　　福岡市住宅供給公社

調査主体　　福岡市教育委員会文化部文化課

志鶴幸弘　（文化部長）

井上剛紀　（文化課長）

三宅安吉　（埋文第一係長）　　柳田純孝　（埋文第二係長）

古藤国生・岡島洋一　（事務担当）

横山邦継・山崎龍雄・浜石哲也　（調査担当）

発掘調査・資料整理に関しては以下の人々の協力を得た。

発掘作業　　宮島成昭・信行千尋・日野孝司(以上調査補助員)北川正男・山浦栄喜・広田熊雄・安東昇・今泉広行・牧清次郎・平島龍吉・山浦辰次郎・広田清美・広田良一・吉村幸三郎・伊藤新蔵・広田光春・大野淳一郎・広田輝久・松尾憲一・柴田喜瑞・田中章二・中島正明・坂本宗俊・香月聡・池田昌徳・松隈達暁・平塚正一・柳原正彦・片山郁夫・友清慎一郎・日下部嘉博・牧口雅彦・久保田雅博・坂本真二・折居靖司・河戸広志・吉川友弘・緒方玲子・広田良子・松藤ナツエ・東ミチ子・渡辺アイ子・吉瀬朱美・渡辺啓子・松口真利子・荒巻児玉・進藤かおる・谷川千子・森山キヨ子・谷ミネ子・谷ほまれ・山根きみえ・富永千

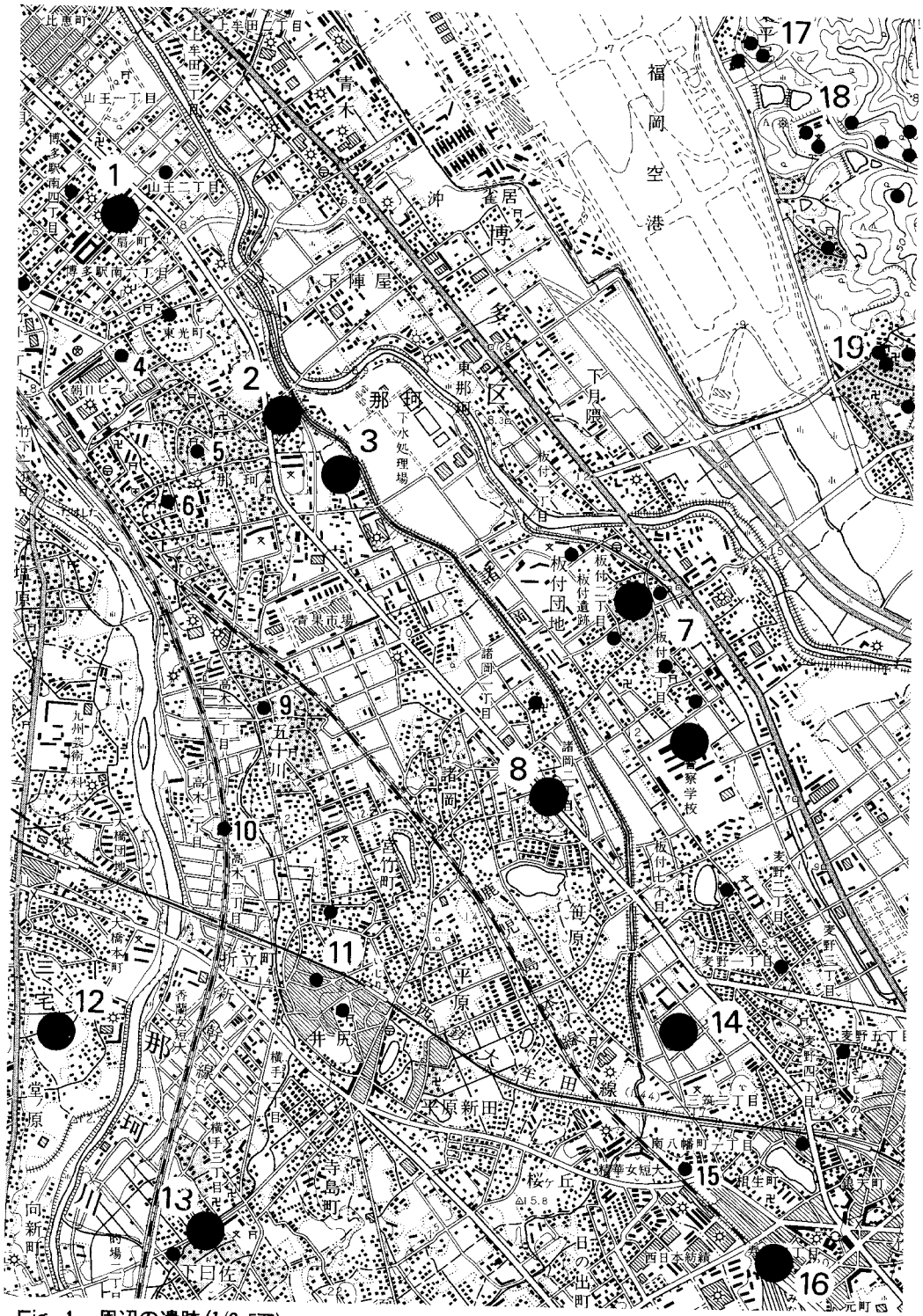


Fig. 1　周辺の遺跡 (1/2.5万)

1．比恵　2．那珂(1)　**3．那珂深ヲサ**　4．剣塚古墳　5．那珂八幡古墳
6．那珂(2)　7．板付　8．諸岡　9．妙楽寺　10．五十川高木　11．井尻　12．三宅C遺跡群
13．曰佐　14．三筑　15．南八幡　16．雑鉤隈　17．東平尾　18．宝満尾　19．下月隈

里・進藤つぎ子・富永砂代

整理作業　渡辺和子・小林義彦・大橋隆司・高木正子・栗原由美子・原秋代・倉田香代子・高木順子・奥田洋美・尾崎順子

調査・報告書作成に関しては文化課諸氏からの協力・教示を得た。特に力武卓治・二宮忠司氏には写真撮影などの労をわずらわせた。(浜石)

3．遺跡の立地と歴史的環境

那珂深ヲサ遺跡は福岡平野南部御笠川と那珂川に挟まれた沖積地に位置している。遺跡一帯は約3万年前に墳出し、当時の谷部・低地部に堆積したとされる「阿蘇火砕流」の白色粘土（八女粘土層）と黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム層）が広く分布し、板付丘陵（標高10～12m）、諸岡台地（標高23m）などとともに那珂～比恵にかけて広大な中位段丘を形成しているが、段丘面標高の比較的低いのは博多―二日市構造線に沿った沈降地帯の影響が火砕流堆積前の低地形成についてあったと考えられている。[註1] 遺跡はこの那珂丘陵が東側に向って傾斜して沖積面と接触する裾部にあたる。沖積面の形成は遺跡東側を南から北に貫流する諸岡川および御笠川の営力によるもので弥生時代以降の生産活動に必要な可耕地として極めて重要な役割りを果したものと考えられる。

以上のような地質・地形的条件のもとで那珂深ヲサ遺跡周辺にはどのような遺跡が分布しているのか時代別に略述することとする(Fig．1)。

1．先土器時代の遺跡

同時代の遺跡は各れも遺物の単独発見によるものが多いが五十川高木遺跡B地点[註2](10)沖積層でナイフ形石器（1点)、板付遺跡でナイフ形石器、トラピーズ、マイクロ・コアが二次堆積で出土している。[註3] また諸岡遺跡（8）では丘陵東斜面でナイフ形石器終末期（ナイフ、トラピーズ、彫器、削器、使用痕のある剝片の組成）の包含層が確認された。[註4]

2．縄文時代の遺跡

この時代も遺跡は少なく、板付遺跡（7）で早期（押型文・無文尖底土器)、前期（条痕文・刺突文・短沈線文土器）のものが見つかっている。弥生文化と連絡する晩期では、縄文時代水田遺構の発見された板付遺跡[註5]、諸岡遺跡F地区[註6]、竪穴住居址を検出したG地区[註7]などが知られ、弥生式文化への胎動がみられる。

3．弥生時代の遺跡

弥生時代では、比恵、板付遺跡など弥生時代前期～中期の集落形態を知る上で重要な遺跡が多く出現してくる。

前期初頭では貯蔵穴群が観察された春住遺跡[註8]、南北700m、東西100～150mの低丘陵に営

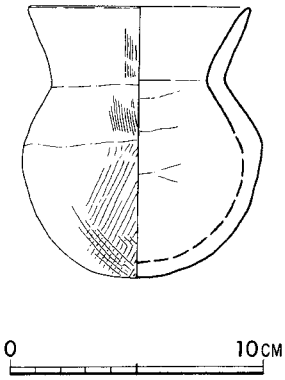


Fig. 2 竹下駅付近採集土器

まれた板付遺跡では居住区を画すると考えられる環溝と貯蔵穴群および丘陵西側に拡がる沖積地では杭列遺構をともなった水田址が検出されているが、経営規模・形態ともに不明な点が多い。

前期後半～終末では板付丘陵全域で貯蔵穴を主とする遺構が検出され集落の拡散化がみられる。また諸岡遺跡（8）では丘陵東斜面（C・D区）で板付Ⅱ式土器（前期末）と朝鮮系無文土器とが共伴する多数の竪穴遺構が検出されこの時期における日朝彼我の関係を知る材料を提供した。前期末の甕棺墓地としては那珂（2）、細型銅鉾を副葬した板付田端遺跡[註10]（7）、同じく細型銅剣を副葬した諸岡忠魂社遺跡（8）などがあって墓制上の共同体的規制を受け乍らも副葬品において突出する甕棺墓が出現している。

続く中期になると深ヲサ遺跡でも中葉～後半にかけての土器類が出土している。周辺では環溝集落と甕棺墓地で著名な比恵遺跡[註11]（1）、甕棺墓地那珂遺跡（2）、板付遺跡（中期初頭～後半）、ゴホウラ貝製腕輪を出土した諸岡遺跡（8）（中期中葉～後期初頭）、月隈丘陵の裾部に分布する宝満尾遺跡[註12]（18）、下月隈遺跡（19）などの墳墓遺跡があるが、須玖岡本遺跡にみられる輸入武器、鏡鑑、装身具類を特定集中副葬するものはみあたらない。生活址は板付遺跡（竪穴住居址、井戸、溝）や井尻地緑神社遺跡[註13]（11）（竪穴住居址・鉄鎌出土）などが知られるが板付から麦野につづく丘陵、月隈丘陵、那珂丘陵などこの時期になると集落遺跡の数は非常に多いものとなる。周辺では板付遺跡（井戸）や甕棺墓・石蓋土坑を出した南八幡遺跡[註14]（15東方）、雑餉隈遺跡（16の北方）などが知られるほか、青銅器鋳型出土遺跡として板付遺跡（広形銅鉾）、那珂八幡遺跡[註15]（5）（広形銅戈）、井尻熊野権現付近遺跡[註16]（11）（銅鉾）、五十川妙楽寺遺跡[註17]（9）（銅鉾）などが知られており各集落での個別鋳造を窺うことができる。これらは春日丘陵を中心とする奴国を構成する小単位として考えられようか。

4．古墳時代の遺跡

古墳時代では深ヲサ遺跡で今回検出した溝およびこれに付属する遺構が関連するものである。周辺遺跡では板付遺跡（第1区―竪穴住居址・祭祀竪穴、D・E―9地点―祭祀竪穴、D―10a地点[註18]―溝状遺構内で多量の土師器、農具類が発見された）および南八幡遺跡[註19]（15）などが生活址として知られている。昭和54年竹下駅付近で工事の際多量の土師器が出土し、Fig. 2土師器丸底壺もその一個である。また水田遺構としては三筑中学校遺跡[註20]（14）が知られる。古墳では筑前国続風土記に「東光寺村の田の中にあり。此塚の上横廿間許、長三十間許あり。……石窟あり。入る事深さ二間二尺許、横七尺許、高七尺あり」と記された剣塚古墳（4）

（前方後円墳、全長60m）や那珂八幡古墳（5）（前方後円墳、円筒埴輪・形象埴輪出土）などの大型墳が那珂丘陵に分布する。板付では板付八幡古墳（7）（円墳、石室は大破）、諸岡古墳群（8）（円墳5基）などがあり、月隈丘陵も宝満尾古墳（18）をはじめとして後期群集墳が多く営まれている。

5．歴史時代の遺跡

奈良時代では遺跡としてみるべきものが少ない。条里制の遺構は現在では細かに観察し難いが（Fig．4）、昭和5年当時の5千分1地形図（Fig．3）によると明瞭である。那珂地域の条里については鏡山猛氏の研究がある。鏡山氏は旧席田郡に残る坪名の研究から那珂川・御笠川流域にのこる条里制遺跡を「那珂条里区」と呼んだ。そして遺構の実際が示す条および里の界線は今日の磁針と37度程の方位ずれを生じていることに注目し、これを水城堤線を基線とすると考えた。従って那珂条里区の施行が水城大堤の築造（天智天皇三年―西暦664年）以降のことであるとされている。また日野尚志氏は那珂郡の条里について条里地割の方位と一町方格の連続性から3つの条里区からなるとされ、(1)山田条里区、(2)道善・安徳条里区、そして那珂深ヲサ遺跡を含む地域を(3)福岡条里区として区画している（Fig．5）。また那珂郡家については大字那珂に小字「群久」があり、群久が南北に五町半あることに注目してこの深ヲサ遺跡から東方の諸岡川と御笠川とに挟まれた地域（現在下水処理場）に那珂郡家を比定されている。

平安時代から鎌倉時代では五十川高木遺跡（10）（掘立柱建物・井戸・溝）、諸岡遺跡（8）では平安末期～中世末期までの掘立柱建物群、溝、井戸および土墨を廻らす館跡などが検出されている。

これまで深ヲサ遺跡周辺の遺跡について簡単に触れてきたが深ヲサ遺跡を残した人々の生活居住の場所は沖積地の更に西方の丘陵上であろう。（横山）

（註）

註1．板付―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書―1971～1974　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集（1976）

註2・山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集（1975）

註3．註1に同じ

註4．板付周辺遺跡調査報告書(2)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集（1975）

註5．板付周辺遺跡調査報告書(5)福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集（1979）

註6．板付周辺遺跡調査報告書(3)　福岡市埋蔵文化財調査報告第36集（1976）

註7．板付周辺遺跡調査報告書(6)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集（1980）

註8．見捨てられた春住遺跡―縄文晩期終末へのアプローチ　筑紫野史学研究会会報第2集（1972.7）　筑紫野史学研究会

註9．板付―県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書―福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集（1977）及註4と同

註10．中山平次郎　銅鉾・銅剣の新資料　考古学雑誌第7巻7号（1917）

註11．中山平次郎　北部九州に於ける先史原史両時代中間期の遺物に就て　考古学雑誌第7巻10号・11号、第8巻1号・3号（1917），鏡山猛　環溝住居址小論(1)～(4)　史淵第67輯・68輯・71輯・74輯・78輯（1956～1959）

註12．宝満尾遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集（1974）

註13．原田大六　日本古墳文化―奴国王の環境―（1954）

註14．中山平次郎　雑餉隈付近に発見せる石蓋土壙と無蓋土壙　考古学雑誌第21巻9号（1931）

註15．水野清一・樋口隆康・岡崎敬　対馬東亜考古学業刊乙種第6冊（1953）他

註16．中山平次郎　井尻の弥生式遺跡　考古学雑誌第14巻第12号（1924）

註17．中山平次郎　銅鉾鋳笵の新資料　史前学雑誌第1巻第3号（1929）及び註15文献

註18．註7に同じ

註19．1979年福岡市教委調査

註20　1978年福岡市教委調査

註21．鏡山猛　大宰府の遺跡と条坊(1)・(2)　史淵第16輯・第17輯（1936～1937）

註22．日野尚志　筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について　佐賀大学教育学部研究論文集24－1（1976）

註23．1980年福岡市教委調査

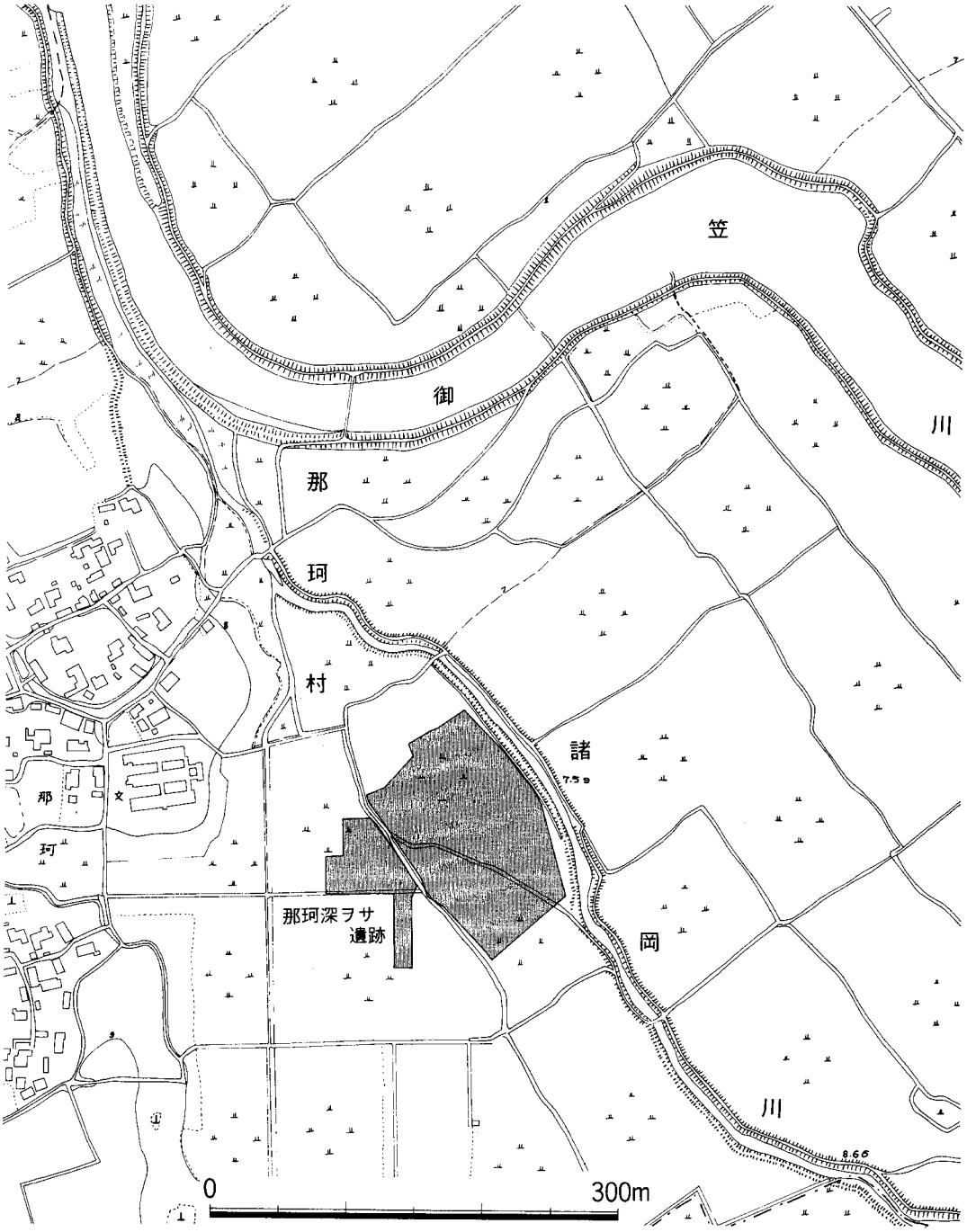


Fig. 3　那珂深ヲサ遺跡周辺地形図(昭和５年，1/5000)

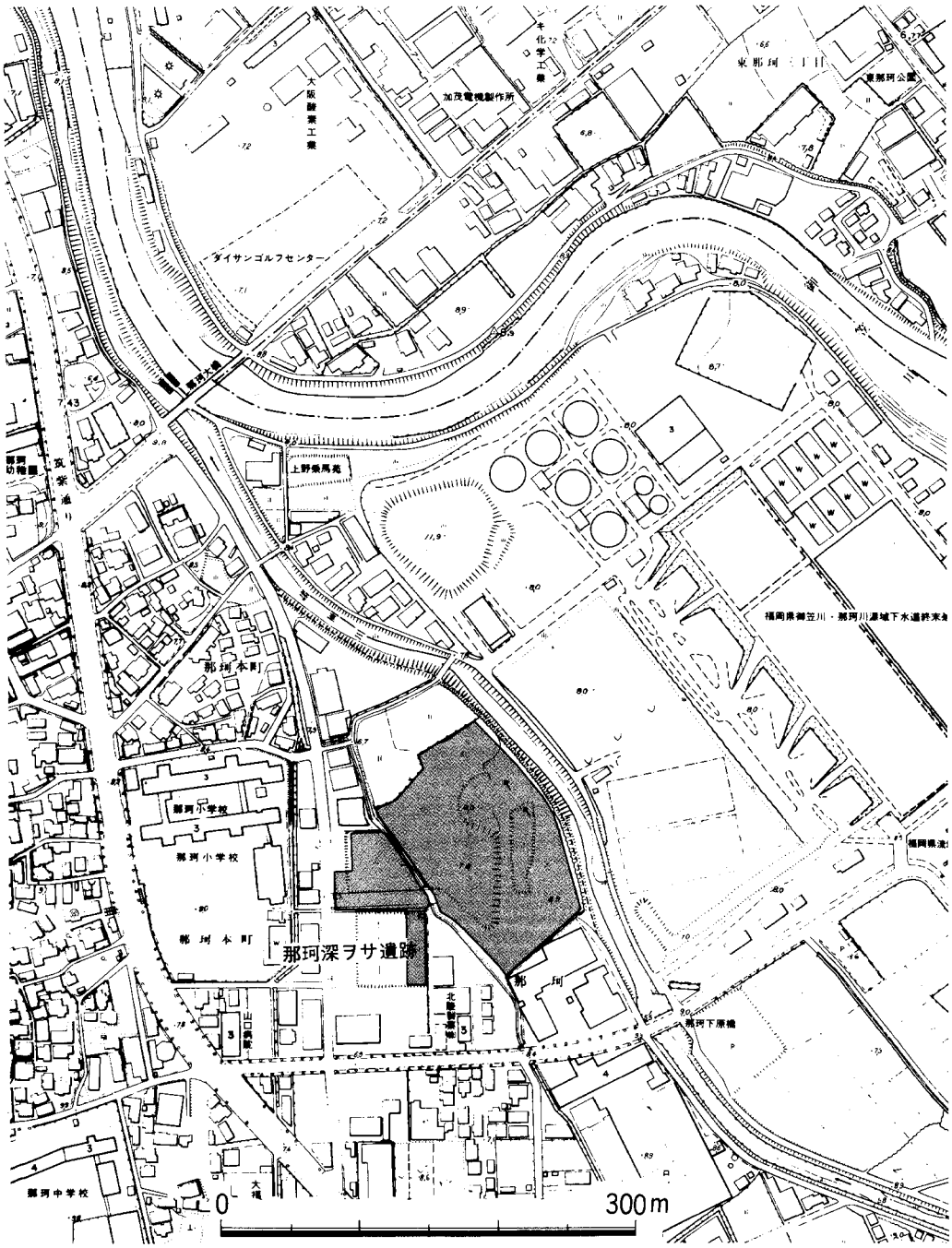


Fig. 4 那珂深ヲサ遺跡周辺地形図(昭和54年,1/5000)

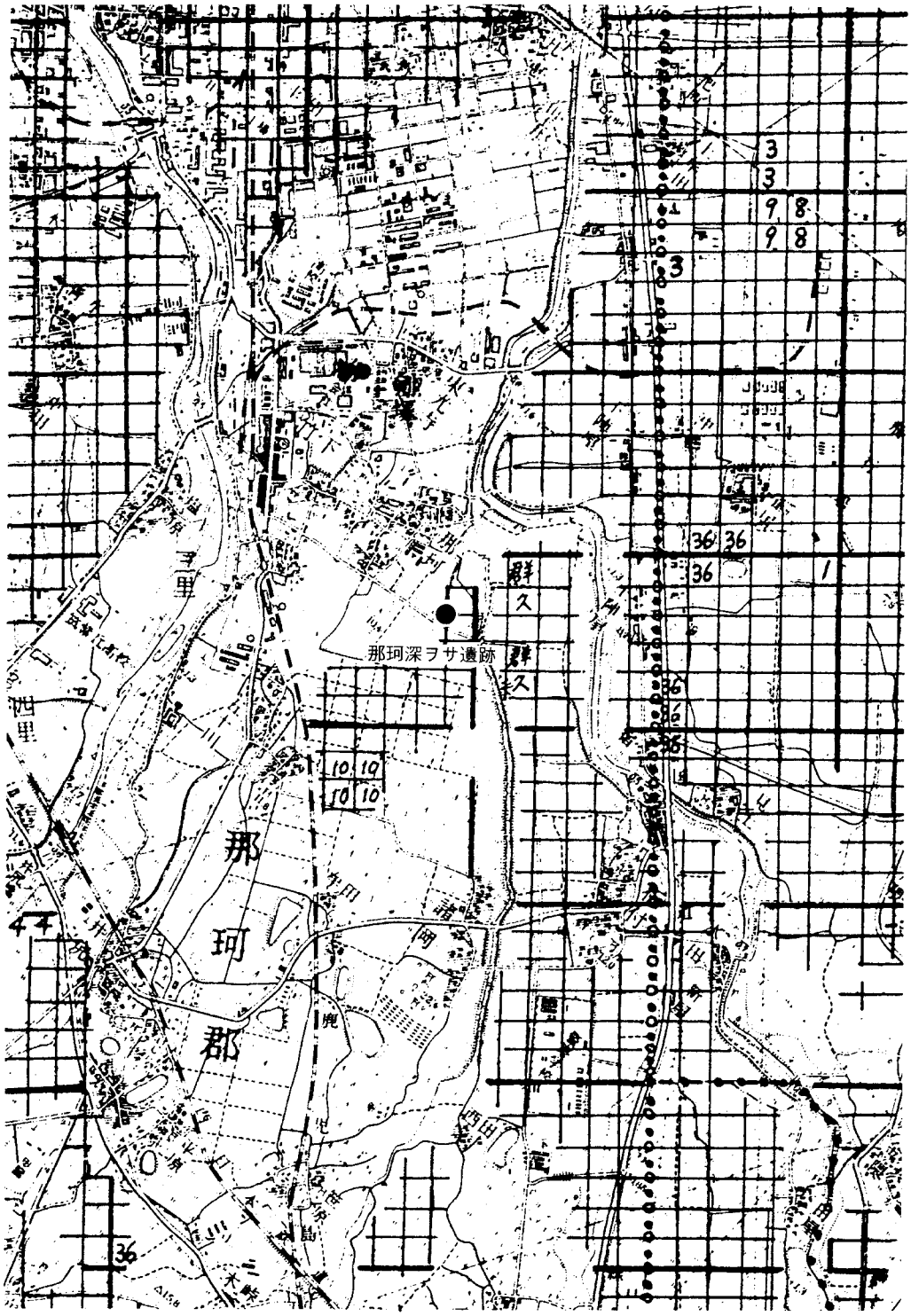


Fig. 5　那珂郡条里復元図（日野尚氏による 1/2.5万）

第2章　調 査 の 記 録

1．調査の概要

那珂団地建設地内の発掘調査は、先述したように3地区に分け、各年度ごとに1地区を行なっていく方法をとった。ここでは、本調査に先立つ試掘調査から、本報告の第1次発掘調査、また今年度行なった第2次発掘調査の概要について述べる。

（1）試掘調査

調査期間　昭和53年9月13～19日、9月26～30日

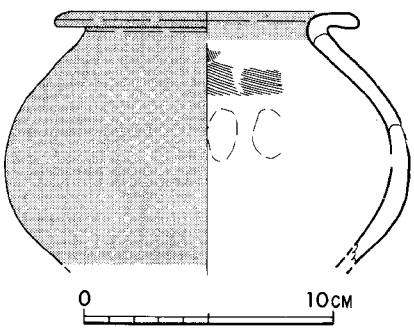
調査方法　調査は対象地(面積1780㎡)全域に現況測量図トラバース点T 2→T 8を結ぶ東西線を基線として20m方眼のグリッドを設定し、東から西へA～H、北から南へ1～9の番号を付して交点を限界にA－1グリッドなどと呼称した。掘削はユンボにより、諸岡川流路との関連により東西方向を主として（9本)、南北方向に1本のトレンチ調査を行ない遺構・遺物の検出にあたった。試掘調査面積は延べ800㎡である。(Fig.8)

調査成果　試掘トレンチでの整層部分の基本的層序を示すと現地表面（標高6.80m前後）から以下40～50cmは耕作土・床土、第Ⅱ層は地表下50～100cmの赤褐色粘質土層（鉄分・マンガンの沈着が著しい）である。第Ⅲ層は地表下100～140cmの有機質泥炭層（黒色粘質土）であり、これ以下はⅣ層青灰色粘質砂土（八女粘土層）となり基盤層となっている。Ⅳ層は厚さ約60cmで以下は青灰色粘質砂土と泥炭層との互層（第Ⅴ層）となっている。

調査による検出遺構・遺物は所見から大別して2時期に分けられた。

第Ⅰ期はE－5～F－5間に検出された杭列遺構（杭頭が地表下150cm）で同遺構付近より弥生中期土器無頸壺（地表下200cm）が出土した。また同レベルではA－7～B－7間で板状木製品（四角孔を有する)、G－4～H－4間で長方形板状製品（5個以上の小孔を穿つ)、G－3～H－3間で鋤あるいは鍬などの農具素材と考えられる木器が出土した。

第Ⅱ期はC－4～D－4間で検出された杭列遺構(杭頭が地表下70～80cm)でⅠ期のものに比較して上部で見つかっている。他にC－6～D－6間検出の杭列はD－7～E－7間のものと連絡するものと考えられた。またA－7～B－7間の杭列も第Ⅱ層から打込まれたものでA－8～B－8間



Fig．6　試掘出土土器実測図(1/3)

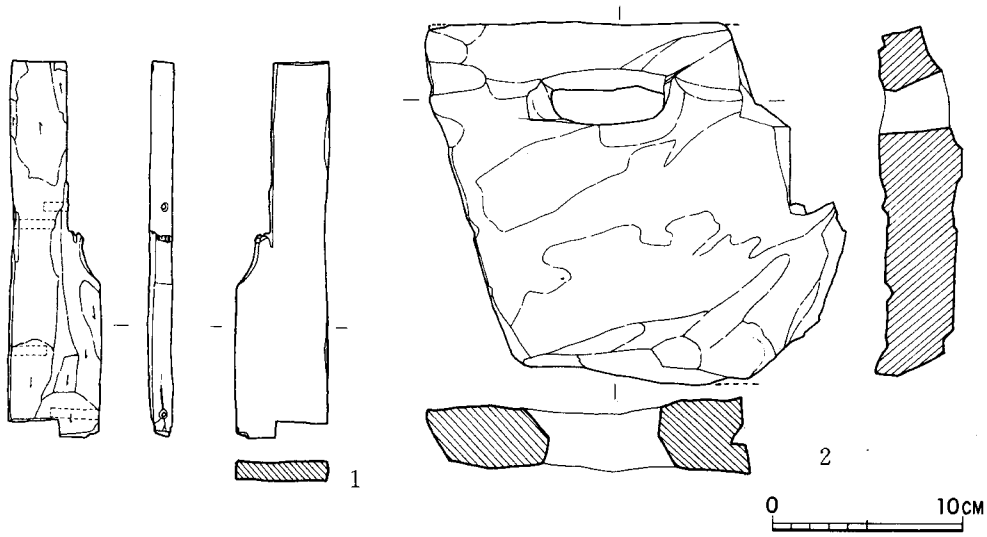


Fig. 7　試掘出土木器実測図（1/4）

へ連絡して南北につながるものと考えられた。これらの遺構の構築時期については詳かでないが須恵器破片が出土しており、古墳時代以降であろうか。

以上の成果によって対象区北東部分をのぞき遺構が分布することが知られ、建設の計画変更が無い限り事前の本調査が必要であると考えられた。

出土遺物（Fig．6・7）Fig.6はE－6～F－6間で出土した丹塗り磨研無頸壺である。口縁部は上部が水平にのび、端部がやや垂れる。口径12.2cm。弥生中期後半の所産であろう。Fig.7の1はG－4～H－4間で出土した。現存長は20cm、幅4.75cm、厚さ1cmをはかる板材を素材とする木器である。両端部は鋸びきで、側辺に抉りがある。また側辺には4個の穿孔がみられ、竹釘孔かと考えられる。あわせ具の部材であろうか。同2はG－3～H－3間で出土した。幅18.4cm、厚さ3.7cmをはかる分厚い長方形板材の片側に寄せて長さ6cm、幅1.8cmの長方形孔を穿っている。横断面は僅かに反りをもっているが削りの不明瞭な部分が多い木器である。（横山）

（2）第1次発掘調査

第1次発掘調査は、団地建設地内の東南側にあたる約5,600㎡を対象とした。調査には試掘時に用いた20m方眼グリッドを再び利用した。

調査は昭和53（1978）年12月11日のユンボによる表土剝ぎから始まり、翌年5月3日の第4号溝第1号柵状遺構の木製品の取りあげで終了した。以下、月日を追って第1次発掘調査をみていきたい。

昭和53（1978）年12月　ユンボによる表土剝ぎと並行して、15日より作業員を入れ第1号溝とその両側に広がる水田面を追う。第1号溝左岸には畦畔状の高まりが続き、そこに

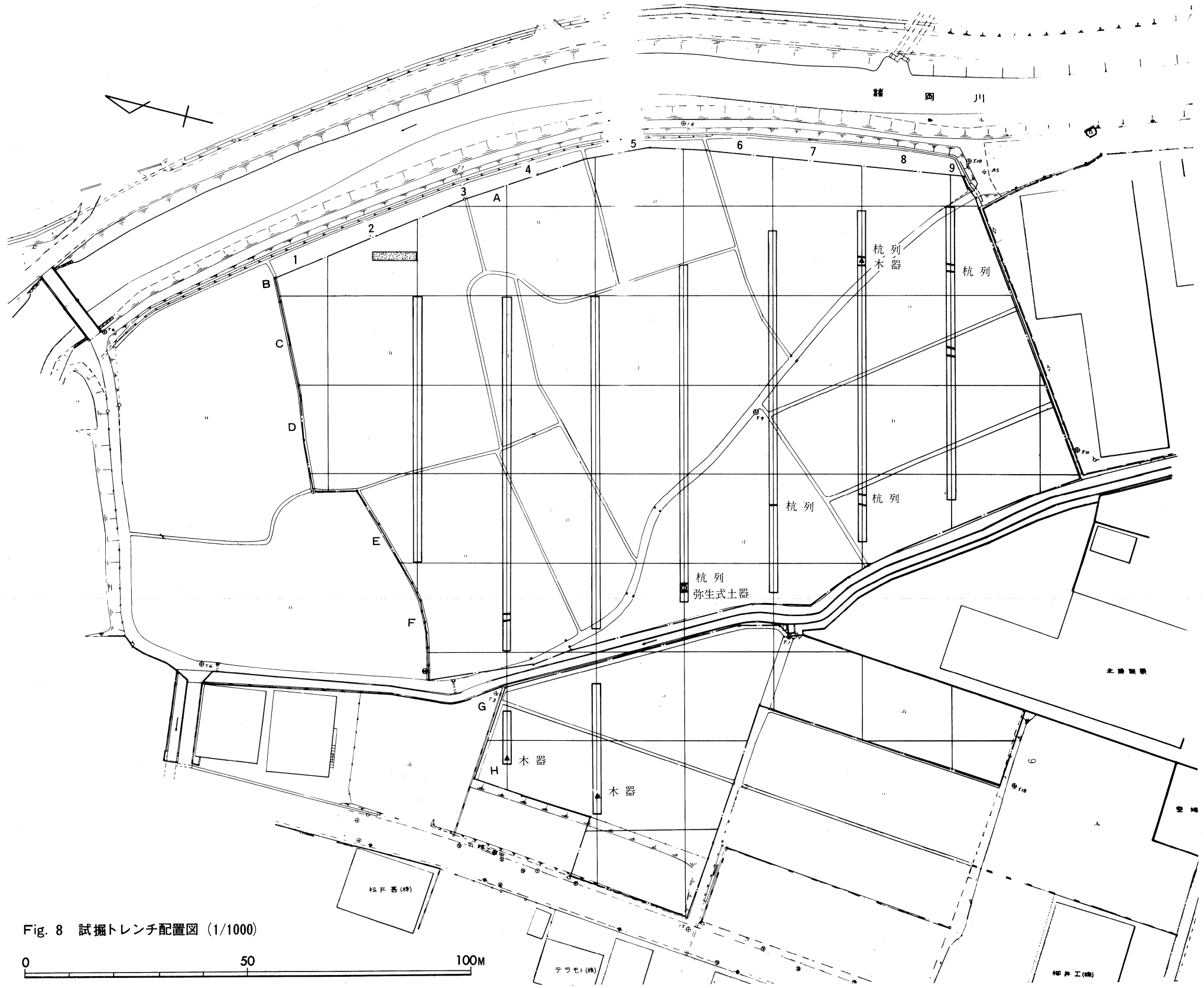


Fig. 8　試掘トレンチ配置図（1/1000）

切り込まれる水口がみられる。溝内には杭列が横切り、水口との関係づけが問題となる。溝の両岸には足跡状のくぼみが多数あり、溝から遠ざかるにつれなくなる。12月はこの第１号溝とその西側の足跡状のくぼみを掘ることに作業は集中する。また層序確認のため発掘区の西壁に沿ってトレンチをあけ、土層図を作成する。27日で現場作業を終える。

昭和54（1979）年１月　　５日より現場作業開始。12月と同様第１号溝とその左岸の発掘を継続する。足跡状のくぼみの調査は雨・霜などにより何度もやりなおす。足跡状のくぼみが密集するなかに、それが全然ない所が幅１ｍで続き畦畔ではないかと想定する。第１号溝は底まで掘り終えるが、出土遺物がほとんどみあたらない。また第１号溝の下にもうひとつ溝（第２号溝）が埋没していることが土層図などで判明したため、時間的な関係より第１号溝とその周辺の水田面は７ラインの南側で調査を打ち切り、すでに表土剝ぎを終えている５～７ライン間は第２号溝とその周辺を調査することにした。これとは別に試掘トレンチを再清掃し、その土層図の作成を行った。

２月　　寒さがきびしくなり、雪もしくは雨の日が多くなる。調査の進度は鈍る。第１号溝とその周辺の調査がほぼ終了し、全体写真、個別写真撮影ののち、実測図の作成にかかる。福岡大学・西南大学学生とともに実測図は仕上げられてゆくが、雨により何度となく中断、清掃のやりなおしを余儀なくされる。一方作業員により第２号溝とその周辺の発掘も進み、第１号溝同様水口や足跡状のくぼみを検出する。溝内には杭列がみられる。また第２号溝を掘る段階で、その下に埋没する溝（第３号溝）の護岸用と考えられる杭列を検出し、さらに試掘トレンチの底に第３号溝より深い杭列の存在を確認し、発掘区内に少なくとも４本の溝が時期を違えて築かれていたことが判明した。これにより調査は複雑になり、時間的にも当初予定以上に必要になった。22日より、これまでの山崎（龍）、浜石の調査体制から横山、浜石に変わる。

３月　　第２号溝の実測と併行し、第３号溝を追う。第３号溝は第１号溝の南側に現われ北に延び、７ライン付近で西に方向を転じ、一部第２号溝に切られ、ゆるやかなカーブをもって西北側に消えることがわかった。この溝は西壁・南壁は丸杭による杭列が続き、岸を確認できたが、東壁・北壁の検出は困難をきわめた。また第４号溝との重なる部分はその底が確定しにくく、一部深掘りしすぎ、第

Fig. 9　発掘調査風景（第１号柵状遺構）

4号溝に属する木器などが出土した。第1号溝は実測を終え、両側に広がる足跡状のくぼみのうち、形態が比較的良好なものを石膏で取り、その後第2号溝の検出へと向った。

当初の予定では3月末までの期限であったが、調査の終了のメドは立たず、福岡市住宅供給公社と協議をもち、調査期間を4月まで延長した。発掘区西端側には工事用の取り付け道路が設けられた。

4・5月　第3号溝の写真撮影・平板実測の後、小型ユンボなどを利用し第4号溝の検出にかかる。覆土を排出した段階で手掘りにかえる。時間的制約から建築物の配置を考え、5～7ライン間で調査をすすめる。発掘区の東端で多量の杭列が出土し、精査するにつれ古墳時代初めの柵状遺構（第1号柵状遺構）であることが確実となる。杭に混って木製農具、建築材、土師器など検出する。北側にはシルト質の台地が拡がり、数条の溝が走っていた。また溝中の西側には別の柵状遺構（第2号柵状遺構）が築かれていたが、出土遺物から第1号柵状遺構より遅れた時代のものが重複していることが判明した。写真撮影の後、中旬より実測に入った。この時期までに作業員は減少し、雨による冠水、排水作業の繰り返しのなか実測を続けた。下旬にほぼ実測を終え、以後木材の取り上げ作業にかかった。全部の木材を取り上げるのは困難であったため製品などを中心に作業をすすめ、残りのものに関しては樹種鑑定のサンプリングをするにとどまった。日・祭日を返上し、5月3日調査は終了した。

Fig. 10　発掘調査風景（第3号溝）

以後、1年半余、他調査の間をぬって整理を行い、本報告の刊行に至った。(浜石)

（3）第2次調査

調査対象面積　8,500㎡（うち約6,000㎡調査）

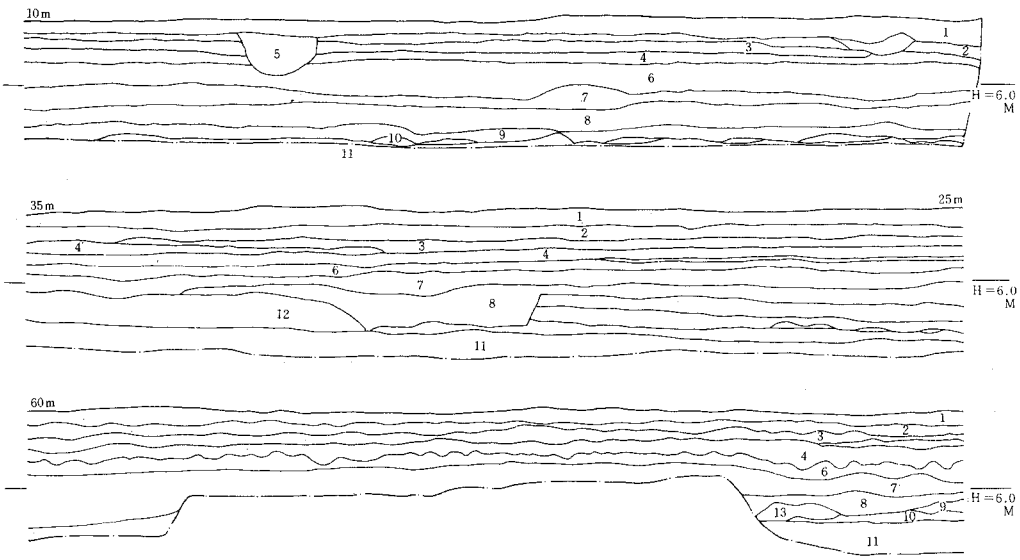
調査期間　昭和55年6月2日～12月27日

調査は昭和53年度調査の所見をもとに対象区の南・東側より遺構の検出をおこなった。この結果出土した遺構は第1次調査と同様に複雑な様相をみせた。主な遺構は第1次調査での第4号溝の延長上にある溝状遺構とこれに直交する小丸杭をつかった杭列遺構および竪穴群である。溝状遺構は底部に3ヶ所程淵状になる個所が検出され、弥生～古墳時代に亘る多量の土器が出土した。また北側の一部は台地状をなし、柱穴群および粘土採掘坑ではないかと考えられる竪穴などが発見された。(横山)

2．遺跡の層序　(Fig. 11)

本調査では試掘調査によって検出された杭列遺構などの面的拡がりを把握するための手掛りとして調査区南端に東西方向のトレンチ（全長66.2m）を掘り、土層観察につとめたが、壁面の乾燥と崩落は激しいものであった。

層序は調査区の各地点で多少の変化はあるが基本的にはFig.11にみられるものと考えてよく、大別してⅦ層に分けられる。因みに現地表は標高6.7～6.8m 程度である。第Ⅰ層は耕作土・床土（赤褐色粘質土）で地表下25～30cm、第Ⅱ層は淡褐色砂質土（鉄分の沈着が多く、石英砂、花崗岩礫混入）で同30～40cmである。第Ⅲ層は灰褐色粘質土（鉄分・マンガンを含み、粗砂混入）で地表下40～55cmで薄層である。第Ⅳ層は漸移層を含めると２層（６層灰色粘土、黒灰色粘土）をまとめて考えて良い。地表下55～90cmで６層の灰色粘土は鉄分の沈着もみられ、層厚も30cm程度で東側に向って薄くなる傾向にある。第Ⅴ層は８層（漆黒色粘土）と９層（灰黒褐色粘質土）とを考えた。層位は地表下90～ 130 cmである。第Ⅴ層では確実にこの層に包含される遺物の発見はなかった。第Ⅵ層は赤褐色細砂層で地表下130～138cm程度で10cmに満たない薄層である。第Ⅶ層は11層とした灰白色粘土で八女粘土と考えられる。上面は標高 5.3 m 前後で北東側に上昇する傾向にある。以上が層序の概略である。（横山）



1．耕　作　土
2．赤褐色粘質土（床土）
3．淡褐色砂質土（鉄分多く砂礫を多く含む）
4．灰褐色粘質土（　〃　）
4'　〃　（粘質がつよい）
5．青灰色砂質土
6．灰色粘土（鉄分を含む）
7．黒灰色粘土（有機物を含む）
8．漆黒色粘土
9．灰黒褐色粘質土
10．赤褐色細砂
11．灰白色粘土（八女粘土）
12．赤味をおびた灰色粘土
13．青灰色砂礫土

Fig. 11　南壁土層断面実測図 (1/ 80)

3．出土遺構

（1）　第4号溝　（付図1，PL．3）

第4号溝は調査終了間際に発見され、周辺部分を含めて約600㎡を調査した。

第4号溝は白色粘土（八女粘土）を壁面とする幅10m（東部分では幅12～13mとひろがる）、深さ約1mの規模をもつ溝である。流路はN－73°－Wでほぼ東西方向に走る。また調査で知り得た延長27mの範囲内では東側に大形の柵状遺構（第1号柵状遺構）が、また西側には小形の丸杭を使用した柵状遺構（第2号柵状遺構）が検出された。第4号溝の埋土は溝底直上に灰褐色粗砂、その上部が黒色粘質土である。黒色粘質土は最上部付近に須恵器杯・馬歯などを少量含んでいるが中位には殆ど遺物の包含はみられず、下位に比較的まとまった土器・木器類を検出した。第4号溝の縁辺は北側（右岸）が急激に傾斜して溝壁の様相をよく観察できるが、南側（左岸）は非常に緩やかな傾斜をもっており、溝縁辺を明瞭にし難い。これは後に述べる第3号溝の北岸部分と平面的に重複する位置にあることから第3号溝によって切られた結果こうした形状を呈するものと考えられるが、発掘調査においては実際に区別ができなかった。溝内の付属遺構については後に詳述するがここでは簡単に触れる。第1号柵状遺構は東端部で溝をほぼ直角に横断し、北側岸辺付近では構築がみられないが、全長16m以上、幅2～3mをはかる。構築材は直径が10～20cm程度の丸太材・割材などを使用し、一部には藁状のものをつめている。また柵の構築材間あるいは西側で木製鍬・鋤・樋などの農器具や両端を枘状にした大形建築材が多数出土し、これに伴って弥生式土器・古式土師器等が発見された。また第2号柵状遺構は西端部に近く検出された。遺構そのものは遺存が悪く、溝底に僅かに杭頭を残している。形状は基本的に0.8～1mの幅をもつ二列の杭であり、この西側では流木に混ざって樋・鍬などの木器が出土した。また遺構の南岸では歴史時代の土師器埦等が出土した。

次に溝周辺については南岸で流路に平行に窪む部分がみられこの中より瓦器埦等出土した。それから台地上の南端部にコーナーを有する竪穴遺構が検出された。覆土は黒色粘質土で壁面はいびつで直線をなさず、遺物の出土もなかったことから2次調査で想定された粘土採掘坑の可能性もある。また北岸付近では比較的規格性のある遺構がみられた。遺構は北岸に平行する3本の小溝と不整な竪穴遺構である。覆土は各れも黒色粘土質であり、遺物の出土は全く無かった。3本の溝のうち北側と南側のものは相互に幅5mをはかりほぼ平行で幅50cm、深さ20cmの規模である。長軸はN－71°－Wの方位をとるが、各れもが第4号溝に連絡している。特に南側の溝は取・排水口様の施設をそなえている。北端にみられる不整竪穴は南端部でみられた遺構と同様のものであろう。第4号溝の時期については第1号柵状遺構の示す時期と考えたい。（横山）

第1号柵状遺構（Fig. 12、PL.4～6）　第1号柵状遺構は第2号柵状遺構と約20m離れた第4号溝の東端に位置する。長さ約16m、幅2～3mで、溝とほぼ直交して北一南の方向で構築されている。遺構の北側は八女粘土（下部はシルト化）によって形成された台地の落ちぎわに続き、南側は左岸の肩になると考えられるが、すでに第2・3号溝によって切られ、明確な岸線を見出すことはできなかった。東側は北側の台地から続く段落ちが一部まわっているが、発掘区域の拡張ができず、それ以上の追求はできなかった。西側は遺構の下流にあたり、流木が多くみられた。

柵状遺構に使用された木材は、杭（立杭）が300本以上、横木が20本余に及ぶ。流木中に杭が混り、また横木も抜けている所がみられ、その構築材はなお多かったと考えられる。杭には先端部を削り尖らせただけの丸杭、面取りを行い断面が方形に近く先端を尖らした角杭、板状の板杭（先端の一辺を削り尖らすものと、両辺を削り尖らすものがある)、さらに建築材などの先端を削り尖らせ二次的に杭として使用したものもある。番号を打って取りあげた杭226本中、丸杭が165本あり、73%の占有率を占める。角杭は57本（24%)、板杭5本（2%)、建築材の転用杭3本（1%）と続く。これがすべてではないが、杭の種類のおおよその傾向はうかがえる。大多数を占める丸杭は径2.4cm位のものから径10cmを越えるものまである。その多くが径4～7cmの範囲におさまる。長さは70～100cmにおよぶ。鑑定を行った丸杭の樹種はシイが圧倒的に多いが、ユズリハ・サカキ・ヤマザクラなど多種にわたっている。角杭・板杭は幅10cm内外で、ほとんどがシイである。

横木には角材、建築材の二次的使用のものの他、丸木も利用されている。長さは2m以上3mにおよぶものもあるが、丸木の場合は1～1.5mで、その中には抜けた丸杭を用いているものもある。

柵状遺構は上述した杭と横木を用い、ほぼ南北に置いた横木を左右から固定してゆく構築方法がとられているが、その過程はかなり複雑なものとなっている。その主体となる部分をみていけば、左岸からまず岸に直交して横木（W 751）が置かれ、それを両側より杭で固定する。続く横木（W 733）はやや西にふれ、約2.5mの長さをもつ。それと重複部分をもちながら約3mの横木（W 700）が東にふれW 751と同じ方向で置かれる。W 700を固定する杭は30本近くにのぼる。北側で一部重なり約2.7mの横木（W 743）が同方向で続く。固定する杭は15本たらずである。次の横木（W 541）との間には約1.0m余りの間隙がある。しかしW 743の北側よりW 541の間に延びる2列の杭があり、すでに流出した横木を固定したものと想定できる。W 541はW 700・W743の方向から大きく東の方向へふれる。長さ2.4m、幅15cmの角材を使用する。この横木の西端から約1m杭が打ち込まれており、横木があったことがうかがわれる。W 541と同方向にW 536の横木が設けられている。以上の横木と、それを固定する杭が柵状遺構の主体となる列と想定される。この横木と杭の列を模式的にみれば、溝の上流から下流にか

けてアーチ状をなす。

上述した主体となる横木と杭列の他、また多くの横木と杭列も存在する。特に顕著なのはこのアーチ状の横木・杭列の東側、すなわち上流側に設けられた杭列および横木である。W 733とW 700の上流側には2列、W 543の上流側には3～4列、W 541には1列がほぼ平行にならんで構築されている。長さ1～1.5mの比較的細めの丸木が横木として使用されている所もあるが、他の所はすでに横木がない。杭のあり方からみれば流出したと考えた方がよいであろう。残っている横木のうちW 708は丸太をくりぬいた樋状木器で、その固定方向も他の横木・杭列に較べやや東にふれているが、樋としてこの場所で使用されたのではなく、二次的に横木として利用されたと考えられる。この他W 751の下流側に杭列が打ち込まれ、またW 541に直交するかのように杭列が打ち込まれ横木（W 469・W 538・W 539）が固定されている。W 539の北端にはほぼ東西方向に約2mにわたって杭列が続き、その北側には藁状のものが置かれている。この部分はすでに台地の落ちぎわに接する。さらにW 536の横木と直交して南北に方位をとる二本の横木（W 784・785，W 785は先端が二叉状になった長さ約3mの建築材）とそれを固定する杭列が存在する。

以上が述べた横木・杭列はいくつかの部分にわけて構築の意味あいを考えることができる。このうちW 733・700・543などの上流に設けられたものは、溝のほぼ中央部にあたり流れによる抵抗が大きいため増強をはかり構築されたか、もしくは当初築かれたものが流れにより破損あるいは弱体化し、新たにW 733－W 541のラインが設けられたかの二通りの考え方ができよう。W 541・W 536の北側のものは護岸的な意味あいが強い。樹種により改築の状況がわかるのではないかと考えたが、シイをその主体とし、他の種類のものも柵状遺構内にまんべんなく散らばる。ただW 700のすぐ西側に築かれている1mたらずの丸木2本を続けて横木とした杭列にはシイ以外の樹種の割合が多く、またW 751の南側の杭列もヤマザクラが比較的まとまって使用されており、あるいは後の補強部分かもしれない。いずれにしろ、この柵状遺構は一時期に構築されたものではなく、改修を加えながら使用したものと考えられる。

この柵状遺構と対向して約3m下流に1本の横木（W 529）とそれを固定する杭列がみられる。その間には流木が多く存在する。

柵状遺構からは、それを構成する木材の間にはさまるようにして、破損して棄てられた鍬・鋤などの農具や土器類が出土した。土器はいずれも古式土師器で柵状遺構の構築年代を示すと考えられる。他に、この遺構の下流部からも農具類・土器が溝底、あるいはその上を覆う砂層中より出土している（出土遺物の項を参照）。

この柵状遺構は南側（左岸）に取水するための堰であったと想定できるが、左岸の調査は時間的制約から行えなかった。（浜石）

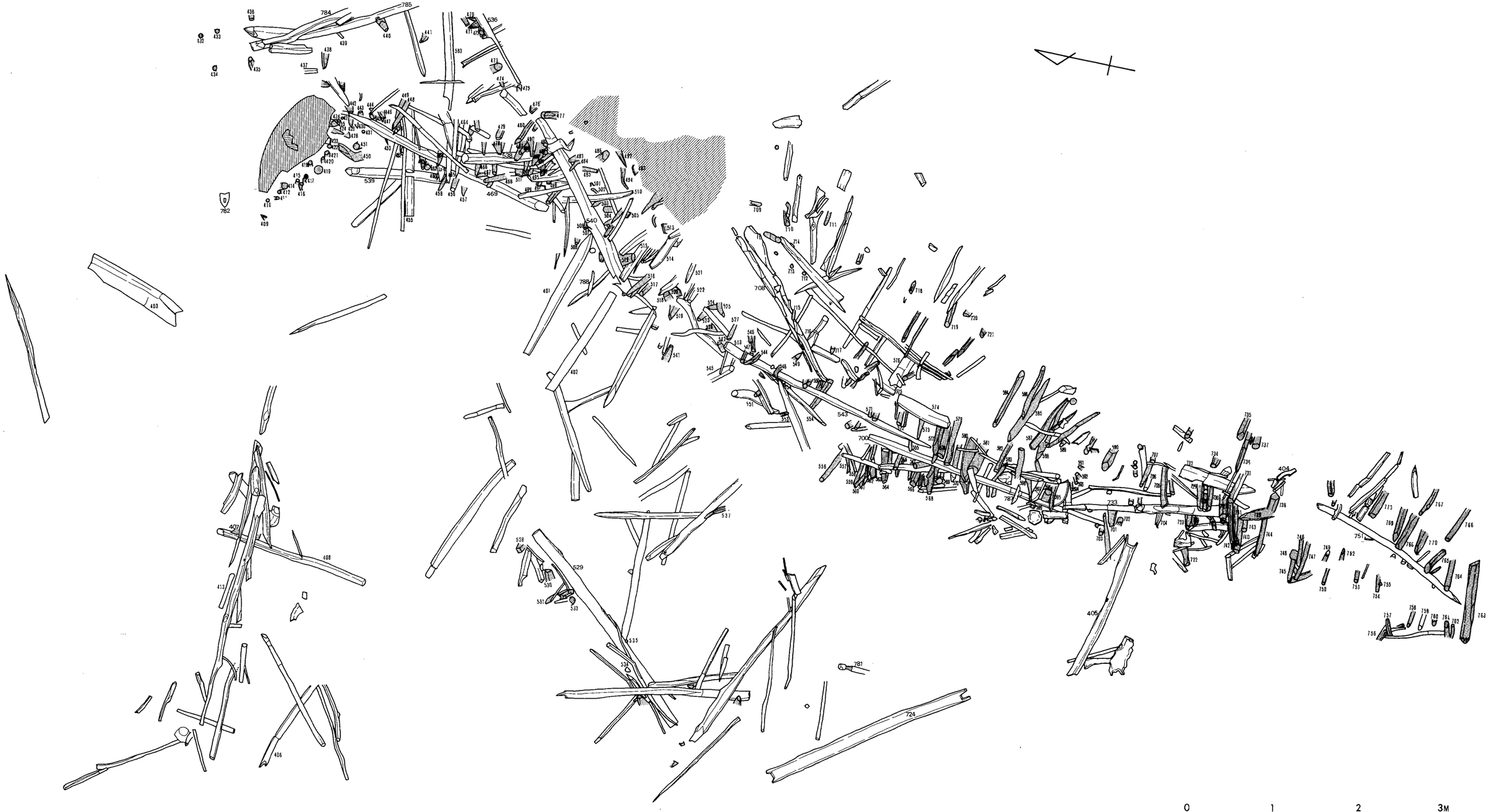


Fig. 12　第１号柵状遺構実測図（1/40）

Tab. 1　第1号柵状遺構構築材一覧表 (1)

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL
401	流木	角杭				
402	流木	角材				
403	流木	板材				
404	流木	二叉鍬			35	26
405	流木	建築材			43	34
406	流木	建築材				
407	杭	角杭		シイ		
408	横木	角太半截材	6.0			
409	杭	角杭		シイ		
410	杭	丸杭	3.3	シイ		
411	杭	丸杭	4.3	シイ		
412	杭	丸杭	4.6	シイ		
413	流木	板材				
414	杭	丸杭				
415	杭	丸杭	4.5	シイ		
416	杭	丸杭	4.3	シイ		
417	杭	丸杭	4.5	シイ		
418	杭	丸杭	5.3	シイ		
419	杭	丸杭	7.7	クリ		
420	杭	丸杭	4.5	シイ		
421	杭	丸杭	4.9	ヒサカキ		
422	杭	丸杭	5.5	シイ		
423	杭	丸杭	6.2	シイ		
424	杭	丸杭	6.2	シイ		
425	杭	丸杭	7.0			
426	杭	丸杭	6.0	シイ		
427	杭	丸杭	5.8	シイ		
428	杭	丸杭	5.3	シイ		
429	杭	丸杭	5.8	アワブキ		
430	杭	角杭		(不明)		
431	杭	丸材	4.5	シイ		
432	杭	丸材	4.2	ユズリハ		
433	杭	丸材	4.6	(不明)		
434	杭	角杭		シイ		
435	杭	角杭				
436	杭	丸杭	5.4	シイ		
437	横木	角材		シイ		
438	杭	丸杭	6.5	(不明)		
439	杭	丸杭	3.6	シイ		
440	杭	丸杭	6.5	モチノキ		
441	杭	丸杭	6.8	カエデ		
442	杭	角杭				
443	杭	丸杭	8.0	シイ		
444	杭	丸杭	6.6	シイ		
445	杭	丸杭	7.8	シイ		
446	杭	板材			41	
447	杭	丸杭	7.0	シイ		
448	杭	角杭		シイ		
449	杭	丸杭	6.6	シイ		
450	杭	丸杭	4.9	シイ		
451	杭	丸杭	7.0	シイ		
452	杭	角杭		シイ		
453	杭	丸杭	7.3	シイ		
454	杭	角杭				

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL.
455	横(縦)木	丸太材				
456	杭	丸杭	8.4	シイ		
457	杭	角杭		シイ		
458	杭	板杭		スギ		
459	杭	角杭		シイ		
460	杭	角杭		シイ		
461	杭	丸杭	7.8	シイ		
462	杭	丸杭	6.0	シイ		
463	杭	角杭		シイ		
464	横(縦)木	角材		シイ		
465	横(縦)木	丸材	5.5	シイ		
466	杭	丸杭	6.8	クリ		
467	杭	丸杭	4.2	ヒサカキ		
468	杭	丸杭	5.2	カシ		
469	横木	丸太材	12.0	クスノキ		
470	杭	丸杭	4.4	シイ		
471	杭	丸杭	7.0	シイ		
472	杭	角杭		クリ		
473	杭	丸杭				
474	杭	丸杭	3.5	シイ		
475	杭	丸杭	4.7	シイ		
476	杭	丸杭	6.4	クリ		
477	杭	丸杭	7.5	(不明)		
478	杭	角杭		シイ		
479	杭	丸杭	8.0	シイ		
480	杭	丸杭	4.8	サカキ		
481	杭	丸杭	4.7	ユズリハ		
482	杭	丸杭	7.0	クリ		
483	杭	丸杭	5.1	シイ		
484	杭	丸杭	4.0	サカキ		
485	杭	丸杭	4.0	カシ		
486	杭	丸杭				
487	杭	丸杭				
488	杭	角杭				
489	杭	丸杭	7.0	ユズリハ		
490	杭	丸杭	6.2	ユズリハ		
491	杭	角杭		カシ		
492	杭	丸杭	5.6	アワブキ		
493	杭	板杭		シイ		
494	杭	丸杭	4.2	ユズリハ		
495	横木	板材				
496	杭	丸杭	5.6	シイ		
497	杭	角杭				
498	横木	建築材			43	
499	横木	角材				
500	横木	角材				
501	杭	丸杭	4.4	シイ		
502	杭	丸杭	3.4	シイ		
503	杭	丸杭	4.9	シイ		
504	杭	丸杭	7.6	シイ		
505	杭	角杭		シイ		
506	杭	丸杭	4.5	シイ		
507	杭	丸杭	3.5			
508	杭	角杭		シイ		

Tab. 2 第1号柵状遺構構築材一覧表 (2)

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL.
509	杭	丸杭	5.3	シイ		
510	杭	丸杭	10.5		42	33
511	杭	角杭				
512	杭	角杭				
513	杭	板杭		シイ		
514	横(縦)木	角材		シイ		
515	横(縦)木	角材		ユズリハ		
516	杭	丸杭	6.0	カシ		
517	杭	丸杭	5.5	シイ		
518	杭	角杭		シイ		
519	杭	角杭		シイ		
520	杭	板杭		シイ		
521	横(縦)木	丸材	5.6	カシ		
522	横(縦)木	角材		シイ		
523	杭	丸杭	5.9	シイ		
524	杭	角杭		シイ		
525	杭	丸杭	5.5	クヌギ		
526	杭	角杭		シイ		
527	杭	丸杭	5.4	コナラ		
528	杭	角杭				
529	横木	建築材				
530	杭	丸杭	4.5			
531	杭	角杭		シイ		
532	杭	丸杭		クリ		
533	杭	板杭				
534	杭	角杭				
535	杭	丸杭				
536	横木	角材				
537	杭	丸杭	5.8	サカキ		
538	横木	丸太				
539	横木	建築材			42	33
540	横木	角材				
541	杭	角杭		シイ		
542	杭	丸杭	5.0	シイ		
543	横木	角材				
544	杭	丸杭	9.0	シイ		
545	横木	角材				
546	杭	角杭		シイ		
547	杭	丸杭	4.5	ユズリハ		
548	杭	丸杭	4.9	ヒサカキ		
549	杭	丸杭	6.2	シイ		
550	杭	丸杭	6.4	シイ		
551	横木			ムクノキ		
552	杭	角杭		シイ		
553	杭	丸杭		シイ		
554	杭	丸杭		シイ		
555	杭	角杭		シイ		
556	杭	丸杭	9.0	アワブキ		
557	杭	丸杭	3.0	ユズリハ		
558	杭	丸杭	3.9	ユズリハ		
559	杭	丸杭	5.4	ユズリハ		
560	杭	丸杭	4.0	カシ		
561	杭	丸杭	3.4	シイ		
562	杭	角杭		シイ		

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL.
563	杭	角杭				
564	杭	丸杭	7.3	シイ		
565	杭	丸杭	4.5	アワブキ		
566	杭	丸杭	5.9	シイ		
567	杭	丸杭	6.5	シイ		
568	杭	丸杭	7.9	ツバキ		
569	杭	丸杭	7.9	コナラ		
570	杭	角杭		シイ		
571	杭	角杭				
572	杭	丸杭				
573	杭	丸杭	6.5	ユズリハ		
574	横木	樋状器				31
575	横木	建築材				
576	横(縦)木	建築材				
577	杭	丸杭	7.7	サカキ		
578	杭	丸杭	10.3	シイ		
579	杭	丸杭	5.3	クリ		
580	杭	角杭				
581	杭	建築材			42	33
582	杭	丸杭	5.5	サカキ		
583	横(縦)木	丸杭	4.0	サカキ		
584	杭	丸杭				
585	杭	丸杭	5.0			
586	杭	角杭		シイ		
587	杭	角杭		—		
588	杭	角杭		ユズリハ		
489	杭	丸杭	3.5	シイ		
590	杭	丸杭	8.7	シイ		
591	杭	丸杭	3.8	シイ		
592	杭	丸杭	6.4	シイ		
593	杭	丸杭	5.4	カエデ		
594	杭	丸杭	4.3	コナラ		
595	杭	丸杭	4.3	ユズリハ		
596	杭	丸杭	7.0	シイ		
597	横(縦)木	角材		シイ		
598	杭	丸杭	4.6	ユズリハ		
599	杭	丸杭	6.7	アワブキ		
700	横木	角材			43	33
701	杭	角杭				
702	杭	丸杭	4.6	サカキ		
703	杭	角杭		シイ		
704	杭	丸杭	5.8	(不明)		
705	杭	丸杭	4.3	コナラ		
706	杭	丸杭	4.2	ツバキ		
707	杭	丸杭	5.5	タブノキ		
708	横木	樋				
709	杭	丸杭	4.2	ツバキ		
710	杭	丸杭	6.6	タブノキ		
711	杭	丸杭	2.4	(不明)		
712	杭	丸杭	4.3	ミズキ		
713	杭	丸杭	2.4	(不明)		
714	杭	丸杭	6.4	シイ		
715	杭	丸杭	3.8	ツバキ		
716	杭	丸杭	3.6	シイ		

Tab. 3 第1号柵状遺構構築材一覧表 (3)

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL.
717	杭	丸杭	3.4	サカキ?		
718	杭	角杭		(不明)		
719	杭	丸杭	6.0	サカキ?		
720	杭	角杭				
721	杭	丸杭	5.5	ツバキ		
722	杭	角杭		ムクノキ?		
723	杭	角杭				
724	流木	建築材			43	34
725	杭	丸杭	4.2	ユズリハ?		
726	杭	角杭		ヒサカキ?		
727	杭	建築材				33
728	杭	丸杭	5.9	シイ		
729	杭	丸杭	3.3	ユズリハ		
730	杭	丸杭		シイ		
731	杭	丸杭	7.6	アワブキ		
732	横木	板材				
733	横木	板材				
734	杭	丸杭	7.6	シイ		
735	杭	丸杭	6.7	アワブキ		
736	杭	丸杭	5.6	シイ		
737	杭	丸杭	5.6	シイ		
738	杭	丸杭	6.8	カエデ		
739	杭	角杭				
740	杭	丸杭	7.1	ヤマザクラ?		
741	杭	丸杭	5.8	ユズリハ		
742	杭	丸杭	7.2	ヤマザクラ?		
743	杭	丸杭	3.5	ヤマザクラ		
744	杭	丸杭	6.3	ヤマザクラ		
745	杭	丸杭	5.0	サカキ		
746	杭	丸杭	4.3	ユズリハ?		
747	杭	丸杭	4.3	サカキ		
748	杭	角杭		クリ		
749	杭	丸杭	4.5	シイ		
750	杭	丸杭	4.0	シイ		
751	横木	丸杭				
752	杭	丸杭	7.4	アワブキ		
753	杭	丸杭	4.0	シイ		
754	杭	丸杭	4.2	シイ		
755	杭	丸杭?		シイ		
756	杭	角杭		ヤナギ		
757	杭	丸杭	6.2	ユズリハ		
758	杭	丸杭	3.3	シイ		
759	杭	丸杭	3.6	アワブキ		
760	杭	丸杭	4.3	ユズリハ		
761	杭	丸杭	8.2	アワブキ		
762	杭	丸杭	3.5	クヌギ		
763	杭	角杭				
764	杭	丸杭	5.5	カシ		
765	杭	丸杭	7.5			
766	杭	角杭	7.0		42	
767	杭	丸杭	5.0	カシ		
768	杭	角杭		シイ		
769	杭	丸杭	6.0			
770	杭	角杭				
771	杭	丸杭	4.5	シイ		
772	杭	角杭		シイ		
773	杭	丸杭	9.2	シイ		
774	杭	角杭		ヒサカキ		
780	流木	槌			37	29
781	流木	建築材?			39	29
782	杭	建築材?			39	31
783	流木	建築材?			42	34
784	横木	建築材			43	34
785	横木	建築材				
786	流木	二叉鍬				10
787	流木	二叉鍬			36	27
788	流木	三叉鍬			36	
789	流木	二叉鍬			36	27
790	流木	鍬先片			36	
791	流木	鍬先片			36	
792	流木	?			39	32
793	流木	?			37	
794	流木	?			37	30
795	流木	?			37	30
796	流木	把手			38	27
797	流木	把手			38	28
798	流木	鋤			38	28
799	流木	鋤			38	28
800	流木	鋤			38	28
801	流木	建築材			43	34

第2号柵状遺構（Fig.13，PL.7・8） 第2号柵状遺構は第4号溝の西端部に検出された小丸杭を主に使用して構築された遺構で、第1号柵状遺構の西側20m に位置している。本遺構が構築された第4号溝は後出の第3号溝によってその南岸は切られて本来の壁面を失ない、小さな段を有する程度となっているが、杭列はこの南岸の溝底端から北岸の溝底端を蛇行し乍ら横切っている。総延長はほぼ11m をはかり、頭部を溝底の地山面より僅かに高い位置（10cm以下）までしか残さないほど遺存状態は悪い。遺構の東側には長軸をほぼ流路の方向（東西方向）に向けた建築材・木器・流木が散発的に堆積しているが、一方西側では多量の細い流木に混じ

て木鍬・樋状木器、槌状木器が無規則方向の状態で出土した。杭列は第1号柵状遺構で見られたような流路に直交する横木を杭によってとめるものは南側で直径10cm、長さ2.2mの横木を丸木杭（W 342，344，345，346，347）の5本で固定するものもみられるが、遺構は基本的に幅約80cmをもって蛇行する小丸杭列と考えることが出来る。検出時は杭列間を充填していた可能性のある藁などの異物は全く見出すことが出来なかった。また東側では前の主要な杭列と方向を異にする小丸杭列（W 361～370他6本の16本による構築で、幅30～40cm、長さ1.7mの2列をなす。）と北東から南西にのびる小杭列（W 654～660による構築で、長さ1.2mをはかる）がみられる。しかし遺構は流水方向からみれば柵的機能を果すにはそれほど有効とは考えられない。また柵状遺構の西側では木樋（長さ1mで直径30cm程度の木材を刳り抜いたもので、孔は底部が平坦で側辺部は半円形をなす。W－303）が出土している。これは第1号柵状遺構の東側では同様のものが杭で留められて検出されており、第2号柵状遺構の場合も柵杭列の軸辺に直交する方向に設置され流下水量の調整に使用したものであるかも知れないが原位置を保っていないので確実とはいえない。

次に柵状遺構の構築材、周辺の出土遺物について触れる。

木材　木材を使用したものは柵構築の杭・柵の東・西側部分で検出された木製品および流木であるが樹種の鑑定をおこなったのは構築杭のみである。試料160点のうち樹種の確実となったものは119点であるが、このうち圧倒的多数を占めるものはシイで全体の半数以上となる。他にサカキ（15点）、アワブキ（12点）、カシ（10点）などを主要なものとしてツバキ、ユズリハ、ハンノキ、タブノキ、カエデ、ミズキを少数混ぜている（個別については第3章を参照）。前に記した遺構の南側で見つかっている横木を5本の小丸杭で留めた部分ではツバキ2本、シイ・アワブキ・サカキ各1本の構成となっている。この樹種構成の傾向は第1号柵状遺構と同様であって特徴的であるが、構築時の植生復元の手掛りとしては流木をも含めた同定が望まれる。

木製品・建築材　木製品では遺構東側で分厚い板状の木器未成品（W 621）、西側で二叉鍬（W 301）、粗雑な拵えの木槌（W 302）、それに木樋と考えられる木製品（W 303）、両端部に削りを加えた棒状木製品（W 600）が出土した。また建築部材は東側で2点出土した。端部に長方形の刳り込みをもつ柱材（W 300）、体部に長方形の枘穴をもち、杭に転用されたと考えられる木材（W 638）などが知られた。

土器　周辺部で出土した土器類では弥生式土器（Y 1，Y 18）、土師器甕（H 4）、須恵器坏蓋（Su 1，Su 2）があり、柵状遺構杭列内では土師器高台付椀（Ha 23）が見つかっている。遺物の出土状況は第3号溝の右岸が重複している点を考慮する必要がある。

第2号柵状遺構は以上の形状と出土状況であり、時期の比定についても問題を残している。

（横山）

Fig. 13　第２号柵状遺構実測図（1/40）

Tab. 4 第2号柵状遺構構成木材一覧表 (1)

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL.
300	流木	建築材			43	32
301	流木	二叉鍬片			35	26
302	流木	槍			37	29
303	?	樋				
304	流木	建築材			42	33
305	杭	丸杭	4.5	シイ		
306	杭	丸杭	4.9	カシ		
307	杭	丸杭	?	サカキ		
308	杭	丸杭	4.2	ハンノキ		
309	杭	丸杭	3.2	ユズリハ		
310	杭	丸杭	3.4	シイ		
311	杭	丸杭	4.0			
312	杭	丸杭	4.7	—		
313	杭	丸杭	?	シイ?		
314	杭	丸杭	?	シイ		
315	杭	丸杭	4.7	ユズリハ		
316	杭	丸杭	3.2	シイ		
317	杭	丸杭	4.0	アワブキ		
318	杭	角杭		サカキ		
319	杭	丸杭	3.0	シイ		
320	杭	丸杭	4.5	アワブキ		
321	杭	丸杭	8.0			
322	杭	丸杭	?	(不明)		
323	杭	丸杭	3.7	ハンノキ		
324	杭	角杭		サカキ?		
325	杭	丸杭	3.9	シイ		
326	杭	角杭		シイ?		
327	杭	丸杭	4.0	シイ		
328	杭	角杭		シイ		
329	杭	角杭				
330	杭	丸杭	5.5	シイ		
331	杭	丸杭	3.0	シイ		
332	杭	丸杭				
333	杭	角杭				
334	杭	丸杭		シイ		
335	杭	角杭				
336	杭	丸杭	6.0	ムクノキ		
337	杭	丸杭	8.5	カエデ		
338	杭	丸杭	4.5	アワブキ		
339	杭	丸杭	3.5	サカキ?		
340	杭	丸杭	9.0			
341	杭	丸杭	4.0	カエデ?		
342	杭	丸杭	5.0	ツバキ		
343	杭	丸杭	5.5	シイ		
344	杭	丸杭	5.0	アワブキ		
345	杭	丸杭	4.5	サカキ		
346	杭	丸杭	4.8	シイ		
347	杭	丸杭	4.0	ツバキ		
348	杭	丸杭	8.0	シイ		
349	杭	丸杭	6.6	シイ		
350	杭	丸杭	4.4	シイ		
351	杭	丸杭	4.9	シイ		
352	杭	丸杭	5.3	シイ		
353	杭	丸杭	4.2	ミズキ		
354	杭	丸杭	7.0	ユズリハ?		
355	杭	丸杭	5.0	シイ		
356	杭	角杭		カシ		
357	杭	丸杭	7.5	ユズリハ		
358	杭	丸杭	5.2	サカキ		
359	杭	丸杭	5.8	シイ		
360	杭	角杭		(不明)		
361	杭	丸杭	5.3	シイ		
362	杭	丸杭	4.8	カシ		
363	杭	丸杭	4.2	カシ		
364	杭	丸杭	4.0	シイ		
365	杭	丸杭	3.0	シイ		
366	杭	角杭		シイ		
367	杭	丸杭	5.5	シイ		
368	杭	丸杭	3.0	シイ		
369	杭	角杭		シイ		
370	杭	丸杭	5.8	シイ		
371	杭	丸杭	5.5	サカキ		
372	杭	丸杭	5.5	ヒサカキ?		
373	杭	角杭		シイ		
374	杭	丸杭	3.2	シイ		
375	杭	丸杭	5.0	シイ		
376	杭	丸杭	6.0	サカキ		
377	杭	丸杭	3.0	シイ		
378	杭	丸杭	3.4	サカキ		
379	杭	丸杭	4.2	カシ		
380	杭	丸杭	5.5	ツバキ		
381	杭	丸杭	8.0	サカキ		
382	杭	丸杭	5.3	シイ		
383	杭	角杭		シイ		
384	杭	丸杭	4.5	サカキ?		
385	杭	丸杭	5.5	シイ		
386	杭	丸杭	3.7	シイ		
387	杭	丸杭	4.8	タブノキ		
388	杭	丸杭	7.5	サカキ		
389	杭	丸杭	5.2	シイ		
390	杭	丸杭	4.0	シイ		
391	杭	丸杭	4.9	シイ		
392	杭	丸杭	3.5	ツバキ		
393	杭	丸杭	3.6	サカキ		
394	杭	角杭		シイ		
395	杭	角杭				
396	杭	丸杭	5.0	シイ		
397	杭	丸杭	4.3	シイ		
398	杭	丸杭	4.9	シイ		
399	杭	丸杭	7.0	ツバキ		
400	杭	角杭		シイ		
600	流木	?			40	32
601						
602	杭	丸杭	4.0	アワブキ		
603	杭	丸杭	6.0			
604	杭	丸杭	3.5	シイ		
605	杭	丸杭	3.8	ユズリハ?		
606	杭	丸杭	3.8	ユズリハ?		

Tab. 5 第2号柵状遺構構成木材一覧表 (2)

No.	出土状態	種類	径(cm)	樹種	Fig.	PL.
607	杭	角杭		ハンノキ		
608	杭	丸杭	5.0	サカキ		
609	杭	丸杭	3.1	サカキ		
610	杭	丸杭	4.1	ユズリハ		
611	杭	丸杭	5.5	シイ		
612	杭	丸杭	3.7	シイ		
613	杭	角杭				
614	杭	丸杭	3.8	シイ		
615	杭	丸杭	4.5	シイ		
616	杭	丸杭	3.1	シイ		
617	杭	丸杭	7.0			
618	杭	丸杭	3.9	サカキ		
619	杭	丸杭	4.0	アワブキ		
620	杭	角杭				
621	流木	板材			41	32
622	杭	丸杭	3.6	アワブキ		
623	杭	角杭				
624	杭	丸杭	3.7	ユズリハ		
625	杭	丸杭	4.0	アワブキ		
626	杭	丸杭	4.8	シイ		
627	杭	丸杭	5.6	シイ		
628	杭	丸杭	5.3	シイ		
629	杭	丸杭	4.1	ヒサカキ?		
630	杭	丸杭	5.3	アワブキ		
631	杭	角杭		ハンノキ		
632	杭	角杭		ユズリハ		
633	杭	丸杭	5.0	シイ		
634	杭	丸杭	4.2	シイ?		
635	杭	丸杭	5.8	シイ		
636	杭	丸杭	5.5	タブノキ		
637	杭	丸杭	9.0			
638	杭	建築材			39	29
639	杭	丸杭	4.8	ユズリハ?		
640	杭	丸杭	4.7	ユズリハ?		
641	杭	丸杭	4.0	シイ		
642	杭	丸杭	3.5			
643	杭	丸杭	3.0	カシ		
644	杭	丸杭	10.0			
645	杭	丸杭	2.9	シイ		
646	杭	丸杭	3.8	アワブキ		
647	杭	丸杭	3.6	(不明)		
648	杭	角杭		シイ		
649	杭	丸杭	4.2	シイ		
650	杭	丸杭	4.6	タブノキ		
651	杭	丸杭	4.0	アワブキ		
652	杭	丸杭	3.9	ユズリハ?		
653	杭	丸杭	4.2	アワブキ		
654	杭	丸杭	8.0	シイ		
655	杭	丸杭	6.0	シイ		
656	杭	丸杭	5.8	シイ?		
657	杭	丸杭	2.0	シイ		
658	杭	丸杭	5.0	シイ		
659	杭	丸杭	3.0	シイ?		
660	杭	丸杭	9.0			
661	杭	丸杭		サカキ		
662	杭	丸杭		カシ		
663	杭	丸杭		—		
664	杭	丸杭		サカキ		
665	杭	丸杭		シイ		
666	杭	丸杭		カシ		
667	杭	丸杭		サカキ		
668	杭	丸杭		カシ		
669	杭	丸杭		カシ		
670	杭	丸杭		サカキ		
671	流木	平鍬			35	26
672		?			37	30
673		?			37	30
674		?			37	30

（2）第3号溝（Fig. 16, PL.11～13）

第3号溝は調査区南側からほぼ北に直線的に走り、南端からほぼ35m付近で西に流路を変えて蛇行し乍ら北西方向に流れる溝である。溝は南側で幅5m、北側では幅7mと拡がる部分もあって全体に縁辺の出這りが激しい。深さは0.8～1m程度である。今回調査した第3号溝の総延長は62mに及ぶが特に左岸部分は径が3～5cm程の丸杭を連続して打込み護岸的工作を行なっているのであるが、右岸についてはこうした護岸的施設をもたない。このため右岸の確定については困難をきわめた。ここで壁面と溝埋土との関係を土層図（Fig.14）でみると壁面は灰黒色粘土と黄白～黄褐色粗砂との互層であり、一方埋土は灰～白色粗砂中に灰色粘質土をレンズ状に混じるものであって左岸のように杭列という手掛りのない右岸は不整形にならざるを得なかった。また第4号溝で述べたように同溝の南岸は第3号溝右岸（北壁面）と切り合い関係にあって第3号溝が新しいと考えて良い。また第3号溝が屈折部で曲らずに直線的に北に伸びるのではないかという点については第4号溝北岸付近が台地をなす状況から西に向きを変更すると考える方が妥当性をもっている。

更に第3号溝は西に流路を変更したところで第2号溝の北岸(右岸)と切りあっている。2つの溝の切り合いはFig.14下段に示した土層図によると第2号溝が本溝を切っている。従って第3号溝は第2号溝よりも古く、第4号溝より新しいものとの事実を得ることができる。

溝内では粗砂層を主とする埋土から土器類が出土している。また第4号溝南岸付近で出土した歴史時代土師器類は第3号溝に含めて良いのではないかと考えられる。

出土遺物

土師器(古墳時代)(Fig.26・30～33)口縁部が強く「く」字形に屈曲する甕(H 2)、口縁部が外方に

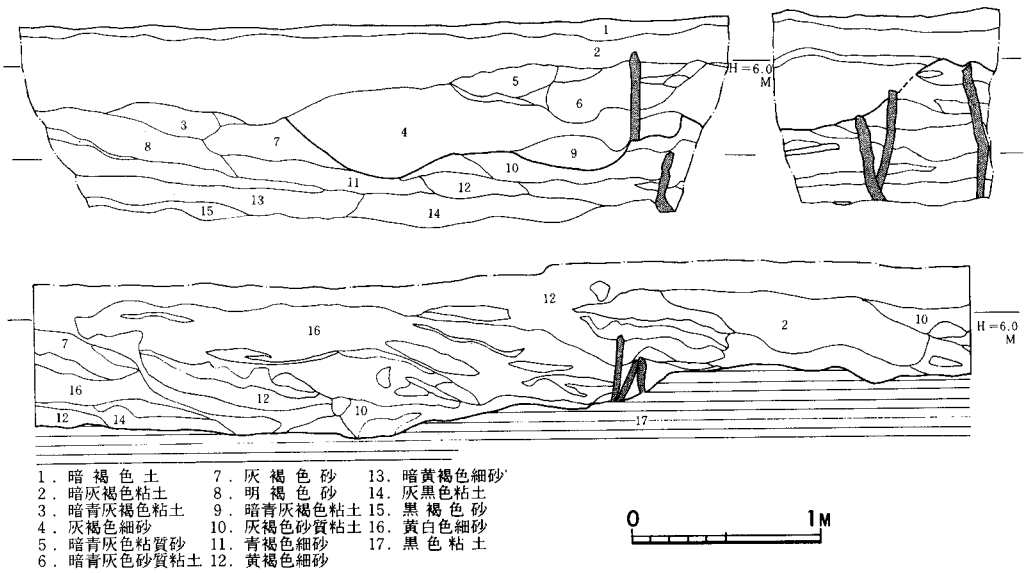


Fig. 14 第3号溝土層断面実測図

開き、体部に細かいタタキ目をもつ庄内式系統の甕(H 11) それに二重口縁を有する厚手の壺 (H 32) が出土している。

須恵器 (Fig.31)　平たい擬宝珠把手を有する杯蓋 (Su 1) および杯 (Su 3) が出土した。

土師器 (歴史時代) (Fig.32)　各れも土師器皿形土器である。口径ではHa 16、Ha 15、Ha 14、Ha 10など口径が10cmを越えるものと口径10cm以下の小皿 (Ha 3、Ha 7、Ha 8、Ha 12、Ha 13) が多く、小皿の中には口縁端部を長く外方に引出す特徴的なもの (Ha 6、Ha 9) もみられる。

白磁 (Fig. 33)　高台付碗口縁部で端部を外方に小さく引出している。体部中位には細い一条の構沈線文を施し、これ以下は櫛描き文となる (Ji 1)。磁器類の出土はこの1点にとどまった。

石鏃 (Fig.34)　黒曜石製の凹基無茎式のものが1点出土した。

以上出土遺物は土師器皿類を中心としてしている。これらの土器は手法上の特徴から12世紀後半の時期以降に比定されるものと考えられる。従って第3号溝はこの時期を前後する時期に営まれたものであろうがこの溝と関連する他の遺構については全く発見がなく、溝自体の機能についても不明な点が多い。(横山)

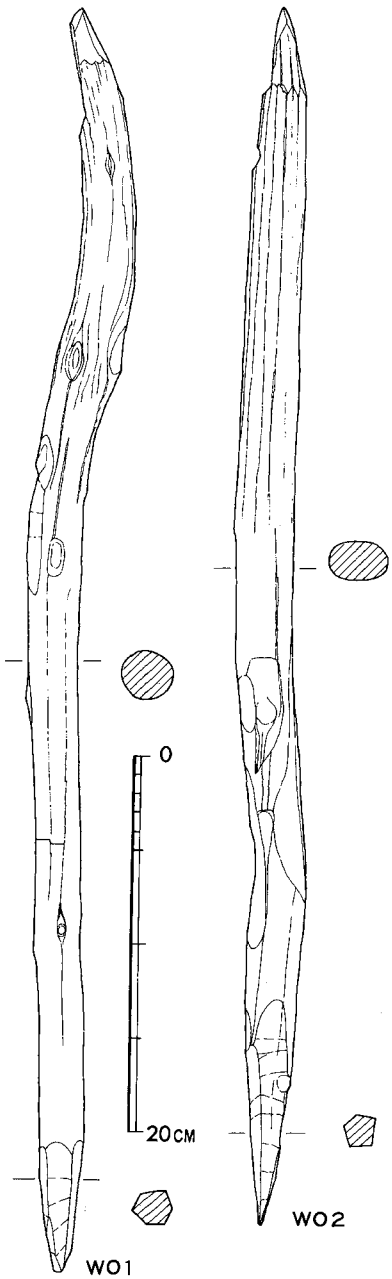


Fig. 15　第3号溝杭実測図

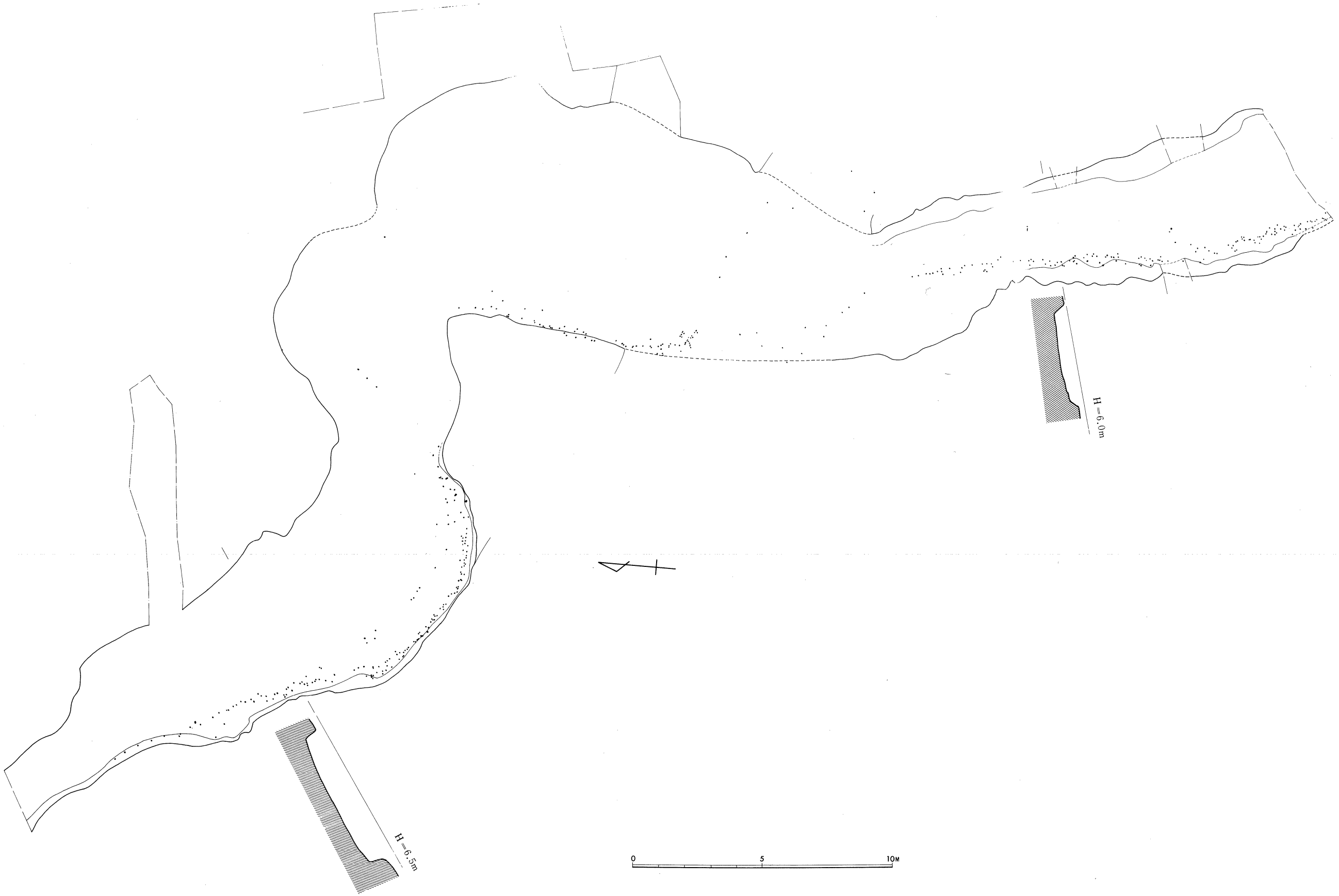


Fig. 16　第３号溝実測図（1/150）

（3）第２号溝（Fig.17～20，PL.14～17）

第２号溝は発掘区の東南隅より始まり、ほぼ直線的に西北に向って約55m 延びる。途中７ライン上付近で第３号溝を切り、さらに6・7ラインの中間でもゆるやかにカーブをえがき西北に延びる第３号溝を切っている。その軌跡は第１号溝とほぼ同じである。幅は西北に向うにつれ拡がる傾向にあり、東南隅で約3.5ｍ、西北隅で6.0ｍを計る。また溝肩部も西北部がしっかりとしている。断面はほぼU字形を呈するが、西北部はかなり傾斜が緩い。

溝の東南側では、東北側溝底に沿って８本の杭が打ち込まれ列をなす。杭は径５cm位の先端部を尖らせただけの丸杭である。その西南側溝底にも杭が点在するが、列をなすまでには至っていない。この両岸上にも杭が打ち込まれ、特に西南岸（左岸）上には溝底杭よりひとまわり太い７本の杭が列をなす。東南側は時間的関係から溝のみを追い、周囲を精査することができなかった。

溝の西北側では、溝とその左岸を中心に調査を行なった。溝の東北岸（右岸）は第３号溝との関係で精査に至らなかったが、溝の左岸にみられる足跡状のくぼみや水口などの施設は検出できなかった。溝底の左岸側には40本以上の径５cmたらずの丸杭が、密疎をみせながらも列をなす。右岸側にはほとんど杭をみない。これらの杭は護岸的な役割というより、別の用途を考えるべきであるかもしれない。下流に第２号水口遺構とそれに続く堰状遺構があり、あるいはこれとの関係で築かれた可能性もある。

左岸には水口と考えられる遺構が２ヶ所設けられ、うち第２号水口遺構（Fig. 19）からは溝を横切るように杭が連続して打ち込まれている。この杭列は発掘時すでに折れ、わずかに溝底に頭を出すだけであったが、本来的には集水用の堰で、水口を通じ左岸に拡がる水田面に水をとりいれたものと考えられる。水口は幅約70cmの断面U字形を呈し、場所によってはピット状の深みをもつが、全体的に溝中に向って傾斜する。第１号水口遺構は第２号の上流に位置するが、杭などの付設施設はみられず、遺構も浅い。岸端から約2.5ｍ引きこまれ、末端は２

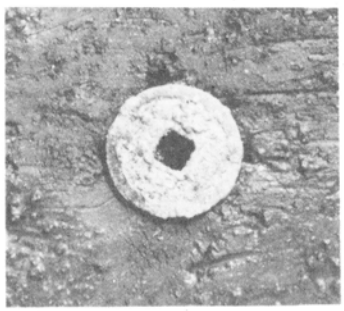
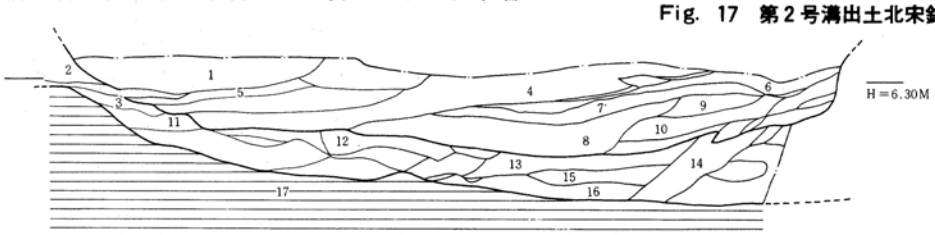


Fig. 17　第２号溝出土北宋銭



1．灰褐色有機砂　6．茶褐色砂　11．青灰色粘土　16．暗青灰色細砂
2．灰褐色細砂　7．暗青灰色粘質砂　12．赤褐色細砂　17．暗青灰色粘土
3．青灰色砂質粘土　8．青灰色砂　13．〃（Fe多し）
4．明黄褐色砂　9．茶褐色砂　14．暗青灰色粘土
5．青灰色砂混粘土　10．暗青灰色砂　15．〃　砂質粘土

Fig. 18　第１・２号溝土層断面図

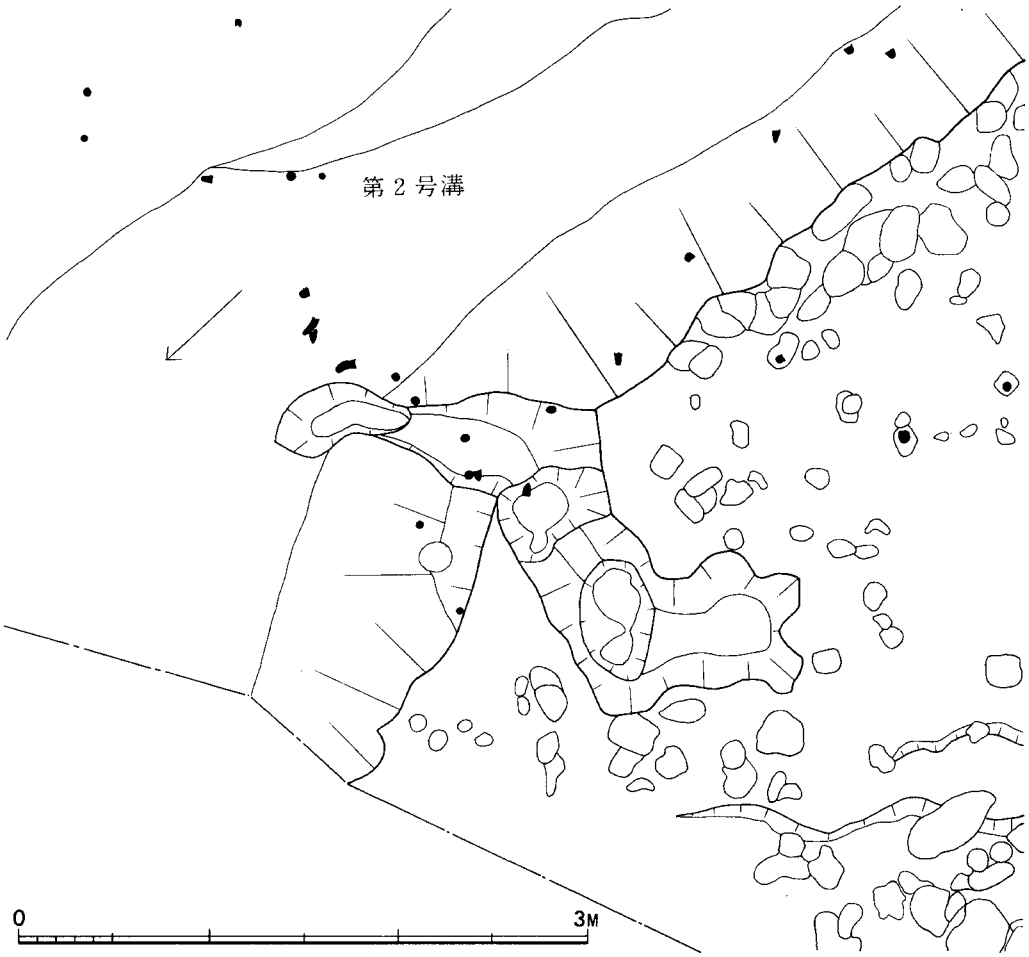


Fig. 19 第２号水口遺構実測図(1/40)

つに分れている。

この２つの水口遺構の背後には、足跡状のくぼみが、溝に近づくにつれ密になって存在する。その間に畦畔状の高まりがところどころみられるが、連続性がない。この面には他の遺構はなく、また上述の遺構との関連から水田面であると考えられる。

第２号溝およびその周辺からの出土遺物はほとんどみられなかった。わずかに土師・須恵・青磁片と北宋銭（Fig.17）を溝底より検出したにすぎなかった。

第１号溝との関係はFig.18に示したが、第１号溝に伴う水田面と第２号溝に伴う水田面との間には、厚さ10cmの砂層がはさまり、両者を明確に区別している。土層でみる限りにおいては、第２号溝が埋没、またそれに伴う水田面が砂層に覆われた後、その形をなぞるように第１号溝とそれに伴う水田面が形成されたものと考えられる。(浜石)

Fig. 20 第2号溝実測図(1/150)

（4）第1号溝と水田面（付図3，Fig.21・22，PL.17～21）

第1号溝とその両岸に拡がる水田面は7ラインの南側を対象に調査を行った。そのうちBラインの西側は水田面が確実に続くと考えられるが、明確な遺構を見出すことができなかった。

第1号溝は発掘区の東南隅から始まり、西北に向け流れる。その軌跡は第2号溝とほぼ重なる。幅は約4m、場所によっては岸を削り5mにおよぶ。断面はゆるやかなU字形を呈し、岸肩から溝底までの深さは約0.7mである。溝の中ほどに一列の杭列が打ち込まれている。溝は砂と粘土の互層により埋没していたが、その中には細い丸木、竹などの流木がみられただけで、土器などの出土はなかった。

溝の左岸に沿って畦畔が構築されている。これは護岸的役割もかね備えたもので、その背後の水田面より約0.2mの高さをもった断面台形状のものである。その幅は東南隅で1.6mを計るが、溝中に杭列が打ち込まれた付近で1mになり、そこより西北端に向っては0.4mたらずとなっている。このうち杭列の西北側約4mは明らかに流れにより削りとられているが、他の部分は構築時のままと考えられる。すなわち、杭列付近までは1～2mの幅広い畦畔が築かれ、その先は0.4mほどの畦畔が築かれていたことになる。これは、東南部が水の取り入れ口に近く、より護岸的な役割を必要としたのに対し、杭列によって比較的流れの調整を受けた西北部は畦畔の護岸的役割が少なかったことによるのかもしれない。

この左岸畦畔上に三ヶ所の取・排水溝（水口）が設けられている。東南側から第3号・第4号第5号水口遺構と呼ぶ（Fig.21）。第3号水口遺構（PL.21）は幅0.6m、断面U字形をなす。畦畔の内側に長さ0.6m余、幅0.2mの浅いくぼみがあり、東南側からの幅約0.2mの浅い溝が接続する。水口底はこのくぼみからわずかに立ち上り、あとは第1号溝底に向い傾斜する。長さは2.4mで、途中その北側で第1号溝壁に掘り込まれた長さ1.6m、幅0.2mの端正な溝状遺構がつながる。杭などの付属施設はない。第4号水口遺構は第3号から4.6m離れて築かれている。幅約0.4m、長さ1.0mで、第1号溝側はその壁面を削って拡がる。断面は浅いU字形をなすが、第3号に比べ切り込み具合は小さく、傾斜も畦畔内側に向って下る。杭などの付属施設はみられない。第5号水口遺構は第4号よりさらに西北に6.3m離れる。その規模は第3・4号に比べ著しく小さく、幅0.2m足ず、長さは0.5mにしかすぎない。断面はU字形に近いが、きわめて浅く、深さは0.1mである。第3・4号と異なるのは、第1号溝寄りの両側に一対の杭を打ち込んでいることである。杭頭はすでに折損していたが、これに横木などを置き、取・排水の際の調整を行なったものと考えられる。

畦畔の背後には水田面が拡がる。水田の間に築かれる畦畔は、水田から高まった形で把握するのは困難をきわめた。しかし水田上には砂が一層覆っており、それを撤去した後、無数の砂の入った足跡状のくぼみが残り、精査してゆくうちに足跡状のくぼみが全くみられない部分が道状に現われた。これは第4号水口遺構の西北1.6mの畦畔内側から始まり、およそ1mの幅

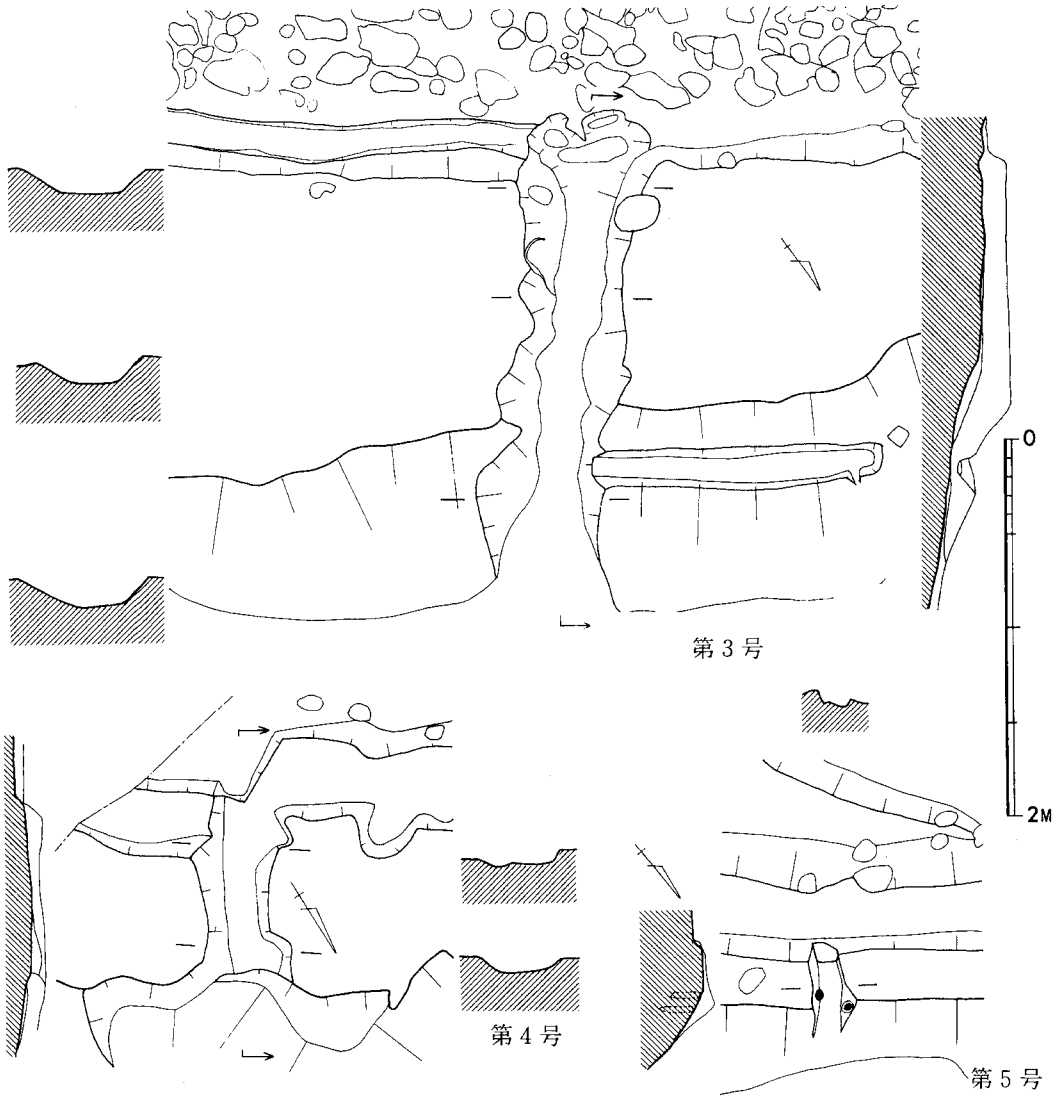


Fig. 21　第３・４・５号水口遺構実測図(1/40)

をもって第１号溝と直交する西南方向に直線的に約14m 続く。西南側は砂層が薄く、足跡状くぼみも少ないため、その延長は明確にできなかった。この途中約９ｍ付近で、南に向う幅約１ｍの足跡状くぼみのない道状のものがある。状況からしてともに畦畔の跡と思われ、これに囲繞された水田の一区画の部分を見出すことができた。これは第１号溝に沿って作られ、北辺が約９ｍ、東辺９ｍ＋α をもつ方形状の水田で、第３・４号の２つの水口遺構をもつことになる。また第１号溝内の杭列は、右岸とのかねあいはあるとしても、堰的な役割をなすと考えればこの水田に取水するために構築されたものと想定できる。その際、２つの取･排水口はその傾斜方向からみて、第３号が排水口、第４号が取水口と区別されていた可能性もある。またこの水田に引

かれた水が北側の水田に流されたのではないかと考えられる溝（水口）が、北側畦畔の東寄りに幅約0.5ｍで設けられている。はっきりとしている水田の区画はこの１枚だけである。第５号水口遺構は別の水田面のための取・排水口ということになる。また第４号水口遺構から西北部にかけての第１号溝に沿った畦畔の内側には、幅0.2～0.6ｍの足跡状くぼみをもたない高まり部分があり、あるいはこれも畦畔的役割をもったものかもしれない。

右岸は左岸とは様相を異にしている。第１号溝に沿う畦畔らしきものはみられない。わずかに東南側に幅0.6ｍの高まりが断続的に約５ｍあるが、左岸の畦畔とは比較にならない。また北側では溝岸から約0.4ｍ離れた所に幅0.4～0.6ｍの溝があるが、岸と溝の間と溝の背後側との比高差はなく、畦畔的役割をなすとは考えられない。岸線に２ヶ所中くぼみする所がある。一ヶ所は第１号溝内杭の東南側にあたり、溝底と岸上に杭を数本ずつ打ち込む。もう一ヶ所はこれより約６ｍ離れた下流側にあり、長さ1.5ｍ、幅0.6ｍの楕円形を呈し、底に２本の杭を打ち込む。これには上述した幅0.4～0.6ｍの溝が左右から流れ込んでおり、あるいは排水のための施設であったのかもしれない。

岸の背後には第１号溝に直交して６本の溝が走っている。溝幅は0.15～0.2ｍで、いずれも深さ５㎝位の浅いものである。溝と溝との間隔は、最も南側の溝とその北側の溝が２.4m、最も北側の溝とその南側の溝が2.1ｍである他は、2.6ｍと一定距離をもっている。これらの溝はともに東側発掘区境からのび、中央の３本は第１号溝岸にまで達している。溝と溝の間には多数の足跡状のくぼみに混って、摺鉢状の浅いくぼみや溝に直交する短い溝状遺構がみられる。この右岸の溝がどのような意味をもつのか明確でないが、少なくとも農業に関連した遺構であるのはまちがいない。あるいはうねの跡かとも考えられる。

最後になったが両岸に無数に存在する足跡状のくぼみについて触れる。これは耕作面に踏み込んだ足形に、その後の出水、あるいは入排水の際運ばれた砂によって埋ったもので、砂を摘出することにより、その形は明確に現われた。しかし踏み込み具合や、重複などにより本来的な形を見出すことはほとんどできなかった。明らかに人間の足跡とわかるものと蹄の跡ではないか考えられるものがあり、後者は右岸に多量に検出した。この他植物の根などもあると思われるが、それとはっきりわかるものは確認できなかった。（浜石）

Fig. 22　足跡状遺構出土状況

4．出土遺物

（1）土　器（Fig.24～33, Tab. 6～17）

出土した土器類は全て時代別に区別して、弥生式土器、土師器（古墳時代）、須恵器、土師器（歴史時代）、瓦器、磁器の順に集成し、個別土器の細部観察については表にして実測図の後に付した。

弥生式土器　弥生式土器は遺構にともなうものは無い。時期的には中期後半のものがもっとも古く、大形甕（Ｙ５－甕棺）、無頸丹塗り壺形土器（Ｙ４）、無頸壺（Ｙ20）他に壺形土器底部ではヘラナデの著しいＹ13、Ｙ14、Ｙ19が知られる。後期では壺形土器で頸部にハケ目原体による押圧文を施したもの（Ｙ１、Ｙ３）や頸部に低いつまみ上げ突帯を施し、短い外開きの口縁をもつＹ２、一部に口縁部の内傾化の著しい二重口縁をもつもの（Ｙ６～８）、頸部に低い突帯を有するＹ10、扁球形の胴部に一条の小さい刻目突帯を有する異形壺（Ｙ22）などがある。甕形土器では不安定な平底（Ｙ15, 16, 18）, 小さい平底（Ｙ21）、その他Ｙ17が考えられる。高坏は坏部口縁が反転するもの２点（Ｙ11、12）があり、他に器種の不明なＹ９が出土している。

土師器（古墳時代）　土師器は比較的器種と出土量とに恵まれている。

甕形土器　甕形土器はＨ１～４、７などの様に口縁部が「く」字形に屈折し、内外面ともにハケ目・ナデによる調整法をもつ一群があるが、体部および口縁部の特徴、内外面の調整方法によって特徴的なものはⅣ類に区別できよう(Fig.23)。

Ⅰ類　扁球形の体部を有し、頸部はよくしまる。口縁部は反転気味に外開し、口縁端部内面は小さく突出する。調整は外面細かいヨコ・タテハケ目、内面ヘラケズリで外面にヘラ描き波状文を施すものもある（H13, 14)。

Ⅱ類　口縁部は直線的に外反し、端部が小さくつまみ上げられて突出する。外面は体部上面にヨコの細かいタタキ目、内面は口縁に細かいナナメハケ、体部はヨコヘラケズリを施し、頸部内面は鋭い稜をもつ（H11)。

Ⅲ類　体部は球状を呈し、底部は丸底となろう。口縁部は内弯気味に外開する。外面はヨコ・タテの細かいハケ目を施し、へらによる波状沈線あるいはハケ目工具による波状沈線を描くものがある。内面は頸部を指おさえ後ヨコナデ・体部はヘラケズリを施し器壁は薄く仕上げられ

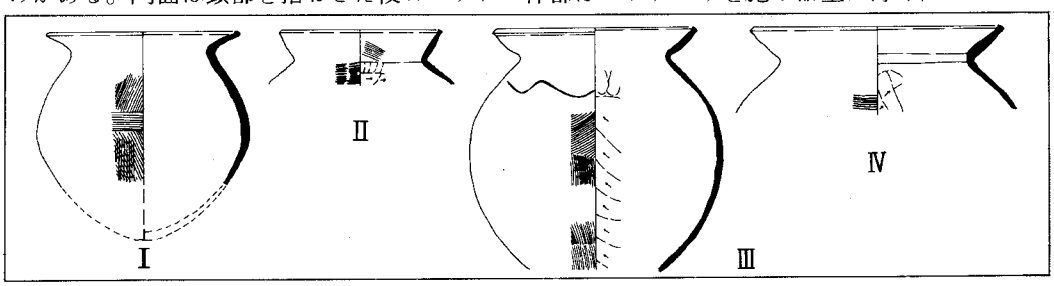


Fig. 23　古式土師甕形土器分類図

ている（H12、15、16、18、21～25）。

Ⅳ類　口縁部はつよく屈曲し外開する。端部は内面に突出するものと平坦となるものとがある。外面はヨコ・タテハケ目、内面体部はヘラケズリ調整している。(H19、20)

甕類は他に尖底となるH26、不安定な平底をなすH28、29、外面叩きの顕著なH27が出土している。

鉢形土器　鉢形土器は内外面ともにハケ目調整法によるものが出土した（H30、31）。

壺形土器　頸部の間隔のつまった二重口縁を有するもの（H32～34）、口縁部はほぼ直立し、端部を内側に曲げた壺（H37）などの他にH35、36、38が出土した。また小型丸底壺は完形がなく、口縁部が跳上げ状になるH40、直線的に外反するH41～43などがある。

埦形土器　外面ハケ目、内面ナデ調整のものが出土している。(H45)

高坏　高坏は全て脚部を欠損する。皿状に浅く内弯気味の坏部（H47・48）をもつものと坏部が深く口縁部を外方に長く引出したもの（H46）とがある。

器台　脚部は直線的に伸び、2個の透し孔をもつ。浅い鉢形の坏部をもつものとなろう(H49)。

須恵器　須恵器は細片で坏蓋（Su1、2）坏（Su3～5）が出土したにとどまった。

土師器（歴史時代）　土師器は皿（Ha1～16）と坏（Ha17～26）とが出土した。

皿は口径10cm以下の小皿が多い。底部は全て糸切り離しでHa 16のように板目圧痕をもつものもみられる。

埦　高台を付した境は低平なもの(Ha17、18)と高く外方に開くもの（Ha19、20、23～25）とがあり、後者のうちHa 24、25はヘラ研磨による調整、Ha 23は指ナデによる。Ha 20は外底部にヘラ描きの記号をもつ。また無高台（Ha26）のものは外面体部下半はヘラ研磨、これ以外はナデ調整による。Ha 23～26は各れも10世期前半を下らない時期の所産であろう。

瓦器　埦が2点出土した。2個とも体部が内弯気味に外方にのび、端部は内側におれる。高台は低いものである。内外面ともに漆黒色～灰黒色を呈し、口縁部付近は銀灰色の部分が残る（Ga1、2）。

磁器　Ji1～4は輸入磁器、Ji5～8は国産品であろう。白磁碗は口縁部を外方に引出し、体部内面に櫛描き文を施すもの（Ji1）とタタミ付が広く、内面に沈線文を施すJi 3とがある。Ji 2は龍泉窯系の青磁碗である。Ji 4は内底に白色の目跡をのこし、高台回転ヘラケズリ、釉色は灰色味をおびた緑色で内外面ともに貫入はみられない。越州窯産青磁の可能性がある。またJi 8は高台に削りを入れ波状とする。唐津焼であろう。(横山)

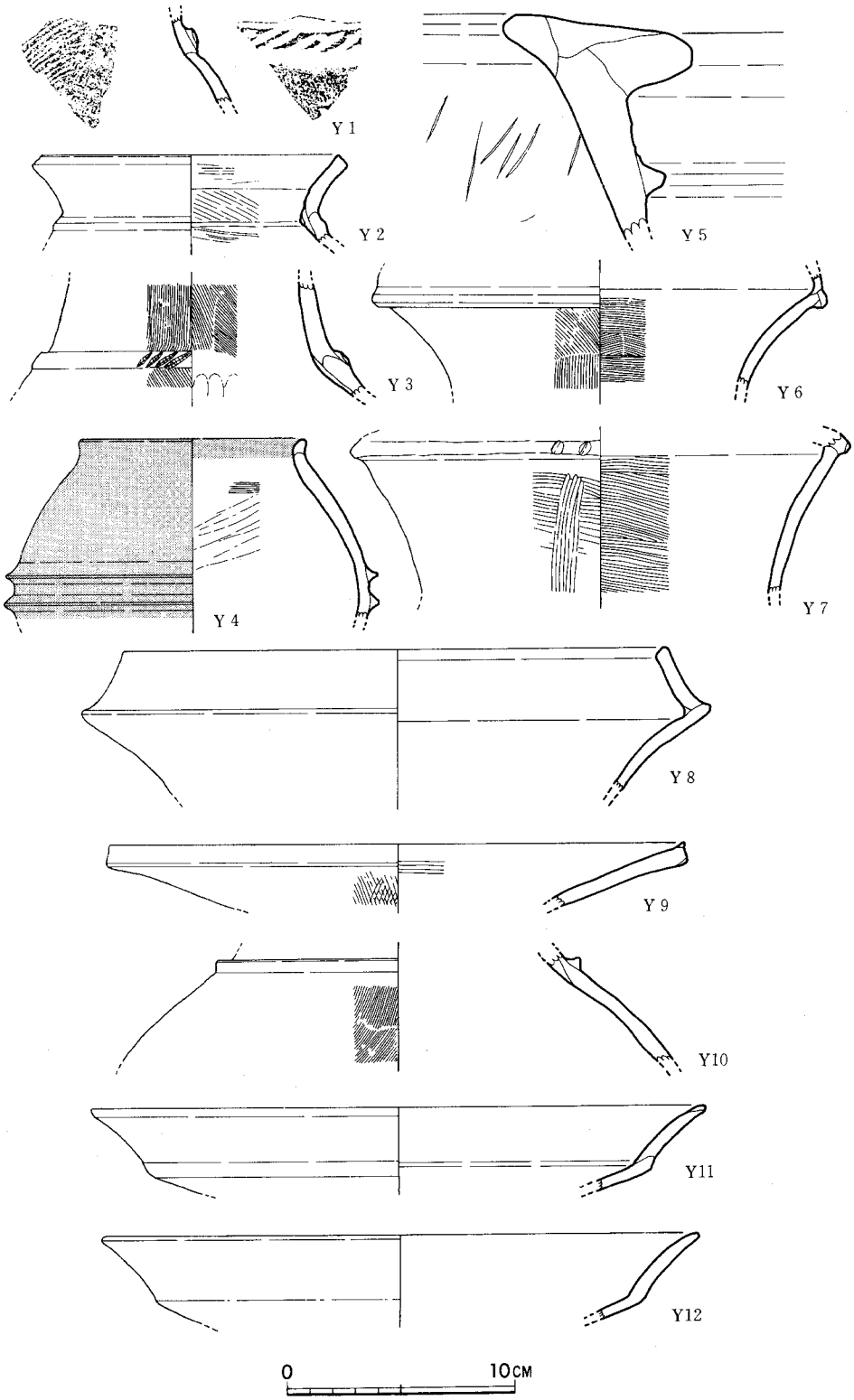


Fig. 24　出土土器実測図(1) (1/3)

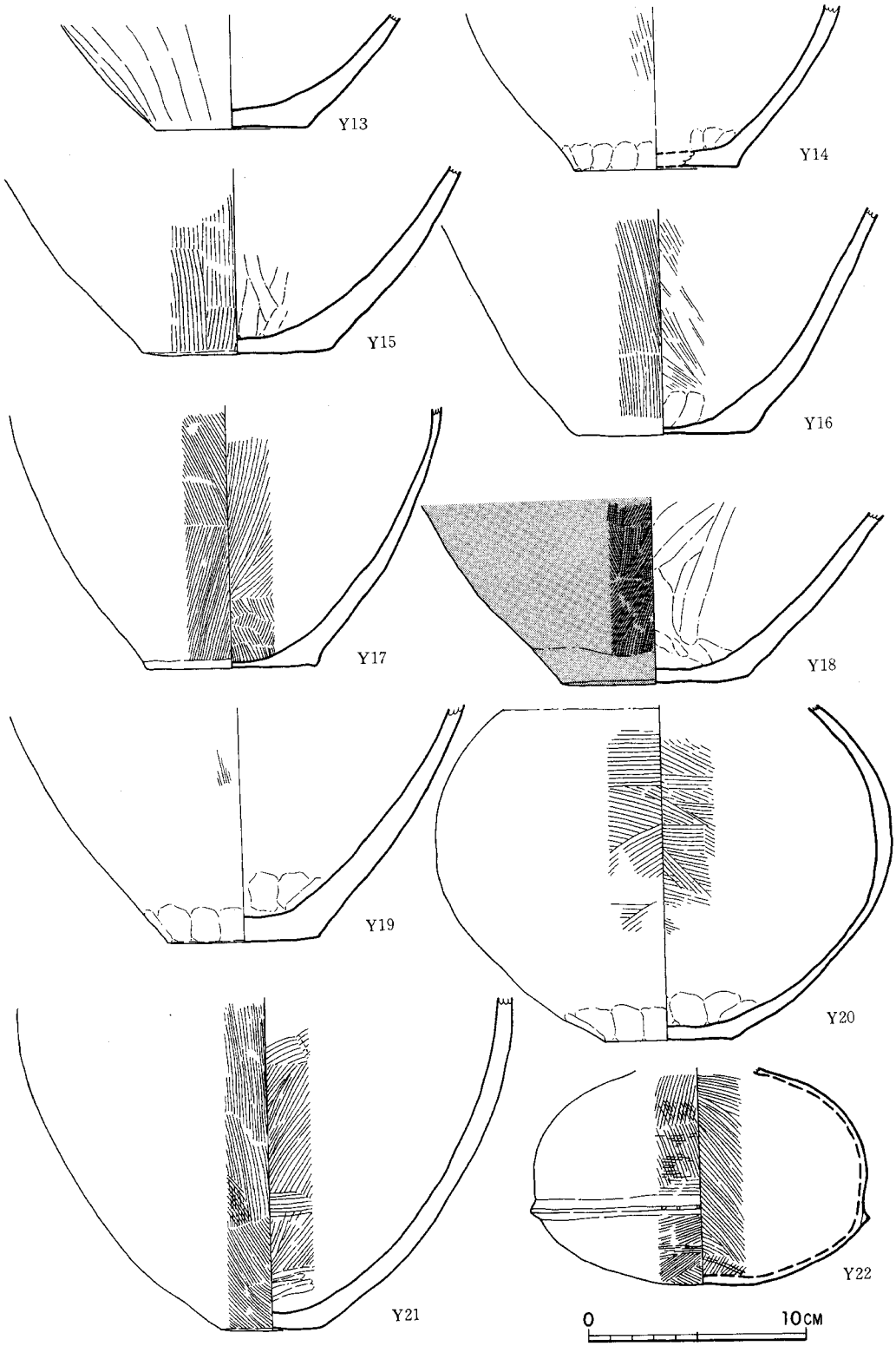


Fig. 25　出土土器実測図(2)（1/3）

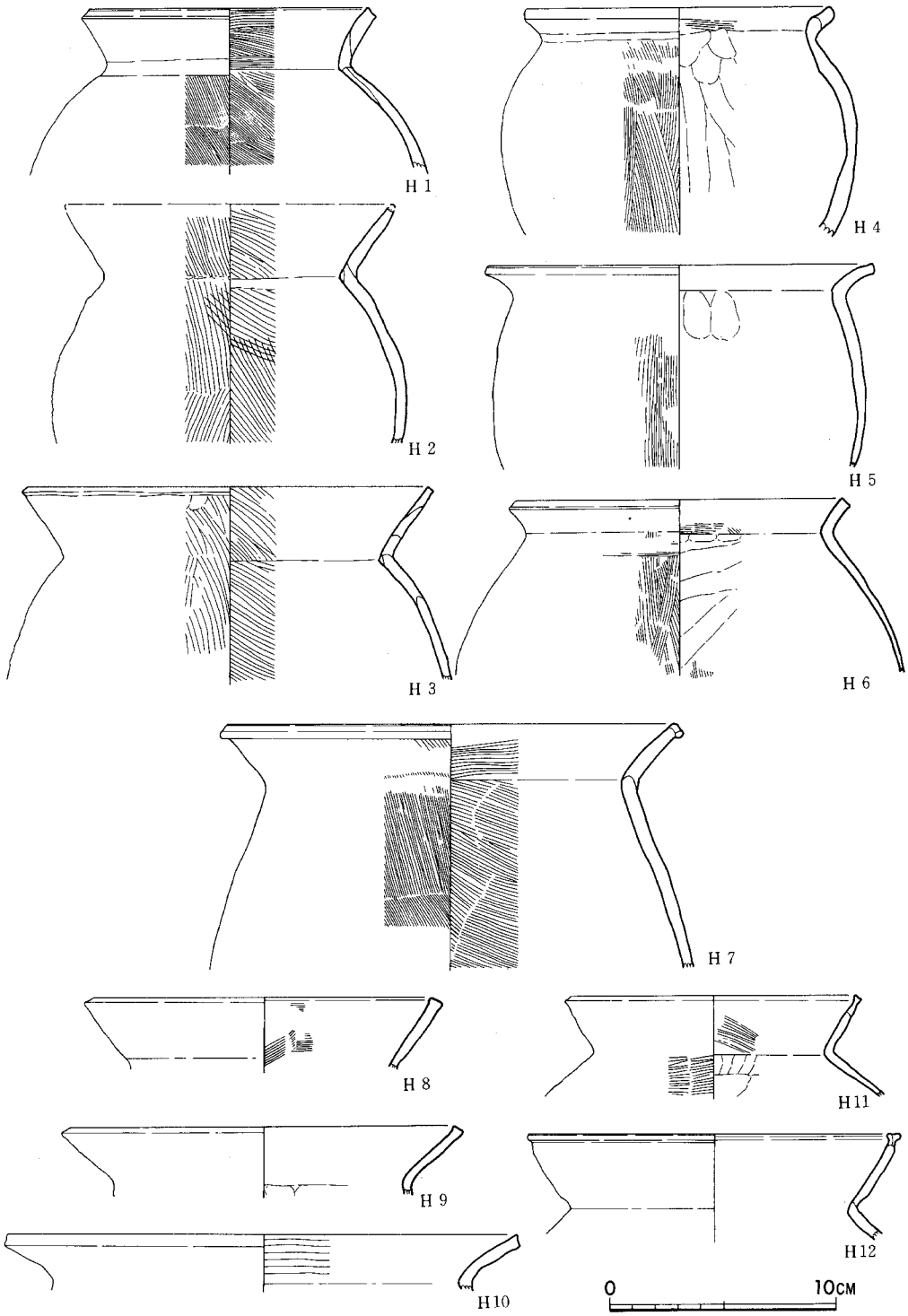


Fig. 26　出土土器実測図(3)（1/3）

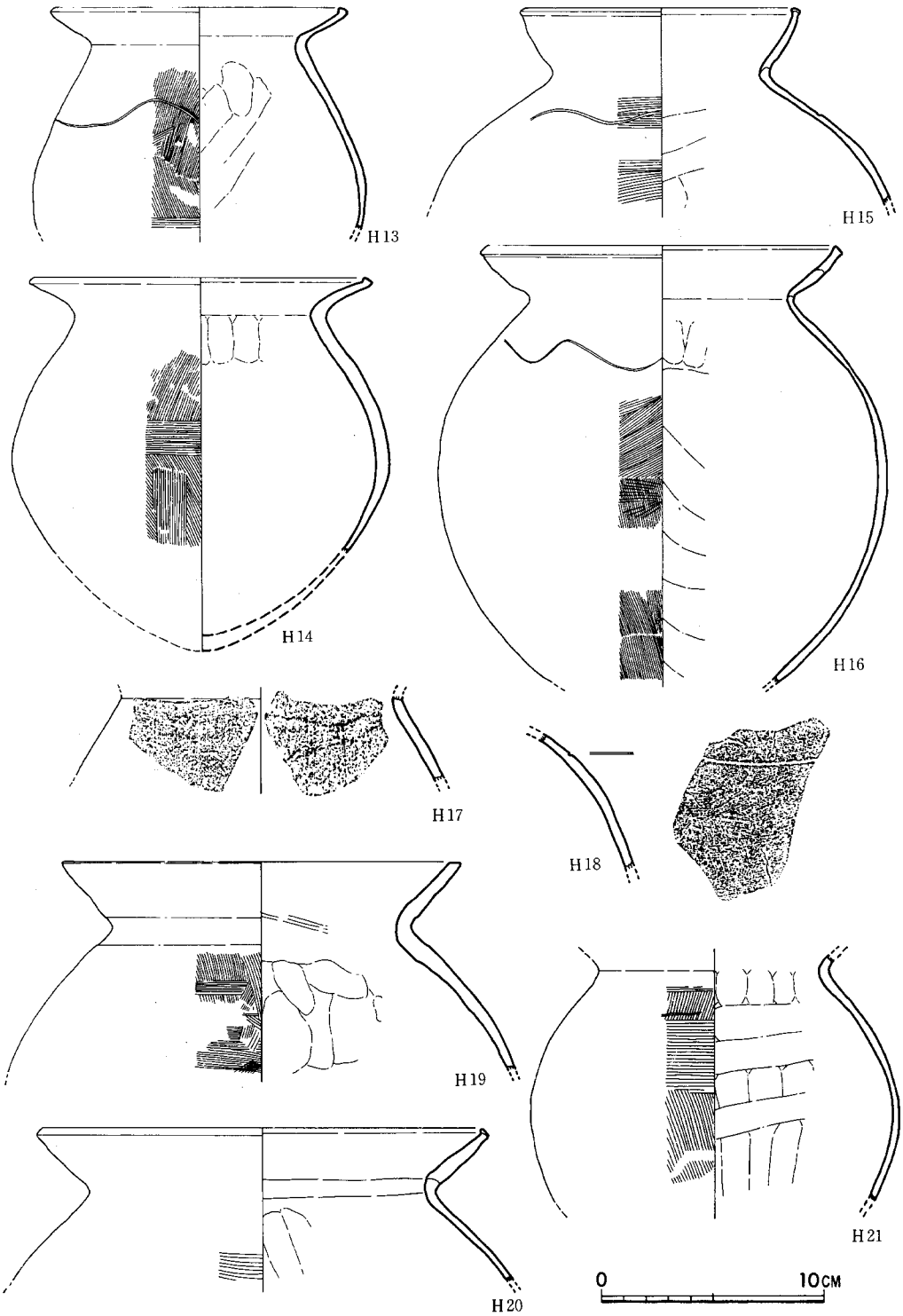


Fig. 27　出土土器実測図(4)（1/3）

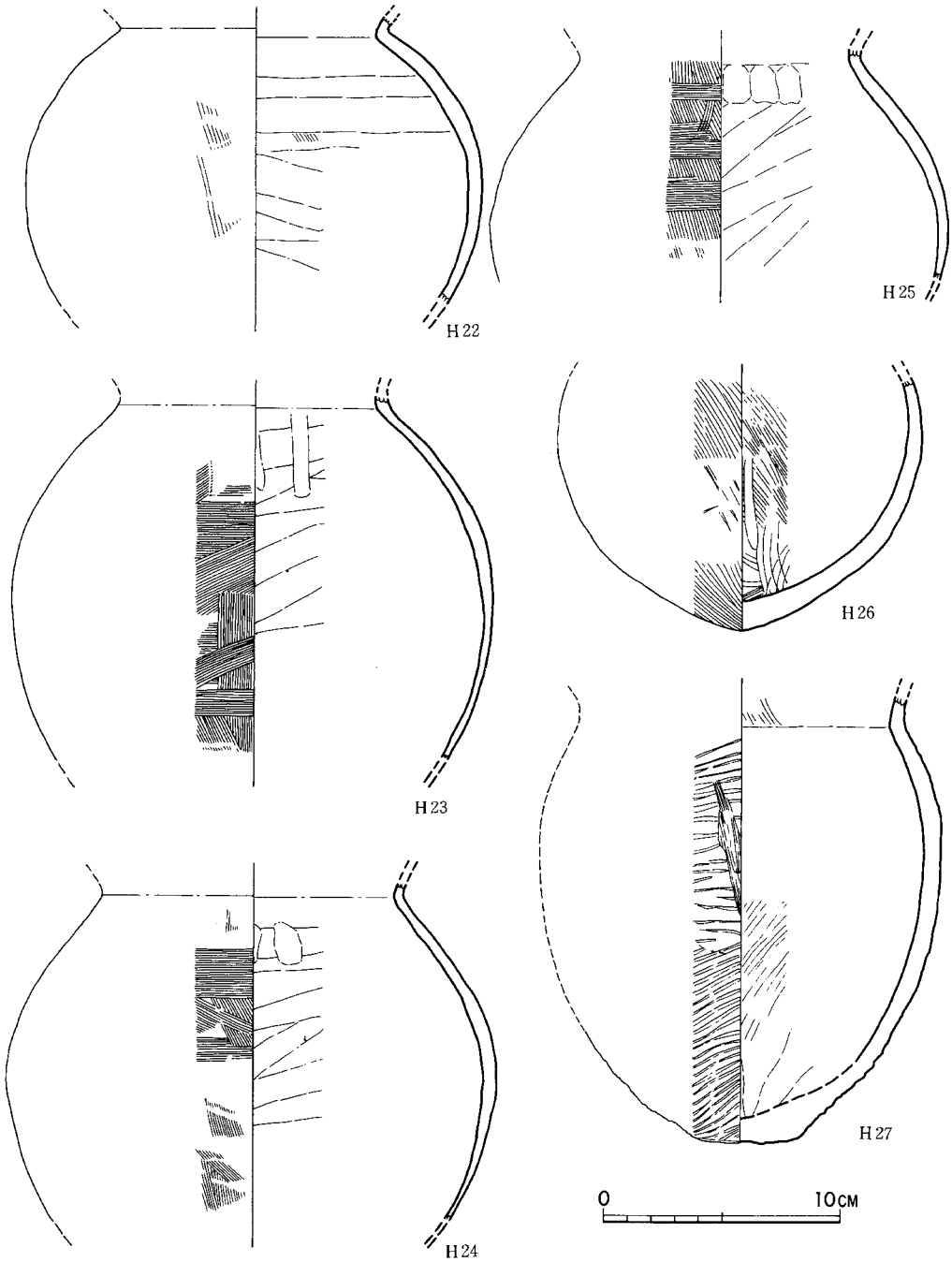


Fig. 28　出土土器実測図(5)（1/3）

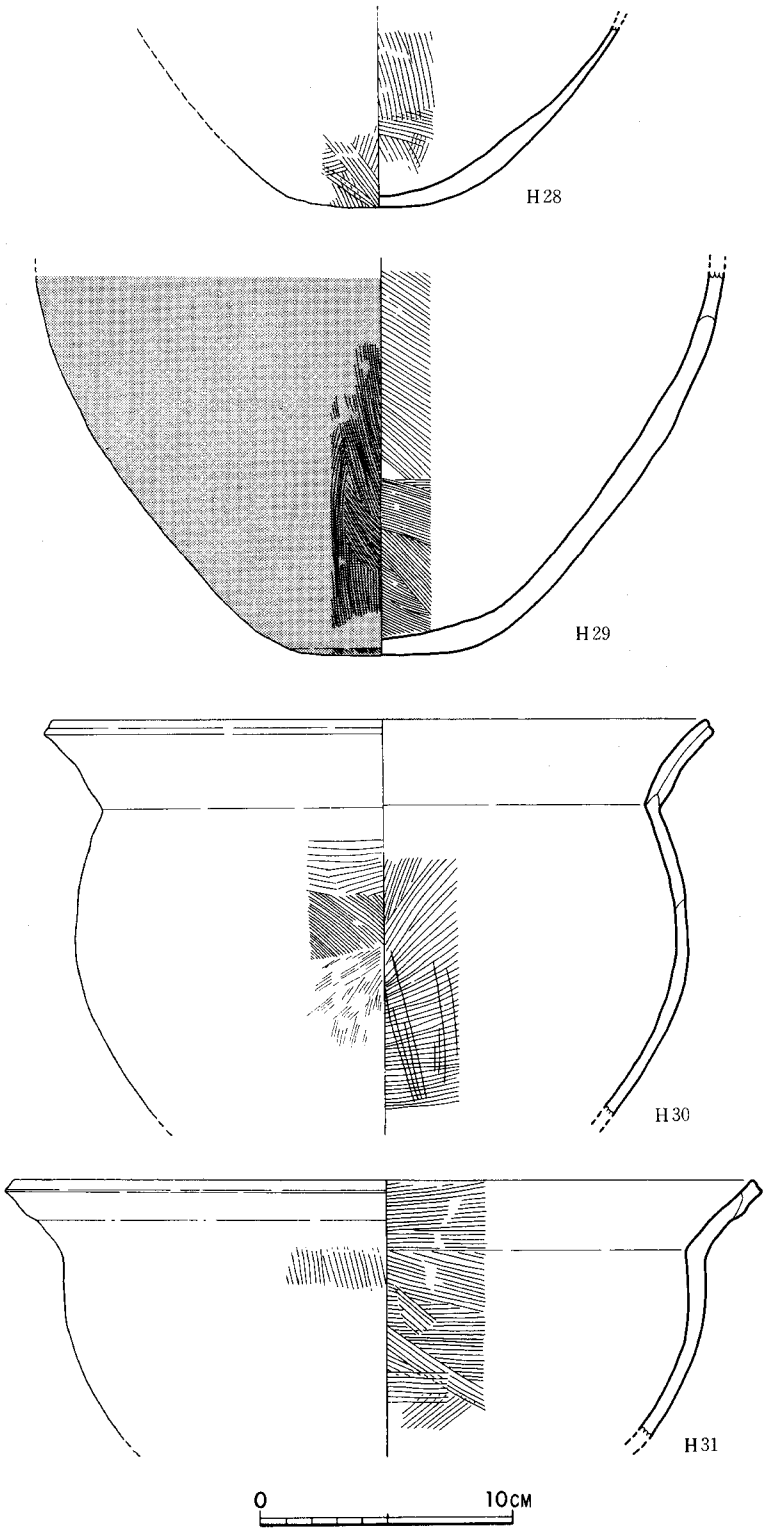


Fig. 29　出土土器実測図(6) (1/3)

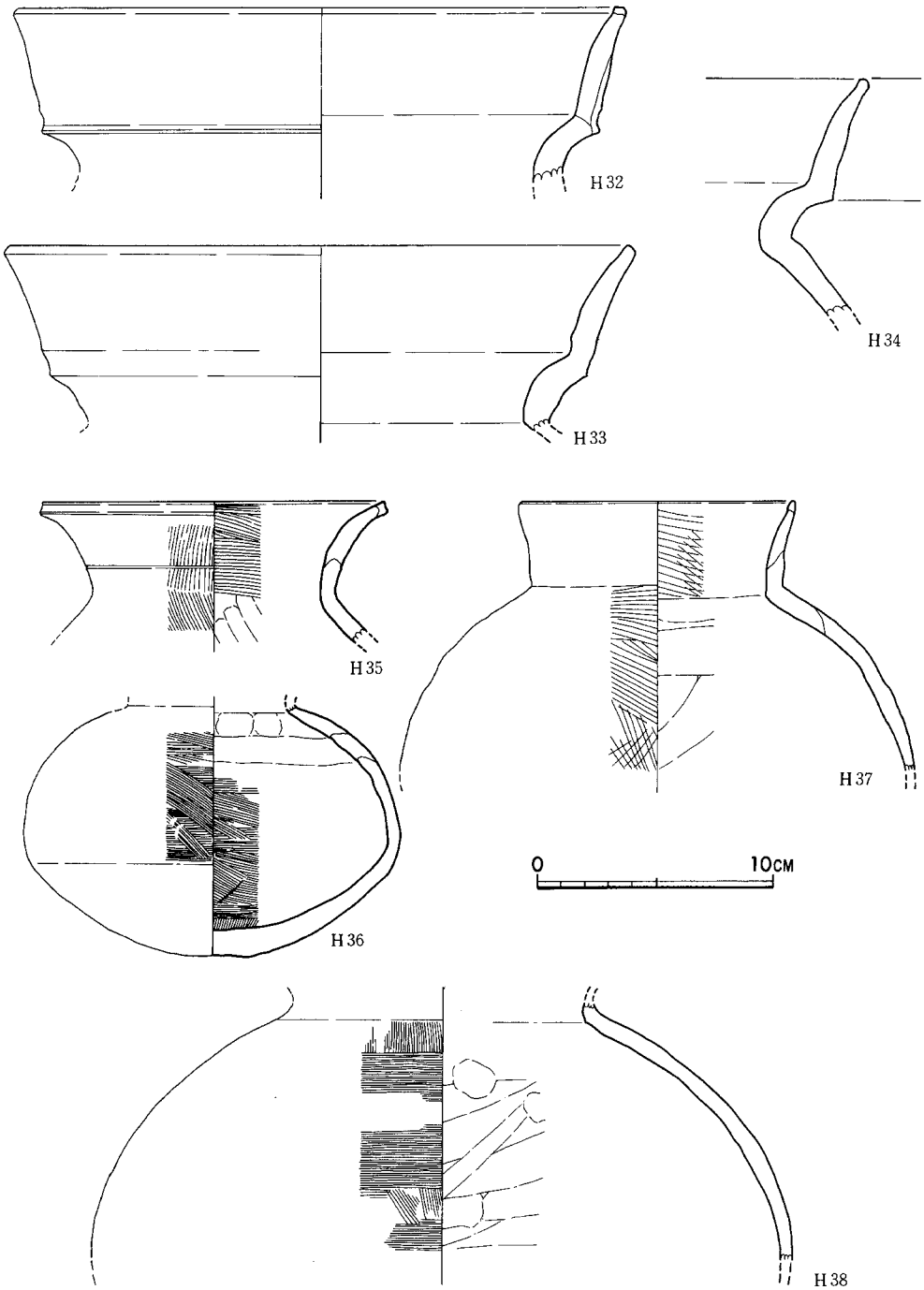


Fig. 30　出土土器実測図(7)（1/3）

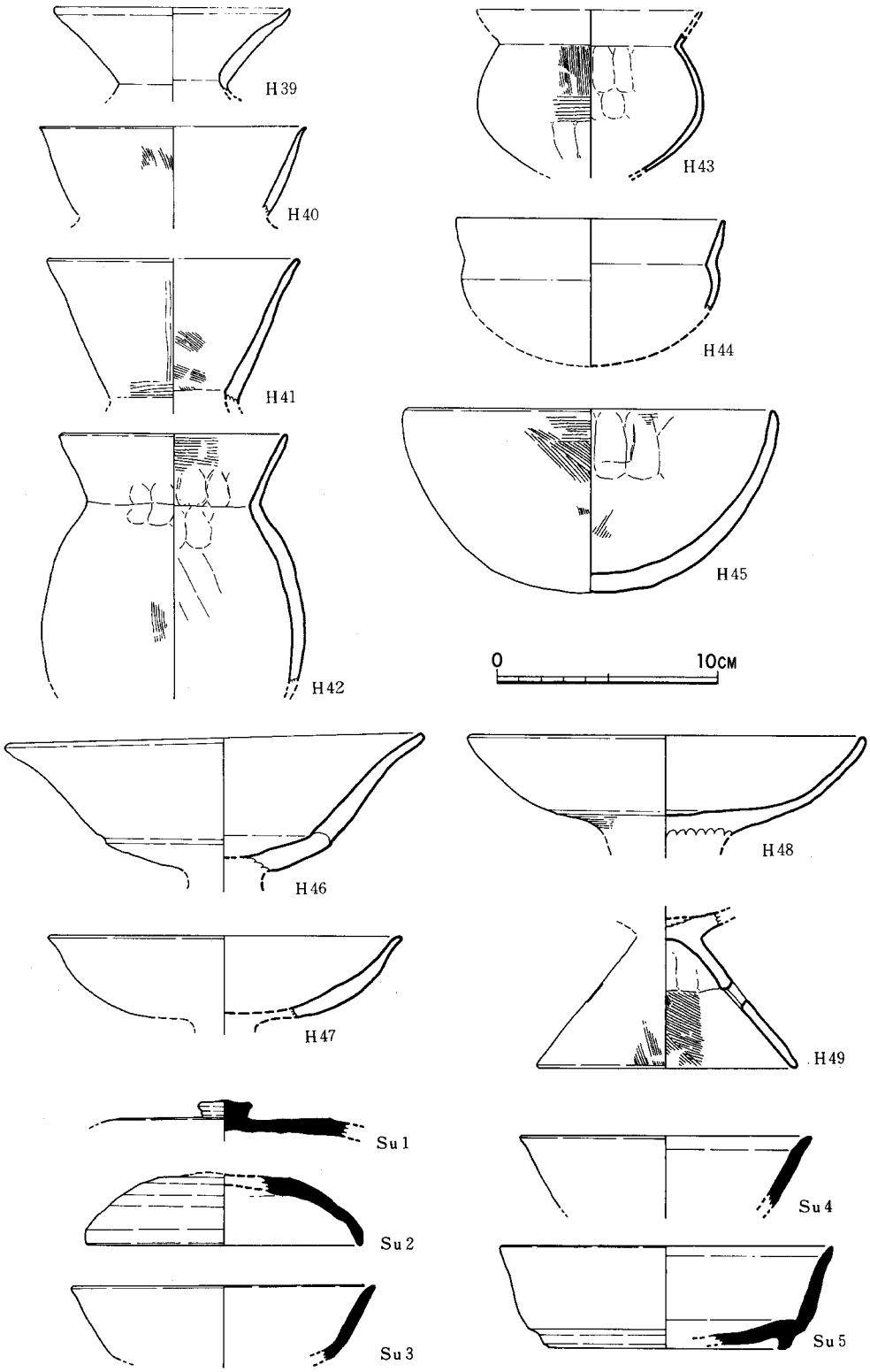


Fig. 31 出土土器実測図(8) (1/3)

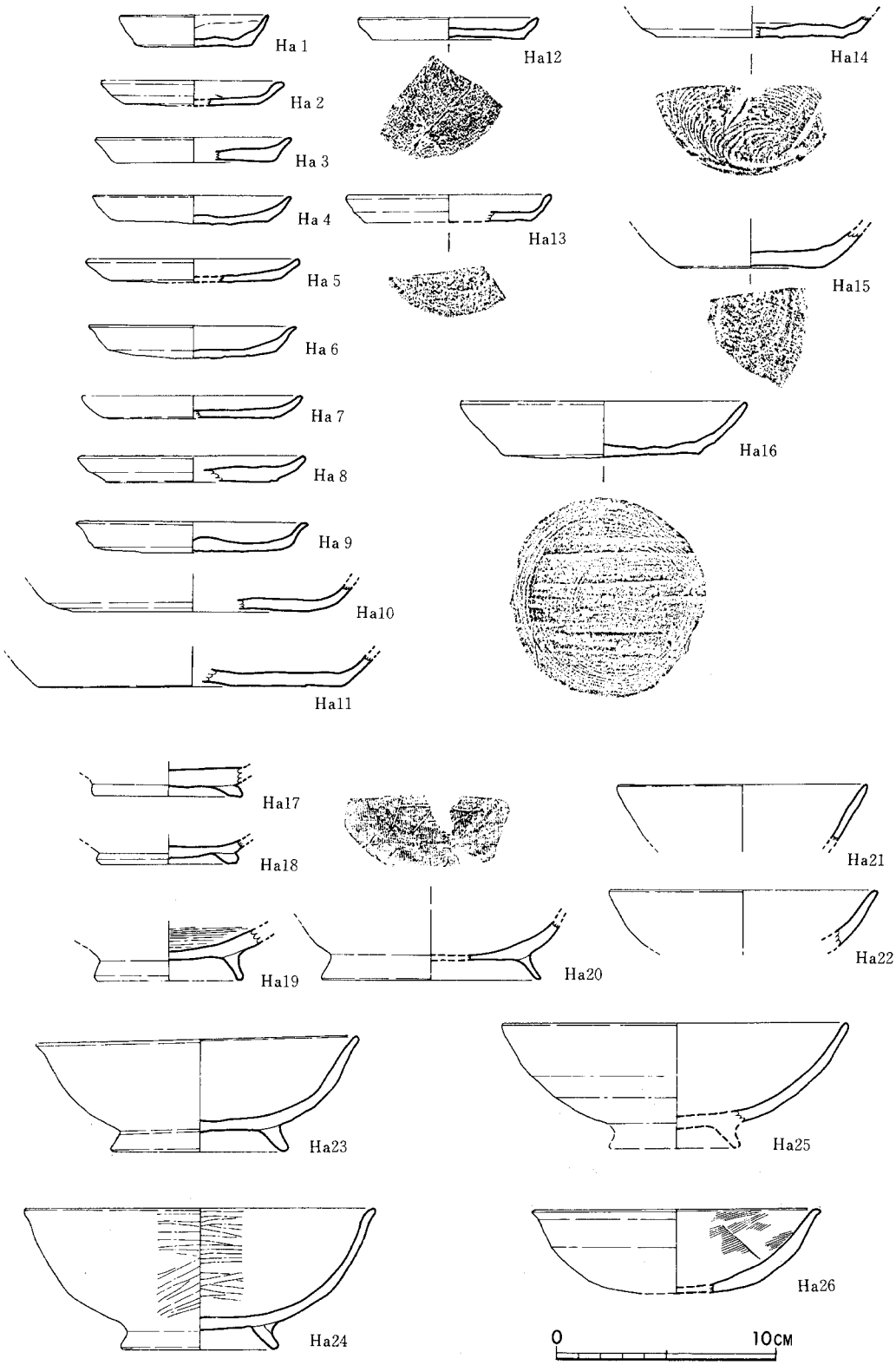


Fig. 32 出土土器実測図(9) (1/3)

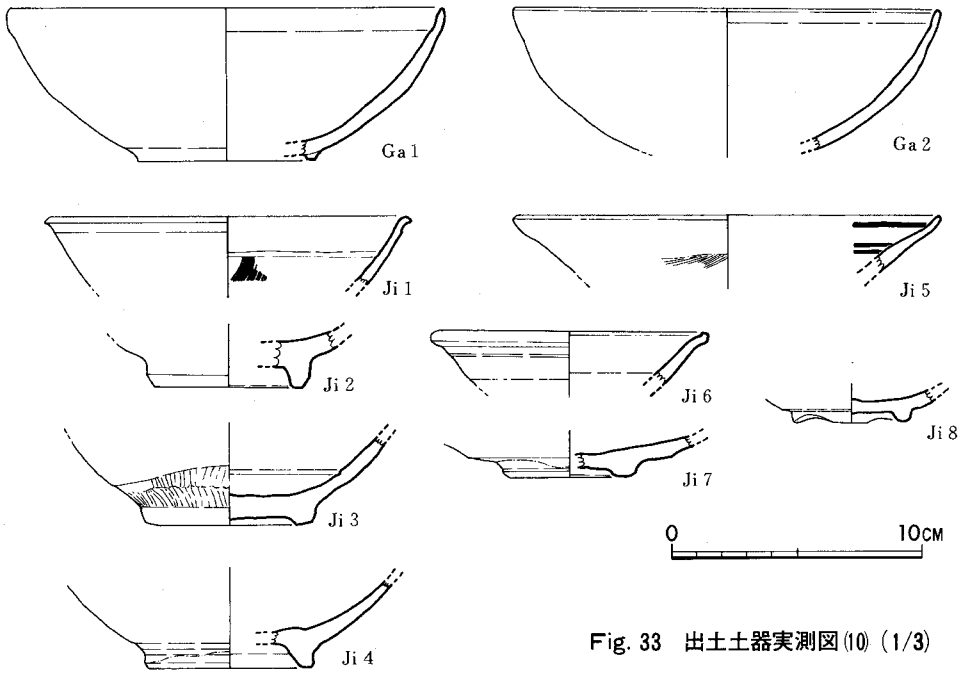


Fig. 33　出土土器実測図(10)（1/3）

出土土器観察表

—凡　例—

- 番号欄は　Y→弥生式土器、H→古墳時代土師器、Su→須恵器、Ha→歴史時代土師器、Ga→瓦器、Ji→磁器の略号である。
- 遺構は第1号～4号溝をM1～M4と略記する。
- 法量欄は　1．口径　2．体部径　3．器高 とするが1(底)としたものは底部径である。
- 備考欄は　1．胎土　2．焼成　3．色調　4．その他 である。

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y1 Fig. 24	M4 柵2	壺	1． 2． 3．	頸部小破片。 頸部に一条の幅ひろく、低い刻目突帯を付す。(ハケ目原体による)	外面はタテハケ目後ヨコナデ。 内面は粗いナナメハケ目後にヨコナデ。	1．密：精良 2．堅緻 3．淡褐色
Y2 Fig. 24	北側台地 落込み 粗砂層	壺	1．13.0 2． 3．	緩く外反する短かい口縁部下端につまみあげの低い突帯を付す。	外面はヨコナデ。 内面は粗いヨコハケ後にヨコナデ。	1．粗：粗砂を含む 2．堅緻 3．淡黄褐色
Y3 Fig. 24	M4 南西	壺	1． 2． 3．	頸部小破片。 頸部に低い刻目突帯（ハケ目原体）一条を付す。	外面はタテハケ目。 内面は口縁部ハケ目、体部は指おさえ。	1．やや粗：石英粗砂を含む 2．堅緻 3．暗褐色 4．内・外面ともにスス付着

Tab. 6　出土土器観察表(1)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y 4 Fig. 24	北側台地 落際わ 粗砂層	壺	1. 9.8 2. 15.6 3.	体部が卵形を呈し、上端部に直立する小さい口縁を形づくる。 体部に2条の三角突帯を付す。	外面ヘラミガキ。 内面は一部にハケ目をのこし他はヘラ状のものでナデあげ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 外面・内面一部丹塗り
Y 5 Fig. 24	C－2 地山直上	甕 (甕棺)	1. 2. 3.	口縁部の⅛残存。 口唇部が内外に発達した口縁部は外側に傾斜し、近くに一条の三角突帯を付す。	外面は磨滅。 内面はヘラ状のもので掻きあげ。	1. 密：小砂粒を含む 2. 堅緻 3. 黄褐色 4. 内面に黒斑
Y 6 Fig. 24	M 4 南	壺	1. 2. 3.	口縁部小破片で口唇部欠損。 二重口縁となる。	外面は細かいタテハケ目。 内面はヨコハケ目後にヨコナデ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 黄褐色
Y 7 Fig. 24	M 4 南	壺	1. 2. 3.	口縁部小破片。 屈曲部に刻目を付す。	外面はヨコハケ目後ヘラによる暗文風のタテナデ。 内面はヨコハケ目。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 暗褐色
Y 8 Fig. 24	M 4 南	壺	1. 24.0 2. 3.	¼残存。 朝顔状に外反する口縁部は端部近く内傾して屈曲する二重口縁。	全体に磨滅のため不明。	1. 粗：砂粒を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
Y 9 Fig. 24	M 4	壺	1. 25.4 2. 3.	体部は朝顔状にひらき、上端部は鋭くとがる。 器種については脚部である可能性もある。	外面は粗いタテハケ目後に口縁端部ヨコナデ。 内面は粗いヨコハケ目後にヨコナデ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色
Y10 Fig. 24	M 4	壺	1. 2. 3.	頸部に鋭い三角突帯一条を付す。	外面はタテハケ目後ヨコナデ。 内面はヨコナデ、指おさえ。	1. 石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗黄褐色
Y11 Fig. 24	M 4	高坏	1. 27.0 2. 3.	¼残存。 坏部は浅く、屈折部は丸味をもった段を有し、口縁は直線的に緩く外反する。	内・外面ともにタテ・ヨコのヘラミガキ。	1. 密：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 黒褐色
Y 12 Fig. 24	M 4	高坏	1. 26.0 2. 3.	坏部⅙残存。 坏部口縁がゆるく反転してひらく。	坏部外面のうち屈曲部以下はヘラミガキ、以上はヨコナデ。 坏部内面はヨコナデ。 全体に磨滅がはげしい。	1. 密：小砂粒を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色
Y13 Fig. 25	M 4	甕	1. 7.0(底) 2. 3.	安定した平底で、若干あげ底となる。	外面はヘラによる規則的なヘラナデおろし。 内面はヘラナデ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 黒褐色

Tab. 7　出土土器観察表(2)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y14 Fig. 25	M4 北	甕	1.76(底) 2. 3.	⅓残存。 安定した平底で若干あげ底気味となる。	外面は体部に荒いタテハケ目、同下端部に指おさえ。 内面は底部おさえ、体部が押圧ナデ後にナデ。	1. 密：石英細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 体部外面に丹塗りの痕跡
Y15 Fig. 25	M4 P9	甕	1. 8.4(底) 2. 3.	底部は外面が丸味をもち、周辺が接地しない。	外面は粗いタテハケ目。 内面は押圧ナデあげ。	1. 粗：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡黄褐色 4. 体部外面に黒斑
Y16 Fig. 25	M4 柵2	甕	1. 8.0(底) 2. 3.	安定した大形の平底底部で端部は丸い。	外面はタテの粗いハケ目後に底部端をヨコナデ。 内面は底部ヘラナデで体部はヘラによる掻きあげ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 軟弱 3. 淡灰褐色
Y17 Fig. 25	M4	甕	1. 7.8(底) 2. 3.	安定した大形の平底底部。	内・外面ともに粗いハケ目。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡灰褐色 4. 体部端に黒斑
Y18 Fig. 25	M4 柵2 P9	甕	1. 8.6 2. 3.	安定を欠く平底底部。	外面は細かいタテハケ目後に底部端をヨコナデ。 内面は底部おさえ、体部はこの後に指によるつよい押圧ナデ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡灰色 4. 外面丹塗り
Y19 Fig. 25	M4 南西	甕	1. 7.0(底) 2. 3.	安定を欠く平底底部。	外面は一部にタテハケ目、他はナデ。内面は底部に押圧ナデ、他はナデ。	1. 粗：粗砂粗を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 底部付近外面にスス付着
Y20 Fig. 25	M4 南	無頸壺	1. 5.9(底) 2. 21.1 3.	口縁部欠損。 半球形の体部に小さいあげ底気味の底部をつける。	外面は上半部にヨコ・タテの粗いハケ目下半部は端部にオサエをのこし、他はナデ。 内面は押圧ナデ後に上半部は粗いヨコ・ナナメの粗いハケ目。	1. やや粗：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 外面にスス付着
Y21 Fig. 25	M4 柵2	甕	1. 4.6(底) 2. 3.	底部は小さく不安定である。	外面は粗いタテハケ目。 内面は底部をヘラ状のものでナデ体部は粗いヨコ・タテの粗いハケ目。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡灰褐色 4. 外面丹塗り
Y22 Fig. 25	M4 柵1	壺	1. 2. 16.8 3.	口縁部欠損、他は完形。 口縁部は長頸となるか。 体部は半球状となり、中位より下った部分に低い一条の刻目突帯を付し、底部は外面中央がやや窪む。	外面は突帯上部がタテハケ目後にヨコミガキ、下部はヨコヘラミガキ。 内面は粗いタテハケ目。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 暗黄褐色 内面は黒色
H1 Fig. 26	M4 柵2	甕	1. 12.4 2. 3.	球状体部に短かく直線的に外方にひらく口縁部を付す。	外面は口縁ヨコナデ、体部細かいタテハケ目。 内面はタテ・ヨコの細かいハケ目。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色

Tab.8　出土土器観察表(3)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H 2 Fig. 26	M 3 暗青灰色砂層	甕	1. 2. 15.6 3.	⅔残存。 球状体部は頸部でよくしまり、縁部は直線的に外反する。 内面は鋭い稜線をもつ。	外面は非常に粗いタテハケ目。 内面は同様に粗いナナメハケ目後に頸部をヨコナデ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 外面にスス付着
H 3 Fig. 26	M 4 南	甕	1. 18.0 2. 3.	¼残存。 H 2と同様の特徴を有する。 口縁端部は上・下に小さく突出る。	外面は粗いタテハケ目後に口縁端部近くを一部ヨコヘラケズリ。 内面は口縁部・体部ともに粗いハケ目。	1. やや粗：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 外面体部下半はスス付着
H 4 Fig. 26	M 4 柵 2	甕	1. 13.4 2. 15.8 3.	球状のいびつな体部は頸部のしまりが弱く、口縁部は短かく外反する。	外面は粗いタテハケ目後口縁部ヨコナデ。 内面は口縁部ヨコハケ、体部はオサエ・指ナデあげ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 暗褐色
H 5 Fig. 26	M 4 南	甕	1. 17.0 2. 3.	¼残存。 体部は上部でよくしまり、口縁部は短かく反転する。	外面口縁部は直下までヨコナデ。 体部はタテハケ目。 内面は体部との境に指おさえ。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡灰褐色 4. 体部内面に黒斑
H 6 Fig. 26	M 4 P10	甕	1. 14.6 2. 3.	¼残存。 体部は頸部でよくしまり、非常に短かい口縁部は直線的に外反する。	外面は粗雑なタテハケ目後口縁部をヨコナデ。 内面は口縁部ヨコ・体部タテのハケ目後に体部ヘラナデアゲ、頸部指おさえ、口縁上部ヨコナデ。	1. やや粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 口縁・外面にスス付着
H 7 Fig. 26	M 4 南	甕	1. 22.3 2. 3.	口縁部の⅓残存。 体部は下方に従って膨らみを増す。口縁部は短かく、鋭く外反して、内面に稜をもち、下端部は垂れる。	外面はタテハケ目後に口縁部ヨコナデ。 内面は体部が押圧ナデ後にナナメハケ目。口縁部はヨコハケ目後に上部をヨコナデ。	1. やや粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡黄褐色 4. 外面にスス付着
H 8 Fig. 26	M 4 南	甕	1. 15.0 2. 3.	口縁部⅓残存。 ほぼ直接的に外反する口縁部は端部で内側に小さく突出する。	口縁外面ヨコナデ。 口縁内面ヨコハケ目。	1. 密：小砂粒を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 外面にスス付着
H 9 Fig. 26	M 4	甕	1. 17.0 2. 3.	口縁部小破片。 口縁部は緩く内弯気味に外開し、端部が内側に小さく突出する。	外面はヨコナデ。 内面のうち口縁部は粗いヨコナデ、体部はヘラナデ。	1. 密：細破を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 外面にスス付着
H10 Fig. 26	M 4 南	甕	1. 22.6 2. 3.	口縁部小破片。 口縁部はゆるい膨らみをもって外反し、上端部はつまみあげて尖る。	外面は口縁部ヨコナデ、体部はヨコナデ、体部はヨコの非常に細かいタタキ。 内面は口縁部細かいハケ目、頸部ヘラナデでこれ以下はヨコヘラケズリ。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 外面にスス付着
H11 Fig. 26	M 3 粘質砂層	甕	1. 12.6 2. 3.	口縁部小破片。 外方にひらく短い口縁部は端部が内側に小さく突出する。	外面は口縁部ヨコナデ、体部はヨコの非常に細かいタタキ。 内面は口縁部細かいハケ目、頸部ヘラナデでこれ以上はヨコヘラケズリ。	1. やや粗：石英細砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 外面にスス付着

Tab.9　出土土器観察表(4)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H12 Fig. 26	M 4 北	甕	1．16.4 2． 3．	¼残存。 頸部はよくしまり、内弯気味に外にひらく口縁部は端部で両側に突出する。	内・外面ともにヨコナデ。	1．密：細砂を含む 2．堅緻 3．灰黒色 4．外面にスス付着
H 13 Fig. 27	M 4 P 5	甕	1．12.8 2．15.0 3．	H14と同一の特徴をもち、器壁はよくととのえられる。	外面は磨滅が激しいが、細かいタテ・ヨコハケ目後に波状沈線文を描く、口縁部はヨコナデ。 内面は口縁部ヨコナデ、体部は粗いナナメのヘラケズリ後に頸部おさえ。	1．密：石英細砂を含む 2．堅緻 3．淡褐色
H14 Fig. 27	M 4 南	甕	1．14.8 2．16.8 3．	⅓残存。 体部は胴中位の膨みがつよく頸部はよくしまり、外反する短い口縁部は上端でひき出されて突出する。	外面はタテ・ヨコのハケ目後口縁部をヨコナデ。 内面は口縁部ヨコナデ、頸部は指おさえ、体部はヘラによるナデあげ。	1．密：微砂を含む 2．堅緻 3．淡褐色 4．外面は全面スス付着
H15 Fig. 27	M 4 南	甕	1．13.0 2． 3．	⅓残存。 頸部はよくしまり、内弯気味に外にひらく口縁部がひき出されて内側に小さく突出する。	外面は口縁部ヨコナデ、体部はヨコハケ目後に波状沈線文一条を施す。 内面は口縁部ヨコナデ、体部はヨコヘラケズリ。	1．密：細砂を含む 2．堅緻 3．暗褐色 4．外面にスス付着
H16 Fig. 27	M 4	甕	1．14.20 2．20.10 3．	⅓残存。 体部は球状で頸部がよくしまり、内弯気味に外方にひらく短かい口縁部は端部のナデ調整によって稜角的となる。	外面は口縁・体部上半はヨコナデ中位以下はハケ目、ヨコナデで口縁下にヨコナデ以前に波状沈線文を施す。 内面は口縁部はヘラケズリ。	1．密：精良 2．堅緻 3．黒褐色
H17 Fig. 27	M 4 南	甕	1． 2． 3．	体部小破片。	外面はヨコナデ後にハケ目状工具で波状文を施す。 内面はヘラケズリ。	1．密：石英細砂を含む 2．堅緻 3．暗褐色
H18 Fig. 27	M 4 南	甕	1． 2． 3．	体部小破片。 体部は球状となる。	外面はタテ・ヨコの非常に細かなハケ目後一条の沈線文を施す。 内面はヘラケズリ。	1．やや粗：石英粗砂を含む 2．堅緻 3．黒褐色 4．外面にスス付着
H19 Fig. 27	M 4 南	甕	1．17.8 2． 3．	頸部はよくしまり、内弯気味。外方にひらく口縁部は端部が平坦となる。	外面は口縁部ヨコナデ、体部は細かいヨコ・タテのハケ目。 内面は口縁ヨコナデ、頸部の一部にナナメハケ目、体部はヨコヘラケズリ。	1．やや粗：粗砂を含む 2．堅緻 3．淡黄褐色 4．外面にスス付着
H 20 Fig. 27	M 4 南	甕	1．20.2 2． 3．	¼残存。 内弯気味に外方にひらく縁部は端部で跳ねあげ状口縁となり内側に突出する。	外面は肩に荒いヨコハケ目を残す以外は全てヨコナデ。 内面は口縁、頸部はヨコナデ、体部下半はヨコヘラケズリ。	1．密：石英粗砂を含む 2．堅緻 3．暗褐色 4．外面一部にスス付着
H21 Fig. 27	M 4 南	甕	1． 2．16.6 3．	⅓残存。 口縁部・底部欠損。 体部は球状にふくらみ、頸部のしまりがつよい。	外面はヨコ・タテの交互の細かいハケ目後に口縁下をヨコナデ、またハケ目以前の波状沈線が一部のこる。 内面は頸部を指おさえ、体部の下半を上方、上半をヨコのヘラケズリ。	1．密：細砂を含む 2．堅緻 3．暗黄褐色

Tab.10 出土土器観察表(5)

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H22 Fig. 28	M4 南	甕	1. 2. 19.4 3.	¼残存。 口縁部・底部を欠くが、体部は卵形を呈し、頸部はよくしまる。	外面はタテハケ目調整後ナデで頸部はヨコナデ。 内面は上半がつよい押圧ヨコナデ。下方はナナメの粗いヘラケズリ。	1. 密：細砂粒を含む 2. 堅緻 3. 淡灰褐色 4. 外面にスス付着
H23 Fig. 28	M4 西南	甕	1. 2. 20.4 3.	⅓残存。 口縁部・底部を欠くが、体部は卵形を呈し、頸部はよくしまる。	外面は細かいハケ目調整後頸部ヨコナデ。 内面はナナメの粗いヘラケズリ後に押圧ナデ。 器壁は非常に薄く調整されている。	1. 粗：粗砂粒を含む 2. 堅緻 3. 乳灰色～淡灰色 4. 外面全部にスス付着
H24 Fig. 28	M4 南	甕	1. 2. 20.8 3.	½残存。 口縁部・底部を欠くが、体部はやや膨らみをもった卵形を呈し、肩部をもってしまる。	外面はタテ・ヨコの細かいハケ目調整、頸部はこの後荒いヨコナデ。 内面は体部下半がタテの押圧ナデ。上半は粗いヘラナデ後に頸部おさえ、ヨコナデ。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 外面にスス付着
H25 Fig. 28	M4 南	甕	1. 2. 19.6 3.	⅓残存。 口縁・底部欠損。 体部は半球形を呈し、頸部はよくしまる。	外面はタテ・ヨコの交互の細かいハケ目。内面は頸部指おさえ、体部がヘラによるナデあげ。	1. 密：石英細砂を含む 2. 堅緻 3. 暗黄褐色 4. 外面全体にスス付着
H26 Fig. 28	M4	甕	1. 2. 3.	体部は卵形を呈し、底部は丸味をもって尖る。	外面は粗いタテハケ目で一部をナデ。内面はタテハケ目後ヘラによる掻きあげ、ヨコナデ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 黒褐色 4. 外面にスス付着
H27 Fig. 28	M4 柵2	甕	1. 4.0(底) 2. 16.8 3.	⅓残存。 口縁部欠損。 体部は長い卵形をなし、底部は小さい平底となり、口縁は急激には外反せず緩いものとなろう。	外面はヨコの粗いタタキ後に頸部ヨコナデ、体部は数個所にハケ目工具の端部でタテに掻いたものがみられる。 内面は底部にヘラケズリ、体部ナデで、口縁に粗いハケ目。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗黄褐～暗褐色
H28 Fig. 29	M4 柵1 P11	甕	1. 2. 3.	底部は接地部分が小さく不安定である。	外面は粗いタテハケ目。 内面は押圧ナデ後に粗いタテ・ナナメのハケ目。	1. 密：細・粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡黒褐色 4. 底部に黒斑
H29 Fig. 29	M4	甕	1. 7.4(底) 2. 3.	不安定な平底。	外面は細かいタテハケ目。 内面は上・下半部が異なったハケ目。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡灰褐色 4. 外面は丹塗り
H30 Fig. 29	M4 北 粗砂層	鉢	1. 26.0 2. 3.	⅓残存。 底部を欠損。 体部は膨らみは弱く、口縁部は内面に鋭い稜を残して外方に開く。口縁端部は丸く、中窪みとなる。	外面はタテ・ヨコのハケ目後体部上位をのぞいてヨコナデ。 内面は体部がタテ・ヨコの粗いハケ目、口縁部はヨコナデ。	1. 粗：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色
H31 Fig. 29	M4 P8	鉢	1. 29.6 2. 3.	¼残存。 体部は最上部で直立気味となり、口縁部は鋭く外方に長くのびる。	外面体部は上部に粗いタテハケ目を残し、他はタテハケ後ナデ仕上げ。内面口縁部はヨコハケ目、体部も押圧ナデ後にヨコ・ナナメのハケ目。	1. 粗：小・粗砂粒を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色

Tab.11　出土土器観察表(6)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H32 Fig. 30	M3 褐色粗砂層	壺	1. 26.0 2. 3.	口縁部¼残存。 H33、H34と同一の特徴をもつ。	内・外面ともに磨滅のため調整は不明。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗黄褐色
H33 Fig. 30	M4 南	壺	1. 26.2 2. 3.	口縁部⅓残存。 口縁部が長くのびる二重口縁を有し、全体に肉厚である。	外面は全てヨコナデ。 内面もヨコナデか。 全体に磨滅がいちじるしい。	1. 粗：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡黄褐色 4. 口縁外面に黒斑
H34 Fig. 30	M4 北	壺	1. 2. 3.	口縁部小破片。 H33と同様の特徴をもち、1.2～0.8cm 程度に肉厚である。	内・外面ともにヨコナデか。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
H35 Fig. 30	M4 柵2	壺	1. 12.4 2. 3.	口縁部はすなおに外反する。	外面は粗いタテハケ目後に一条の沈線文を施す。 内面は口縁部はヨコハケ目、体部は指ナデあげ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡黄褐色
H36 Fig. 30	M4 南	壺	1. 2. 16.0 3.	体部の⅓欠損。 口縁部を欠失。 突端部の鈍い算盤玉形の体部を有し、底部非常に小さい平端部をなす。	外面は上半がタテ・ヨコの細かいハケ目、下半はヘラ状工具（幅2mm）による粗いナデ。 内面は上半部中位までタテ・ヨコのハケ目、他は指おさえ、粗いナデ。	1. やや粗：細部を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 外面肩部に黒斑
H37 Fig. 30	M4	壺	1. 11.8 2. 21.8 3.	頸部はよくしまり直立する口縁部は上半部が内弯気味に外方にひらき、端部は小さく内側におれる。	外面は口縁部ヨコナデ、体部は粗いヨコ・タテのハケ目。 内面は口縁部粗いヨコハケ目、体部へラケズリ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 灰褐色 4. 外面体部にスス付着
H38 Fig. 30	M4 南	壺	1. 2. 28.7 3.	頸部～体部¼残存。 体部は半球状を呈し、頸部はよくしまる。	外面はタテ・ヨコの細かいハケ目。 内面は粗いヨコのヘラケズリ後に頸部近くをおさえている。	1. やや粗：粗砂粒を含む 2. 堅緻 3. 淡黄褐色 4. 頸部に黒斑
H39 Fig. 31	M4	丸底壺	1. 10.6 2. 3.	口縁部小破片。 外反する口縁部は端部近くで内弯気味となる。	外面はヘラナデ。 内面は磨滅。	1. やや粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色
H40 Fig. 31	M4 南	丸底壺	1. 12.0 2. 3.	½残存。 口縁部は内弯気味に外方にひらき端部は小さく引き出される。	外面は細かいタテハケ目後にヨコナデ。 内面はヨコナデ。	1. 密：非常に精良 2. 堅緻 3. 黒灰色～灰褐色
H41 Fig. 31	M4	丸底壺	1. 11.5 2. 3.	口縁部の½欠損。 口縁部は直線的に外方にひらく。	外面はタテハケ目後に粗いタテヘラミガキ。 内面はナナメハケ目後にヨコナデ。	1. 密：石英細砂を含む 2. 堅緻 3. 暗褐色

Tab.12 出土土器観察表(7)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H42 Fig. 31	M4	丸底壺	1. 10.4 2. 12.0 3.	¼残存。 体部は下部に従って膨らみの増す形態で、口縁部は直線的に外方に開く。	外面は体部押圧ナデ後細かいタテハケ目。口縁部ナデ。 内面は体部ナデあげ、頸部付近は押圧ナデでこの後に口縁部ヨコハケ目。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
H43 Fig. 31	M4 南	丸底壺	1. 2. 10.2 3.	½残存。 口縁部・底部を欠く。 体部は算盤状に半球形にふくらみ、口縁部は直線的に外方にひらくであろう。	外面は体部上半をタテハケ目後ヨコヘラミガキ、下半はタテヘラミガキ。 内面は押圧しながらナデあげている。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 淡褐色
H44 Fig. 31	M4 南	鉢	1. 12.2 2. 3.	口縁部の⅙残存。 体部は膨らみが弱く、最大径部に直立気味の短い口縁部を付す。体部・口縁部との境は鋭い稜を有す。	体部外面は丁寧なヨコヘラナデ、内面はヨコナデ。 口縁部内外面ともにヨコナデ。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
H45 Fig. 31	M4 南	鉢	1. 16.6 2. 3. 8.3	口縁部¼残存。 丸底で体部は内弯気味に外開して口縁部でまるくおさめる。	外面はヨコ・ナナメのハケ目を一部のこす。 内面は口縁部に連続する押圧ナデ体部はタテハケ目後にナデあげ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
H46 Fig. 31	M4	高坏	1. 19.0 2. 3.	口縁部½残存。 坏部屈曲部分は小さい段を有し、緩く外反する口縁部は端部が更に引き出される。	外面はヨコナデ。 内面は体部がヨコナデ後にヘラ状工具によるナデあげ。	1. やや粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
H47 Fig.	M4 P3	高坏	1. 15.8 2. 3.	口縁部⅙残存。 脚部は不明であるが坏部は浅く、口縁をかるくひき出し、端部は小さい平坦面をなす。	外面はナデ・ヨコナデか。 内面はヨコナデ・ヘラミガキか。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 乳白色
H48 Fig. 31	M4 P1	高坏	1. 18.0 2. 3.	口縁部はいびつ。 脚部欠損。 坏部は浅く皿形をなす。	体部外面は上半をヨコナデ、下半をヨコハケ目。 内面はヨコナデ。	1. 粗：石英粗砂を含む 2. 堅緻 3. 淡褐色
H49 Fig. 31	M4 南	器台	1. 2. 3. 11.9(脚)	脚部⅔残存。 坏部を欠くが、脚部は裾に従って直線的に外方に開く。脚中位に2個1対の透穴（焼成前穿孔）あり。	脚外面はタテハケ目後ヨコの丁寧なヘラミガキ。 脚内面は上部ヨコヘラナデ、下部ナナメハケ目。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 明褐色
Su1 Fig. 31	M3	坏蓋	1. 2. 3.	平たい擬宝珠状のつまみを付す。	外面はナデ。 内面はヨコナデ。	1. 密 2. 堅緻 3. 明灰色
Su2 Fig. 31	M4 柵2	坏蓋	1. 12.2 2. 3.	天井部欠損。	内・外面ともにヨコナデ。 轆轤は逆時計回転。	1. 密 2. 堅緻 3. 灰黒色

Tab.13 出土土器観察表 (8)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Su3 Fig.31	M4 南	坏	1. 13.4 2. 3.	底部欠損。 体部は直線的に外方にひらく。	内・外面ともにヨコナデ。	1. 密 2. 堅緻 3. 淡灰色
Su4 Fig.31	M2 上面粗砂層	坏	1. 13.0 2. 3.	口縁部小破片。	内・外面ともにヨコナデ。	1. 密 2. 堅緻 3. 明灰色
Su5 Fig.31	M4 上部	高台付坏	1. 15.0 2. 3. 4.65	底部外端部よりやや内側に低い高台を付す坏で、口縁部はゆるく外方にひき出されている。	内・外面ともにヨコナデ。	1. 密 2. 堅緻 3. 灰黒色
Ha1 Fig.32	表土	皿	1. 6.8 2. 3. 1.5	口縁部は直線的にひき出される。	外面はヨコナデ。	1. 密 2. 堅緻 3. 淡黄褐色
Ha2 Fig.32	M4 北 P16	皿	1. 8.4 2. 3. 1.2	⅓残存。 口縁部はゆるく引出され、端部は肥厚する。	外面はヨコナデ。 底部外面に板目痕をのこす。	1. 密、細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡灰青色
Ha3 Fig.32	M3	皿	1. 8.9 2. 3. 1.1	¼残存。 体部のひき出しが弱く、底部見込みとの区別が困難である。	内・外面ともに磨滅が著しい。	1. 密 2. 堅緻 3. 暗褐色 4. 底部糸切り離しか。
Ha4 Fig.32	M4 北 P5	皿	1. 9.1 2. 3. 1.3	完形品。 口縁部は内弯気味にととのえ端部はとがる。	外面はヨコナデ。 内面のうち体部はヨコナデ、底部はナデ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 淡青灰色 4. 底部糸切り離し
Ha5 Fig.32	M4 北 P8	皿	1. 9.8 2. 3. 1.1	⅓残存。 口縁部は直線的にひき出され、端部はまるくおさめる。	内・外面ともにヨコナデ。 底部外面に板目痕をのこす。	1. やや粗：石英細砂を含む。 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 底部ヘラ切り離し
Ha6 Fig.32	M4 柵2	皿	1. 9.4 2. 3. 1.6	⅓残存。 不安定な底部を有し、口縁端部は小さく外側にひき出される。	内・外面ともにヨコナデ。 底部に粘土紐巻あげ痕と板目圧痕をのこす。	
Ha7 Fig.32	M3	皿	1. 10.0 2. 3. 1.1	¼残存。 口縁部は内弯気味にゆるく引出される。	内・外面ともにヨコナデ。 底部に板目圧痕をのこす。	1. 密 2. 堅緻 3. 淡褐色 4. 底部糸切り離し

Tab.14 出土土器観察表 (9)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Ha 8 Fig. 32	M 3	皿	1．10.4 2． 3．	口縁部のひき出しは非常によわい。	内・外面ともに磨滅。	1．密 2．堅緻 3．淡褐色
Ha9 Fig. 32	M 3	皿	1．10.6 2． 3．1.4	½残存。 底部は接地面が少ない。体部下端も丸味をもち、口縁部は端部で小さく外方に引出される。また底部内面中央は隆起する。	外面のうち底部は巻上げ痕をのこす。 内面は体部ヨコナデ、底部ナデ。	1．密 2．堅緻 3．淡灰色 4．底部外面に黒斑
Ha10 Fig. 32	M 3	皿	1．10.6(底) 2． 3．	口縁部欠損。	内・外面ともに磨滅。 外面底部に板目圧痕を残す。	1．密：粗砂を含む 2．堅緻 3．淡褐色 4．底部糸切り離し
Ha11 Fig. 32	B－Ⅳ区 黒色粘質土	皿	1．14.0(底) 2． 3．	底部小破片。	体部外面はヨコナデ。 底部内面はナデ。	1．密 2．堅緻 3．黄白色
Ha12 Fig. 32	M 3 上部粗砂層	皿	1．8.2 2． 3．1.0	¼残存。 口縁部の引出しはよわく、上端部は尖る。	内・外面ともにナデか。	1．密 2．堅緻 3．淡褐色 4．底部糸切り離し
Ha13 Fig. 32	M 3	皿	1．9.4 2． 3．1.3	⅓残存。 内弯気味にひき出された体部は調整による凹凸が著しく、端部で若干肥厚する。	内・外面ともにヨコナデ。 磨滅がはげしい。	1．密 2．堅緻 3．淡赤褐色 4．底部糸切り離し
Ha14 Fig. 32	M 3	皿	1．8.6(底) 2． 3．	口縁部を欠損。	外面は底部に板目圧痕をのこす。 内面はヨコナデ・ナデ。	1．密：精良 2．堅緻 3．淡褐色 4．底部糸切り離し
Ha15 Fig. 32	M 3	皿	1．3.4(底) 2． 3．	口縁部を欠損。	内・外面ともに磨滅	1．密 2．堅緻 3．淡褐色 4．底部糸切り離し
Ha16 Fig. 32	M 3	皿	1．13.2 2． 3．2.6	完形品。 体部は緩く、内弯気味に外反して端部は角張る。	外面は調整不明 内面はヨコナデ・ナデ。 底部外面に板目圧痕をのこす。	1．密：細砂を含む 2．堅緻 3．淡褐色 4．底部糸切り離し
Ha17 Fig. 32	M 4 北	高台付埦	1．6.8(底) 2． 3．	体部欠損。 高台は低く、タタミ付は幅ひろく、いびつである。	内・外面ともにヨコナデ。	1．密：精良 2．堅緻 3．淡灰褐色

Tab.15　出土土器観察表 (10)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Ha18 Fig. 32	M4 北	高台付埦	1. 6.2(底) 2. 3.	体部欠損。 Ha17と同様の特徴をもつ。	外面ヨコナデ。 内面は丁寧なヘラミガキ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 灰白色
Ha19 Fig. 32	M4 北	高台付埦	1. 6.6(底) 2. 3.	体部欠損。 高台は小さい底部外端に細身の外開きのものを付す。	外面は磨滅のため不明。 内面はヨコヘラミガキで黒色の光沢を放つ。	1. やや粗：粗砂を含む 2. 堅緻 3. 赤褐色
Ha20 Fig. 32	M4	高台付埦	1. 10.0(底) 2. 3.	口縁部を欠くが埦底部の最大部に外開する細身の高台を付す。	外面は全てヨコナデ。 内面は丁寧なナデ調整。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 乳白色 4. 底部外面にヘラ記号あり
Ha21 Fig. 32	M1	埦	1. 11.4 2. 3.	口縁部小破片。	内・外面ともにヨコナデ。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 暗黄褐色 4. 外面にスス付着
Ha22 Fig. 32	M1 No. 19	埦	1. 12.2 2. 3.	口縁部小破片。	内・外面とも磨滅	1. 密 2. 堅緻 3. 明褐色
Ha23 Fig. 32	M4 柵2	高台付埦	1. 14.8 2. 3. 5.2～5.4	完形品。 体部は浅い埦形で口縁部は緩く外方に引き出す。高台は底部外端に踏ん張る安定したものである。	外面はヨコナデ後にナデ。 内面は幅1cm程度のものでナデまわしておりハケ状となる。	1. 密：精良 2. 堅緻 3. 褐白色 4. 口縁の一部にスス付着
Ha24 Fig. 32	M4 P4	高台付埦	1. 16.2 2. 3. 6.5	口縁部½残存。 Ha23と較べて体部に丸味をもち、口縁部の外方への引き出しがつよい。	外面体部は幅約4mm単位の粗いヨコヘラミガキ。 内面は幅5mm単位の粗いヨコヘラミガキ。 内面にのみ炭素吸着作業がなされ黒く滑面となる。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 褐白色(外) 4. 内黒土師器
Ha25 Fig. 32	M4 北7	高台付埦	1. 15.9 2. 3.	体部の½残存。 体部は内弯気味に外方にひらき口縁部でまるくおさめる。	外面は口縁および下端部がヨコナデ。これ以外はヨコヘラミガキ。 内面は口縁がヨコ、これ以下は粗いヨコ・ナナメのヘラミガキ。	1. 密：微砂を含む 2. 堅緻 3. 灰黒色
Ha26 Fig. 32	M4	丸底坏	1. 13.2 2. 3. 3.8	器壁の厚い坏で口縁端部はひき出されて外側に突出する。	外面は口縁付近はヨコナデ、これ以下はヘラミガキ(?)。 内面は非常に細かいハケ目状工具でナデあげている。	1. やや粗：石英細砂を含む 2. 堅緻 3. 淡黄褐色
Ga1 Fig. 33	M3 下部黒色粘土層	高台付埦	1. 17.0 2. 3. 6.1	½残存。 高台部は低く坏底部との境が明らかでなく、内弯しながら外開する体部は端部で直立に近くなり、尖っている。口縁端部付近はわずかに窪む。	内・外面ともにヘラミガキ調整とおもわれるが口縁外面にヨコナデをのこす部分があるが他は不詳。 内面の一部に銀灰色を呈する個所をのこす。器壁は漆黒色を呈する。	1. 密：細砂を含む 2. 堅緻 3. 黒～黒灰色

Tab16 出土土器観察表 (11)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Ga2 Fig. 33	M3 下部黒色粘土層	高台付埦	1. 16.8 2. 3.	⅓残存。 Ga 1 と同様の特徴をもつ。	体部内面下半にナデをのこすが、他はヘラミガキか。 外面口縁部付近は銀灰色となる部分をのこす。 器壁は漆黒色となる。	1. 密 2. 堅緻 3. 漆黒色
Ji1 Fig. 33	M3	高台付碗	1. 14.6 2. 3.	⅙残存。 口縁部は端部で小さく外側にひき出される。	体部内面は浅い幅広の横沈線をひいた後に櫛描き文を施す。 釉は全体均一に掛けられる。	1. 2. 堅緻 3. 淡緑色
Ji2 Fig. 33	表土	高台付埦	1. 6.0(底) 2. 3.	タタミ付きの大きい安定した高台。 龍泉窯素青磁	底部外面の一部をのぞいて全面に厚く施釉する。	1. 2. 3. 淡青緑色
Ji3 Fig. 33	M4 柵2	高台付碗	1. 6.6(底) 2. 3.	タタミ付きの大きい安定したケズリ出し高台を有する碗。	体部下端付近・高台部は露胎となり、これ以外は施釉し、内外面ともに貫入が著しい。	1. 2. 3. 淡灰緑色
Ji4 Fig. 33	M2 上面粗砂層	高台付碗	1. 6.6(底) 2. 3.	タタミ付きの大きいケズリ出し高台を有する碗。 内面見込みに白色の目跡をのこす。	高台露胎部は暗赤褐色を呈し、回転ヘラケズリ痕が著しい。また施釉は薄く、内外面ともに貫入はみられない。	1. 2. 3. 灰緑色
Ji5 Fig. 33	表土	碗	1. 17.0 2. 3.	口縁部は内弯気味に外方にのびる。	露胎部にナデがのこる。 施釉は全体にうすく、内面は沈線状に濃厚な部分がみられ、貫入は全面に細かくみられる。	1. 2. 3. 淡緑灰色
Ji6 Fig. 33	表土	碗	1. 10.4 2. 3.	外反する口縁部は端部を内側に折りまげてまるくおさめる。	全面にうすく施釉し、貫入はみられない。	1. 2. 3. 明灰色
Ji7 Fig. 33	表土	皿(?)	1. 4.6(底) 2. 3.	底部小破片。 屈折する体部に低く、丸味をもった削り出し高台を付す。	釉は全体に薄く掛け、高台に一部垂れる。露胎部は黄褐色。 轆轤は逆時計回転。	1. 2. 3. 明灰色
Ji8 Fig. 33	表土	碗	1. 4.6(底) 2. 3.	低い安定した高台をヘラで波状に削りとる。内面には目跡がのこる。	露胎部は灰白色を呈し、見込み施釉部は貫入が著しい。	1. 2. 3. 褐白色

Tab.17 出土土器観察表(12)

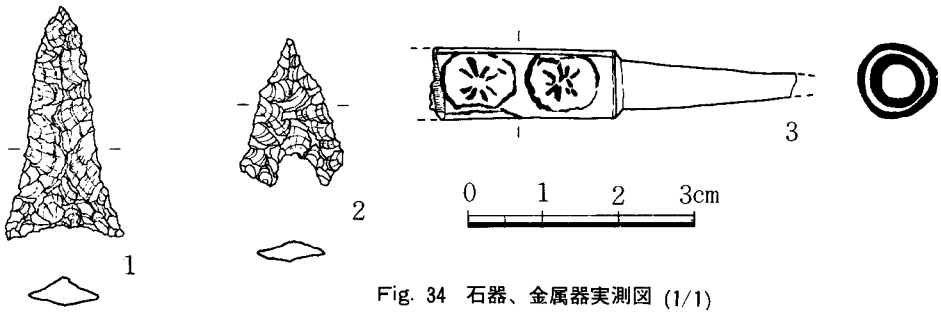


Fig. 34 石器、金属器実測図 (1/1)

（2） 石 器 (Fig.34)

石器類は図に掲げたもの以外では砥石等が少量みられたにすぎない。

打製石鏃、1は先端が鋭く尖り、腸抉りの小さい凹基式の打製石鏃である。表裏とも細部調整は丁寧である。同種のものは板付遺跡の第1区弥生前期包含層より出土している。最大長 3.1 cm、最大幅1.55cmでサヌカイト製。表面採集。2は先端部に細部調整による肩部の特徴を有し、基部の腸抉りは深く、調整は粗雑である。主要剥離面は裏面か。最大長2cm、最大幅1.35cmで黒曜石製。第3号溝出土。

（3） 金属器 (Fig.34)

3は煙管の吸口である。体部径は約1cmの断面倒卵形であり、挿入竹管は0.7mmである。体部はツナギの部分に黄銅を使用し、両側に二対の梅花文を刻んでいる。青銅製。表土層出土。使用された時期については不詳である。他に銅銭が第2号から出土しているが所在不明。

（4） 木製品

今回の調査で出土量が最も多かったのが木製品であった。護岸的な役割をなすと考えられる杭列、柵状遺構、あるいは溝中より多数検出した。種類としては杭・農具・建築材などで、他に用途不明の製品もみうけられる。杭を除けば本来的な場所を離れ、柵状遺構などに二次的に使用されたものか、溝中の流木であった。

第1号溝・第2号溝では杭以外のものは出土しなかった。杭は径5cmあまりの丸木の先端を尖らせたもので、ほとんどが折れ原形をとどめなかった。残りの良かった第1号溝中の杭列のもので長さ50～60cmであった。第3号溝も木製品の主体をなすのは丸杭（Fig.15）で、他にこの溝から出土した農具もあるが、第4号溝と重複した場所でこの溝に属するのかどうかは認定できなかった。出土木製品が多かったのは第4号溝とそこに構築された柵状遺構で、製品のほとんどをここから検出した。以下第4号溝出土の個々製品について詳述する。

鍬 (Fig. 35・36、PL.23・24) 平鍬・二叉鍬・三叉鍬が出土したが、いずれも破損している。柄を着装した例はみられなかった。

W671　比較的残存状態の良好な平鍬である。第4号溝の北側台地落ちぎわの砂層中より

出土した(PL．9)。 身全長46.3cm、復元推定刃幅13.5cm、刃部長35.2cm。頭部から直線的に刃部に続き、両者の間に段などは見うけられない。頭部上端、刃縁はともに丸みをおびる。刃部に削りがみられるが、先端部は使用による磨滅が著しい。柄孔は縦6cm、横4cmで、断面から推定される柄の着装角度は約35度である。厚さは 1.3cmで刃縁にむかうにつれ薄くなる。長さに比べ幅が狭く長細い感じであるが、作りは丁寧かつシャープである。

W301　　二叉鍬片である。第2号柵状遺構の西側で検出した。半欠品で、頭部端はかろうじて残るが、歯先端が失なわれており、身全長は明確にしがたい。頭部は削りにより丸くなっている。柄孔は縦 7.5cmを計る。歯幅は 6.0cmで両側とも削りによって刃を作りだしている。厚さは柄孔部で 2.0cm、刃部先端に向うにつれ薄くなる。

W404　　第1号柵状遺構の南側、横木のW733とW751の中間より出土した。厚さ 1.5cmの薄い仕上げの二叉鍬である。基部から歯の片側が残った破損品で、残存長37.4cmである。しかし出土時から歯部破片に比べ基部から歯に続く部分が収縮し、原形を保っていない。歯幅は7.5cmを計る。

W786　　第1号柵状遺構の西側砂層中より出土した(PL.10)。 比較的薄い仕上げの二叉鍬である。頭部端は丸く削り、基部と歯の境には稜をなす。歯幅がかなり広いのが特徴的である。取り上げ後の管理ミスにより収縮・変形し、計測等はできなかった。

W787　　第1号柵状遺構のほぼ中央部にひっかかって出土した二叉鍬である。半折品で、それも頭部と歯先端を欠く。残存長38.1cm、厚さ2cm。基部外側に内側への段を作り、歯は丸く下ぶくれ状になり、全体としてなすびに似た形態を呈する。最大歯幅 5.5cm、先端に行くにつれ細くなる。歯中央部から、基部と先端部への両方向の削りがみられるが、歯内外縁辺は磨滅が著しい。柄孔は観察する限りでは確認できず、縄などで柄を緊縛して使用したものかもしれない。またW301・404に比べ歯の長さが短い。

W789　　第1号柵状遺構からの出土である。柄孔下部から歯上位まで残存する二叉鍬で、基部と歯の転換部外縁辺に径1cmほどの半円形の抉りを設けている。歯幅は 7.5cmと広い。厚さは柄孔付近で 1.8cmを計る。

W788　　第1号柵状遺構のすぐ西側より出土した(PL．9)。 三叉鍬の折損品であるが、その身全長は 2.8cm前後と復元できる。頭部は丸く削って仕上げ、基部から歯への外側は丸みをもって続く。歯幅 3.3cm。複元歯長23.5cmである。柄孔は長さ 6.5cmの長方形をなし、断面から推定される柄の着装角度は約52度である。厚さは1cmで、刃部先端に向うにつれ薄くなる。

W790　　第1号柵状遺構中より出土した。叉鍬の歯先端片であろう。厚さ 0.6cm。先端表面には削りがみられるが、縁辺の磨滅は著しい。

W791　　第1号柵状遺構中より出土した。叉鍬歯先端片で、表面は丁寧に削り仕上げている。厚さ 0.8cm。

鋤(Fig. 38, PL. 27・28)　検出したのは平鋤と把手および柄の破片だけである。

W800　柄先端部を欠いただけの比較的残存状況の良好な資料である。現存長 101.7cmで、柄・身とも一木から作られる。柄は最大幅 3.4cmの断面方形に近い形状を呈し、折損した部分に径1 cm弱の孔の痕が残る。残存長47.1cm。身上縁は直線をなし、中央より片寄った位置より柄が直交して作り出されている。身は長さ54.6cm、刃幅13.4cmと長大なものである。刃縁はゆるやかなU字形をなすが、磨滅が激しい。厚さは身上縁で 2.1cm、刃縁に向うにつれ薄くなる。柄の作り出し部分で柄をはさむようにして両側を削っており、身上縁中央部分がやや突き出る。また身上縁から中央部では断面扁長方形をなすが、刃縁に向っては凸レンズ状の断面を呈する。身全体としては扁平という感じが強い。

W798　第1号柵状遺構のすぐ西側より流木に挟まるようにして出土した(PL. 6)。現存長60.7cmの一木からなる鋤の破損品であるが、乾燥・収縮しており本来的な計測値はさらに大きかったものである。柄部は断面半円形をなす。先端部は折れている。身上縁は直線的で、そのほぼ中央から柄がとりつけられている。現存身幅は8.5cmであるが、断面図でもわかるように乾燥による変形が著しい。身上縁から少し下った位置に、浅く長い抉りを有する。抉り部分まで断面は扁長方形をなすが、それより下位はさらに薄くなるようである。刃縁部は欠けている。

W799　第1号柵状遺構の西側にあたる第4号溝底より出土した(PL. 9)。わずかに収縮しており、現存長70.4cmを計る。柄部は先端が折れ54.5cmが残存する。断面は凸レンズ状に中央部が膨みぎみで、先端部から身に向い太くなっている。身上縁は刃部に向って下る。上縁から約3 cmの所に半円形の抉りを設けている。

W796・W797　ともに第1号柵状遺構中より出土した。鋤の把手と考えられる。W 796は握りが柄に続く部分で現存長15.7cm、柄幅3 cmを計る。柄断面は楕円形を呈する。あまり仕上げが良くない。W 797は握りの部分から柄まで続く現存長27.7cmの資料である。握りの部分は中央をくりぬいた幅1.5～2.7cm、長さ8 cmの三角形である。柄は幅 2.5cmの断面長方形をなす。握りおよび柄とも丁寧な削りで仕上げており、厚さも均一化している。

槌 (Fig. 37, PL. 29)

W780　握部の端を欠いた現存長44.6cmの槌で、第1号柵状遺構の西南側にあたる第4号溝の底に近い砂層より出土した。搗部から縦方向に割れた竪杵を槌に転用したものと考えられる。頭部は幅7 cmの半円形を呈し、削りの痕が比較的明瞭に残っている。頭部から握部の境までほぼ直線的に仕上げられているようであるが、槌部は原形をほとんど残さない位にどの面も使用され、著しい中窪みの状態をみせている。槌部現存最大幅は 7.4cmである。握部は端部に向って削られており、断面は円形に近い。

W302　第2号柵状遺構の西側で流木に混って出土した。現存長29.6cmの完形品である。

槌部長18.0cm、握部長11.6cmで、槌部と握部の境には明瞭な段を有する。この資料は握部には削りの痕がみられるが、最大径が7cm近くあり仕上げといえる状態ではなく、また槌部に至っては一側面を面取りしているものの他は丸木そのものといった感じで、当初は未製品かとも考えた。しかし、槌部には打撃によるくぼみが一側面にみられ、この状態で使用されたものと思われる。頭部は扁平で、切り離しの削り痕が残る。また握部端も切り離しのままである。

その他の製品（Fig. 37～39, PL.29・30）

W 794は第1号柵状遺構の西側砂層中より出土した。上縁が中くぼみ状に削られた横18.2cm、縦10.7cm、厚さ 0.6cmの長方形に近い板材である。上縁近くに対応する径0.8～0.9cmの円孔を設けている。W795も0.6cmの均一的な厚さをもつ長方形の板材で、長縁の一辺に径 4.5cmの半円形の抉りを設け、その両側に2つ一組の小円孔を2組対応させたものである。片側はすでに折損しており、現存長23cm、幅 3.8cmである。W 793は縦2.3cm、厚さ0.3cmの板材の上縁近くに一孔を設けた資料である。現存横幅 2.5cmと破損部分が多く全容はつかめない。W795・793とも第1号柵状遺構西南にあたる溝底より出土した。

W672・673・674は第2号柵状遺構寄りの第4号溝埋土中より出土したものである。W 672は現存長16.8cm、幅 2.4cm、厚さ0.15cm。頭部は先端を両方向より削り出し、その下位の両縁辺に対応するように抉りを2ヶ所ずつ入れた宝珠状の形態をなす。下部は削りにより先細に仕上げているが、末端部は折損している。斎串の類であろうか。W 673は細めの枝を丁寧に面取りし、両端部を尖らせたハシに似た形状を呈するものである。全長22.1cm、最大幅 0.6 cm。W 674は厚さ0.25cmの板材の表面に板目を直交するように線状の刻みを入れたものである。刻みの間隔は0.8～1.1cmとまちまちである。また一端には斜線状に刻みを二本入れている。現存長15.5cm幅 1.2cm。曲物と考えられる。

W 781は径 6.5cmほどの丸木を切り離し、先端部に向って削りによる切り込みを行ったものである。端部にも部分的に削りを施している。削り行なわれていない部分には樹皮が残っている。現存長30cmであるが、第1号柵状遺構西側の流木の間から出土した時にはさらに長かったが、冠水により流出した。布巻具あるいは建築材と考えられる。

W 574は第2号柵状遺構より出土した樋である。現存長74.5cm、最大幅24.7cm。丸木を半截し、半截面をさらに割り、両縁辺を切り丸木そのもののカーブにあわせるように中をくりぬいた簡単な作りのものである。裏面は枝をおとした以外の加工痕はみられない。樋の深さは 3.1cm、厚さ 5.2cmを計る。

W 600も第2号柵状遺構から流木に混って出土したものである。現存長68.5cm、幅8.6cm。断面凸レンズ状に面取りを行い、両端を削り尖がらせ気味に仕上げる。一端は端部からの削りが行なわれ、両方向からの削りがぶつかる部分が中くぼみ状になる。取り上げ後の乾燥により器表の割れが著しい。

板材（Fig. 41, PL. 32）　ここで扱うのは板杭などの破片ではなく、両端が明確に切り離された長さ25cm～40cm前後の板材である。W 621は長さ41.5cm、幅16.6cm、厚さ 5.2cmの板材である。面取りによって整った表面にさらに一方向からの削りを加えている。W 446は長さ39.5cm、幅14.3cm、厚さ 6.5cm。一端は削りにより丸みをもち、そこより 3.5cm離れた中央部に径２cmの円孔を斜めに穿つ。また器表には貫通しない径１～ 1.5cmの円孔が３ヶ所ある。面取りは丁寧とはいえず、器表の凹凸が激しい。W 403は前述の２資料に比べ著しく薄い板材で、長さ25.5cm、幅８.5cm、厚さ１.6cmを計る。一端部は直線的に切られ、もう一端部は削りにより円形状を呈する。横断面は中央部が厚く。縁に向って薄くなる。縁の破損がかなり多い。これら３点の板材はともに第２号柵状遺構付近からの出土である。未製品とも考えられる。

建築材（Fig. 39・42・43, PL. 33・34）　第１号柵状遺構を中心に多くの建築材の出土をみた。横木として再使用されたもの、一端を削り尖らせ杭として転用したものの他、流木中にも建築材が出土した。

W782とW638は枘孔をもつ建築材を杭に転用した資料である。W 782は第１号柵状遺構の北端部に打ち込まれていたもので、現存長36cm、幅10.4cm、２cmの均一的な厚さをもつ板状建築材で、枘孔は１辺 3.5cmの六形をなす。一端が一方向からの削りにより尖がる。W 638は第２号柵状遺構より出土した。現存長23.2cm、幅5.8cm、厚さ4.7cmの角材を用いた建築材で、枘孔は長さ５cm、幅３cmの長方形を呈する。端部が削り出され、丸味をおびながら尖る。

比較的長大な建築材には、端部を二叉状に作り出すものと、先端部近くにかき込みを設けるものの二種類がある。前者にはW724・405・801・727などがある。W724は二叉状の作り出しの一部が折損しているものの、この種の全容を知りうる好資料である。全長 256.5cm、幅18cm。中央部に加工痕がみられない面が残っているが、他は丁寧な面取りを行い、断面八角形を呈する。さらに中央部を残し両端に向う幅広い削りによる平坦面が作られている。両端部は中央をくりぬいて叉状の作り出しを設ける。作り出しの長さは一端では17cm、もう一端では 9.8cmと異なっている。W 405 は折損しているものの断面が端正な八角形状に面取りされている。現存長 161 cm、幅11.2cm。幅 2.8 cmの叉状の作り出し部分は折れており、そこよりやや中央部寄りに一辺 3.5 cm、深さ１cmの方形の抉りが設けられている。実に丁寧な作りの建築材である。W 300 はすでに折損しており、現存長88.5cm、幅10.4cmであるが、前記の２資料と同様の形態を示す。二叉の作り出しは片側が幅４cmでわずかに残るだけであるが、端部に向い尖るのではないかと思われる。縁辺に一ヶ所幅 2.6 cmの方形の抉りを設けている。また上面には約２～４cm間隔で楕円形のくぼみがみられる。実測図・写真とも掲載できなかったが、W 785 は枝分れ部分を一端にとりいれた長さ約３m の建築材であった。前述資料のように端部を削り叉状の作り出しを設けるかわりに、自然の叉を利用したものである。叉部は約15cmに切りそろえてある他は径20～30cmの幹部は枝をきり落しただけの簡単な作りのものであった。ただ縁辺に一ヶ所方形の抉

りを設けている。W 727は丸太を半截して先端部を叉状に抉ったもので、前述の4資料とは形態を異にする。現存長96cm、幅11cmを計る。端部を加工する例はW 539にもみられる。これは丸木の先端部を約12.5cmにわたって削り込み、断面半円形に加工したものである。現存長86.4cm、径10.4cmで、端部の別工部以外には樹皮が残る。叉状の端部をもつものとは用途が異なるものと考えられる。上述の5資料のうちW 300の他はいずれも第1号柵状遺構およびその付近からの出土で、W 785・539は横木として用いられ、またW 727は杭に転用されていた。W300は第2号柵状遺構付近で流木として検出した。

先端部近くにかき込みを設ける例はW 784・581にみられる。W 784は現存長195.5cm、幅8cmの丸木を使用して面取りを行ない、端部近くにかき込みを削り入れたものである。かき込みは長さ7.2cm、幅3.2cm、深さ1.6cmの断面U字形状を呈する。かき込み周辺以外の加工は、節部などが荒く削られており丁寧とはいいがたい。乾燥して収縮、ひび割れが著しい。W 581は方形に面取りした角材の端部にかき込み状の削りを両方向から行なったものである。削り部分がかなり破損しており形態は明らかにできないが、復元長約15cmのかき込みの底は平坦面を作らずV字形状に近いようにみえる。現存長93cm、幅10.4cm。W 784・581とも第1号柵状遺構の構築材として転用されており、W 784は横木、W 581は杭として検出した。

以上の建築材の他にW 783・304・792のようにやや変った加工材がある。W 783は径7.2cmの丸木の3ヶ所に長さ7～9cm、幅4cmの長方形の抉りを設けたものである。抉りの間隔は約39cmでほぼ等しいが向きがまちまちであり、枘孔とも考えにくい。現存長92cmで一端は切り離しの削りがみられ、もう一端は折損している。第1号柵状遺構の西側で出土した。W 304は径6cmの丸木の2ヶ所に抉りを設けたものである。抉りのひとつは横からくりぬいたもので、もうひとつは長さ8cm、幅3.7cmの長方形のかき込み状のものである。現存長116cmで一端部は削り出されて尖がる。第2号柵状付近から流木として出土したが、あるいは杭として二次的に使用されていたのかもしれない。W 792は径約9cm丸木の先端近くに両方向からの削りにより溝状抉りをめぐらし、そこより約8cm離れた位置に長さ約9.7cm、断面U字形状のかき込みを設けたものである。現存長62cmで、端部には削りによる切り離しがみられ、もう一端は折損している。第1号柵状遺構付近より出土した。

W801は第1号柵状遺構の西側で流木中より検出したものである。丸太を半截し、さらに削りにより三ヶ所に突起を作り出したもので、全長167.5cm、幅17cmを計る。突起は断面台形に近い形状を呈するが、上部が尖り気味のものもあり、一定していない。背面には丸木そのもののカーブが残る。高さは3.5cm～4cmで、前面は内側に削りくぼめられ、さらに底面には深さ1.5cmの長方形の抉りを設けている。三ヶ所の突起の間隔はまちまちである。突起を中心に切り離し使用する資料の未製品とするより建築材として考えておきたい。

杭（Fig.42・43, PL.33）　第4号溝から出土した杭には建築材などの二次的利用のものも一部みられるが、多くが先端を尖らせただけの簡単な作りの丸杭である。第1～3号溝に用いられた丸杭に比べ、第4号溝（特に第1号柵状遺構）出土のものはひとまわり大きく、樹種はシイが多い。W 510は丸木杭の資料で、径約92cmの丸木の一端を削り尖らせる。樹皮はついたままである。現存長73cmで第1号柵状遺構を構成していた。

量的には丸杭よりもずっと少ないが、角杭・板杭も打ち込まれている。W 766は角杭の資料で、丸木を面取し端部をさらに削り尖らす。丸杭に比べやや扁平な尖り方である。現存長96.8cm、幅6.3cm。板杭はW 700の資料がある。断面が長方形に近い板材を端部に向って削り、断面三角形とし、さらに一方の縁辺から斜めに削り込み先端部を尖すようである。現存長120cm、幅10cm。W 766・700ともに第1号柵状遺構の構築杭として用いられていた。（浜石）

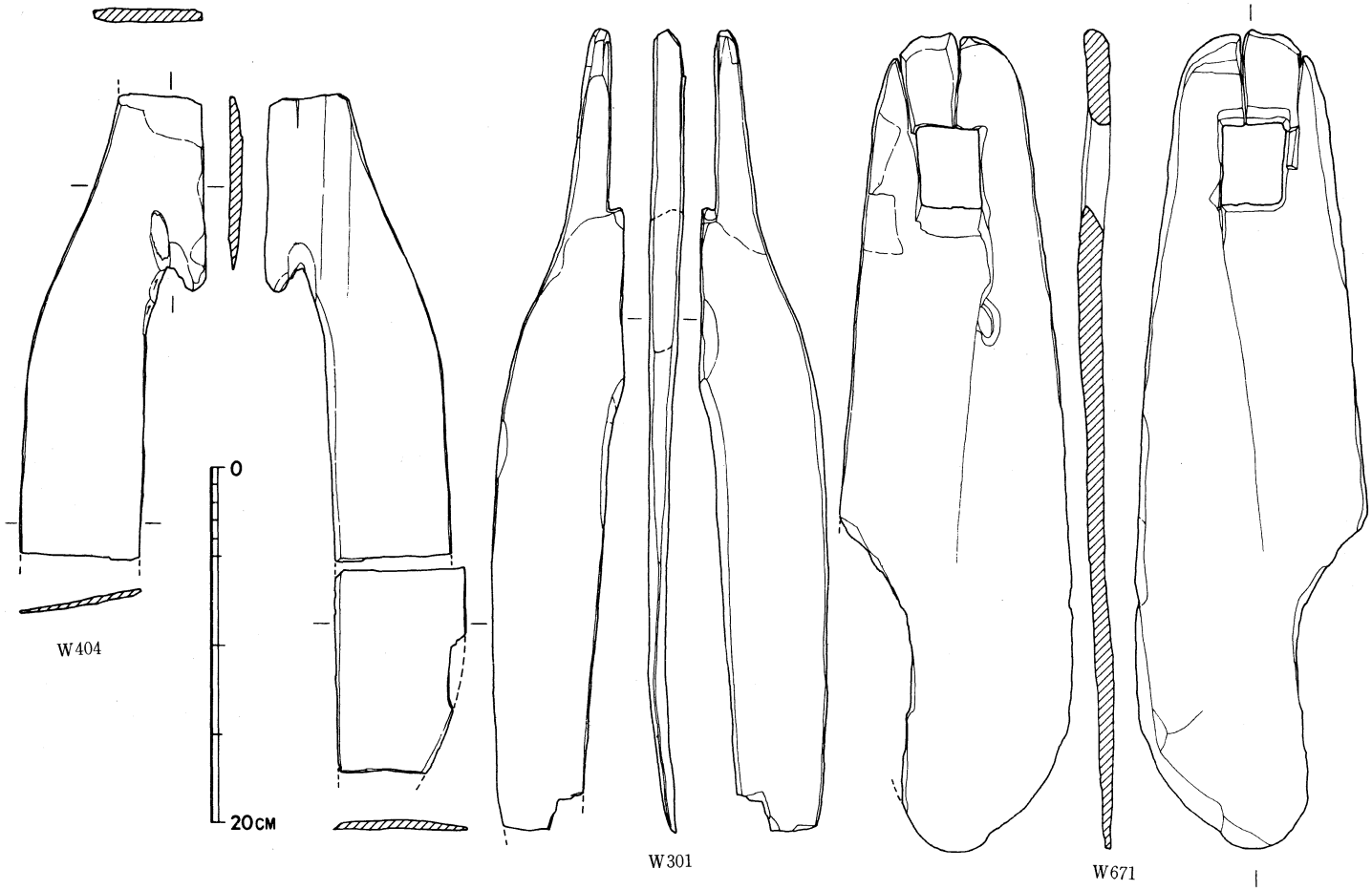


Fig. 35　出土木器・木材実測図(1) (1/4)

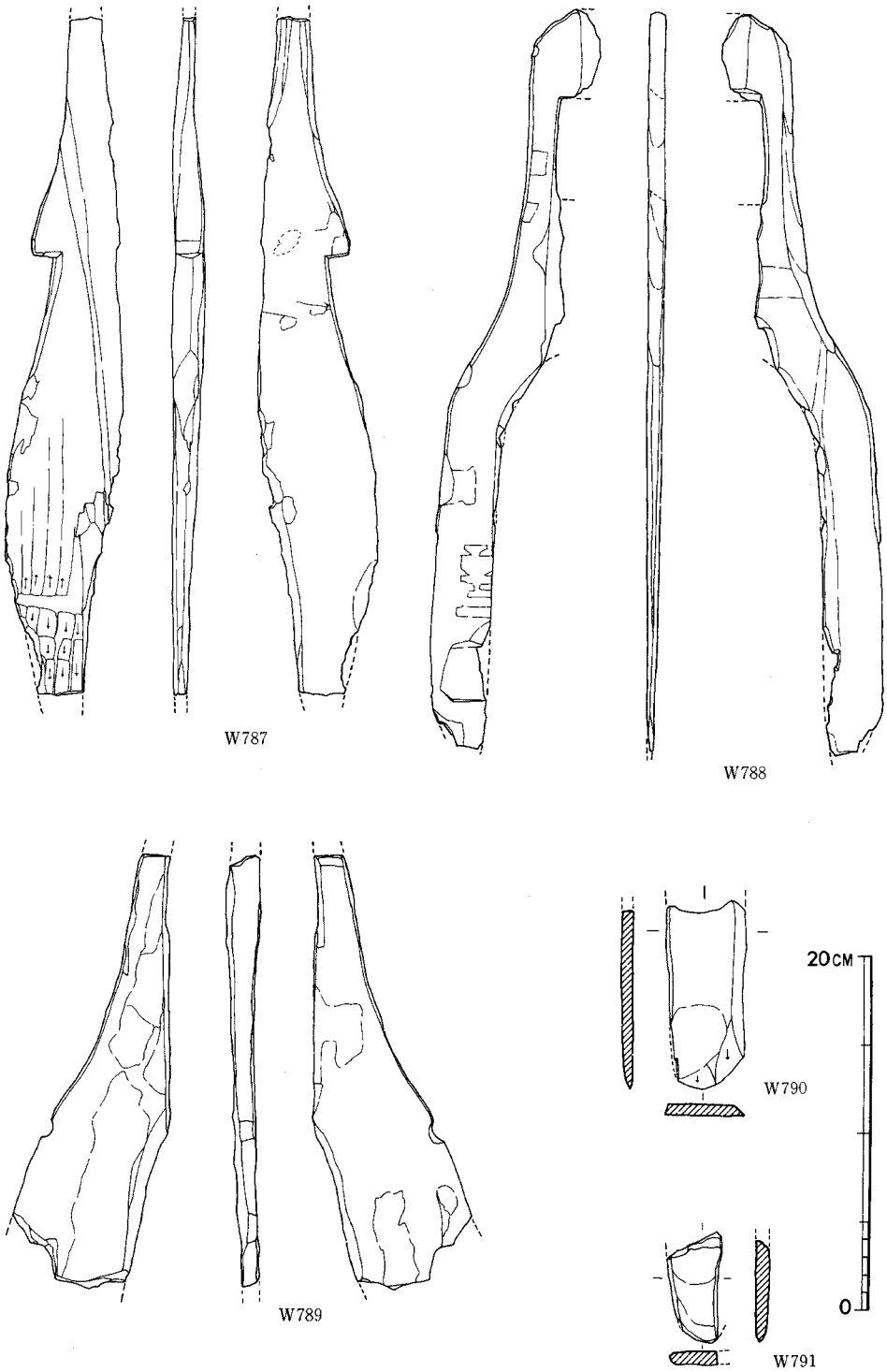


Fig. 36　出土木器・木材実測図(2)（1/4）

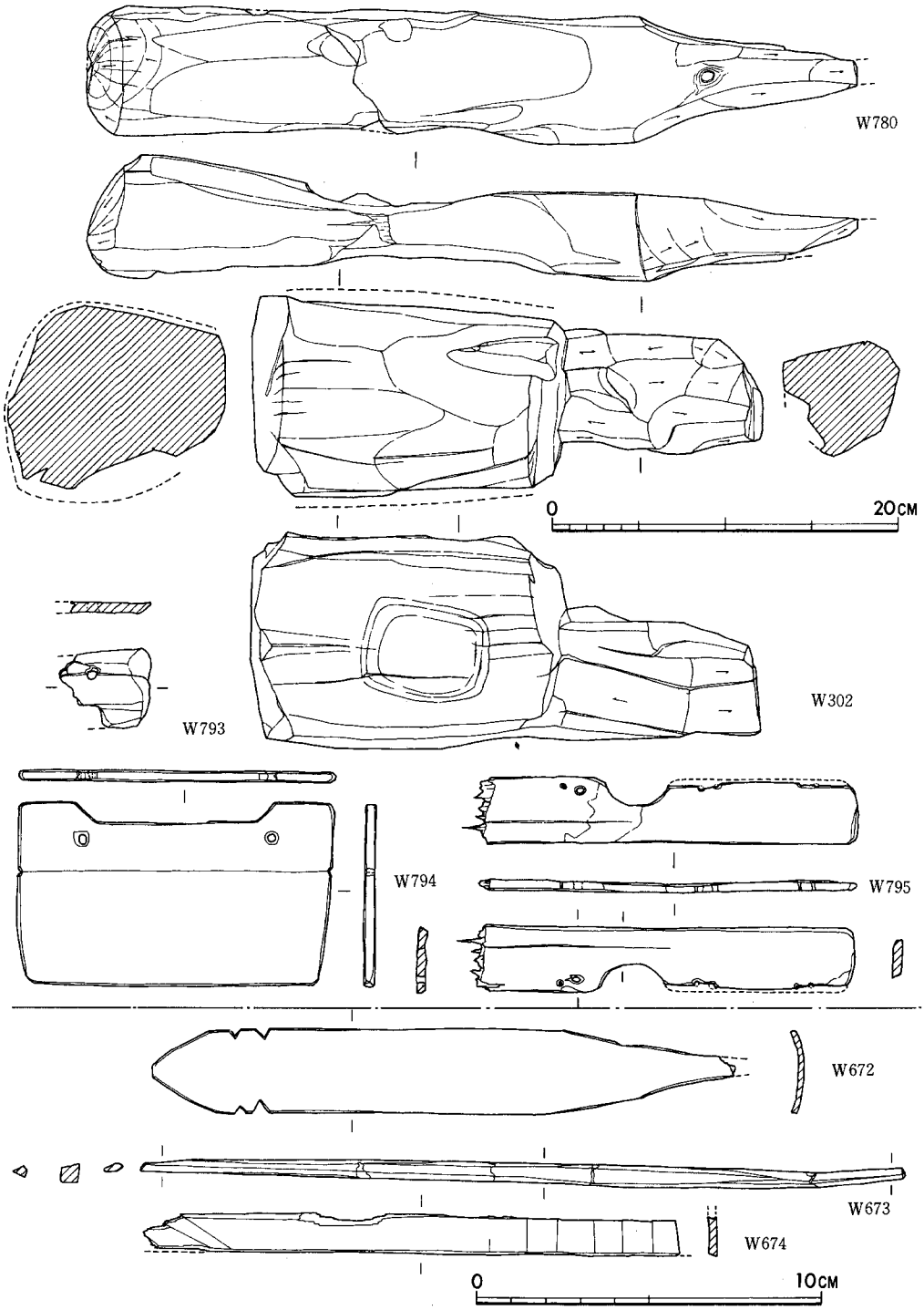


Fig. 37 出土木器・木材実測図(3) (1/4, 1/2)

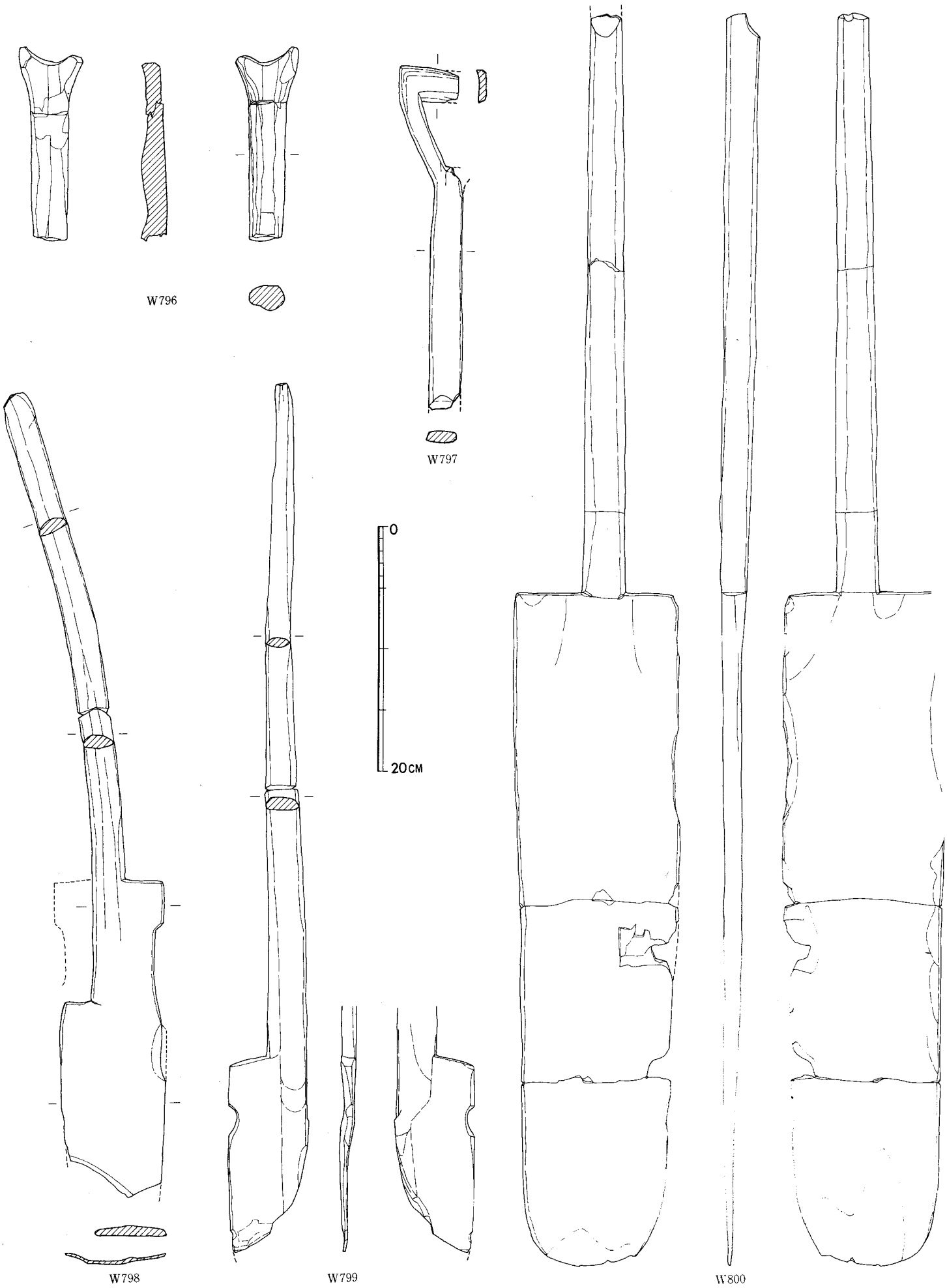


Fig. 38　出土木器・木材実測図(4)（1/4）

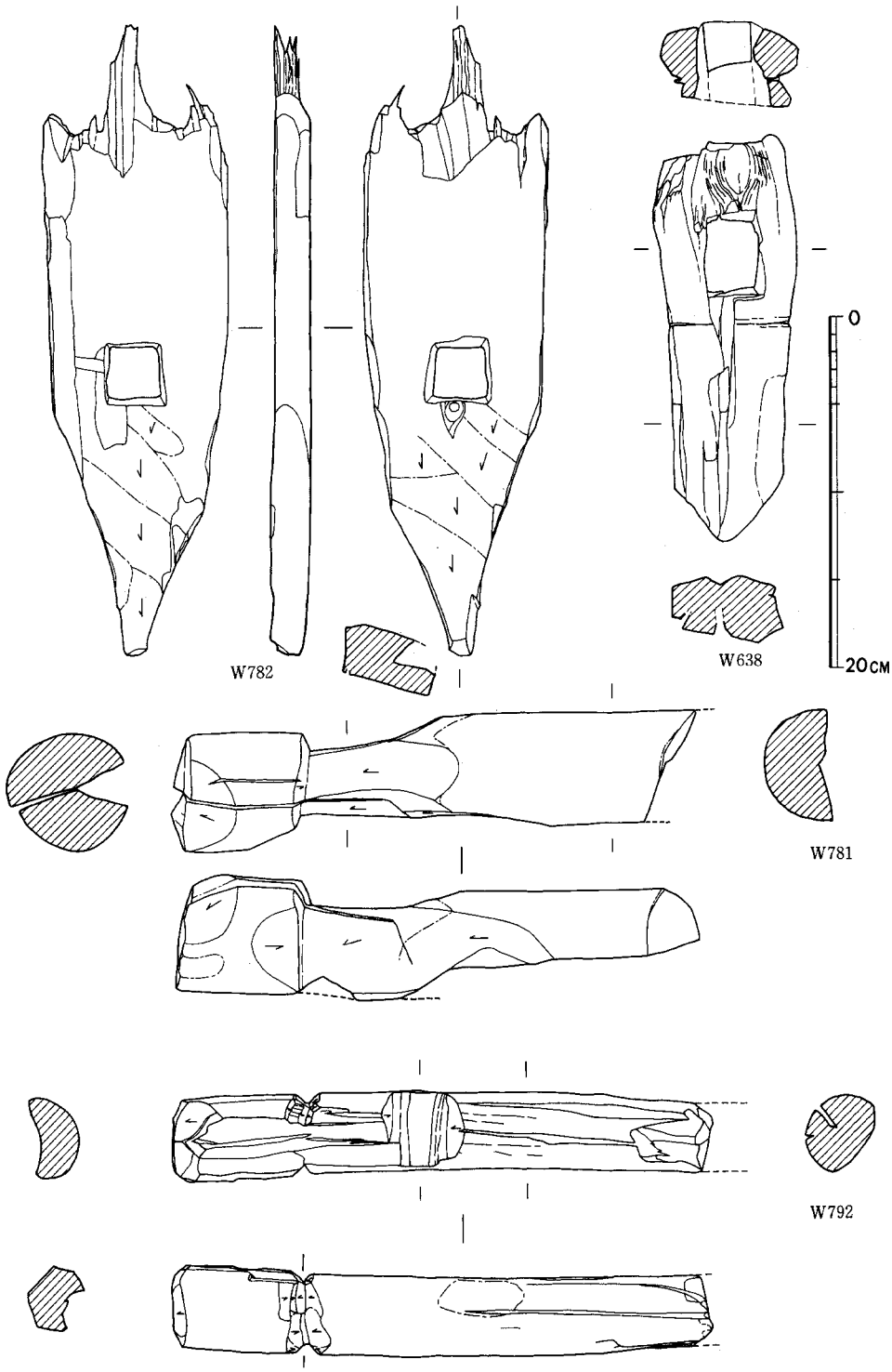


Fig. 39　出土木器・木材実測図(5) (1/4)

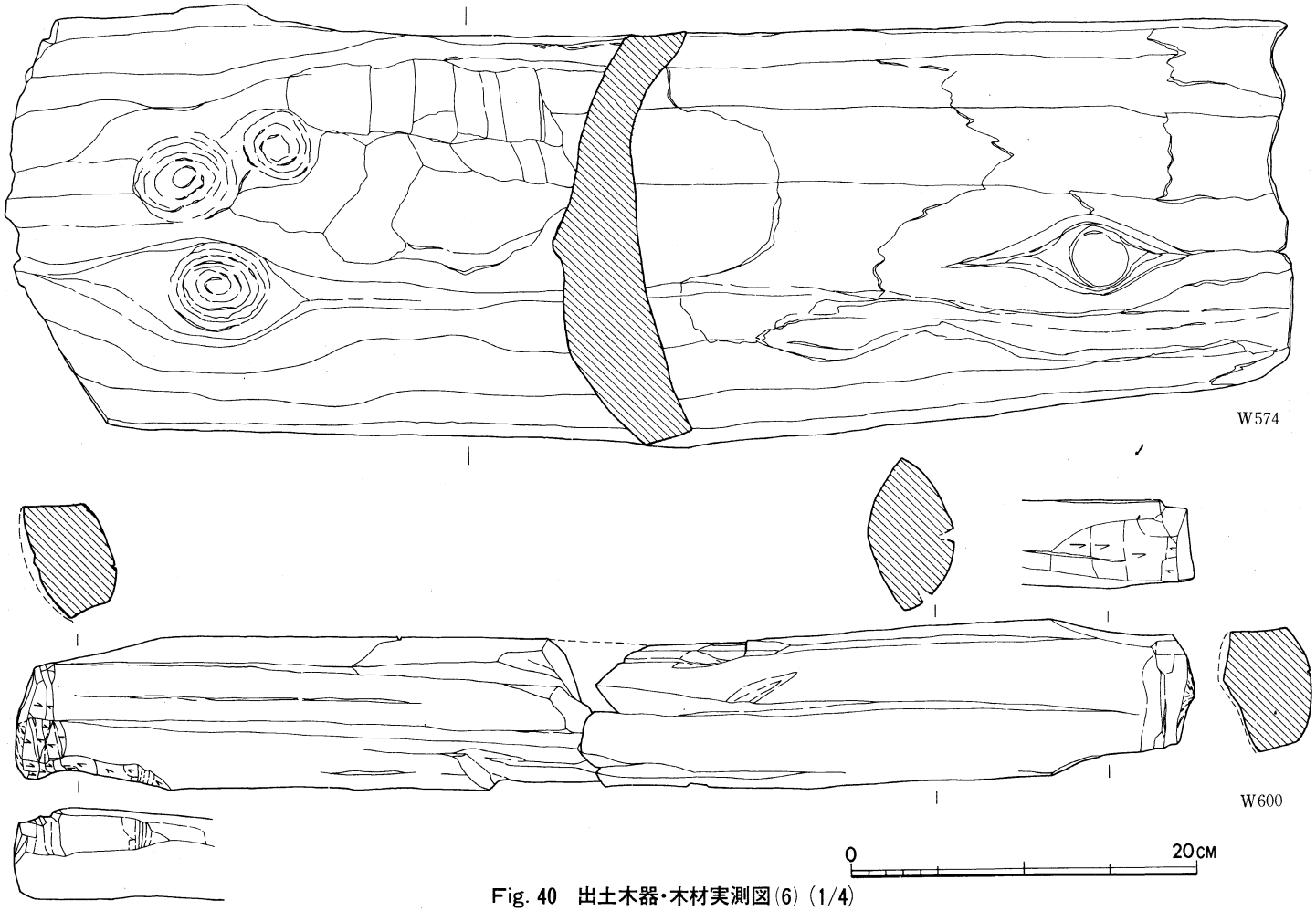


Fig. 40　出土木器・木材実測図(6) (1/4)

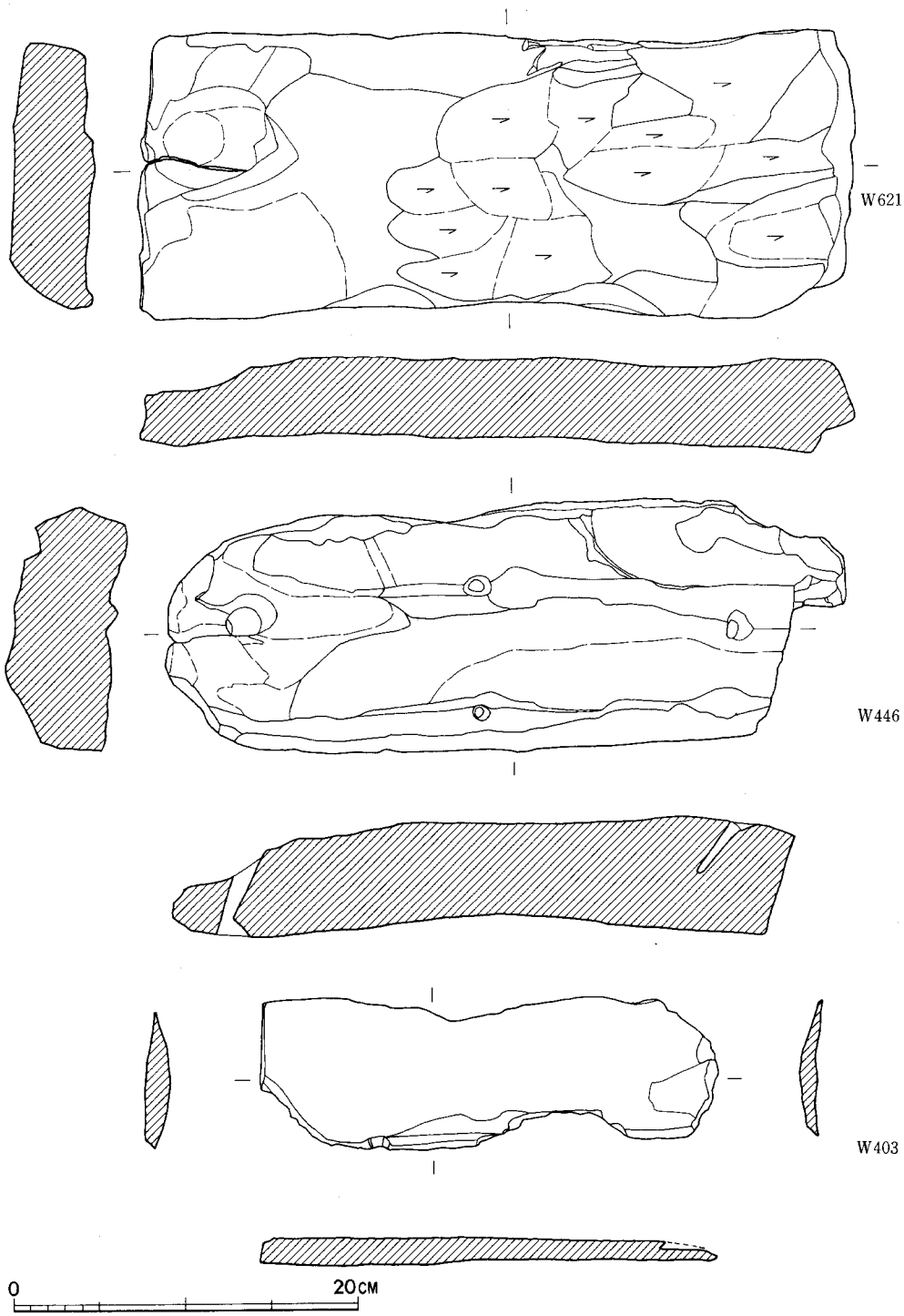


Fig. 41　出土木器・木材実測図(7)（1/4）

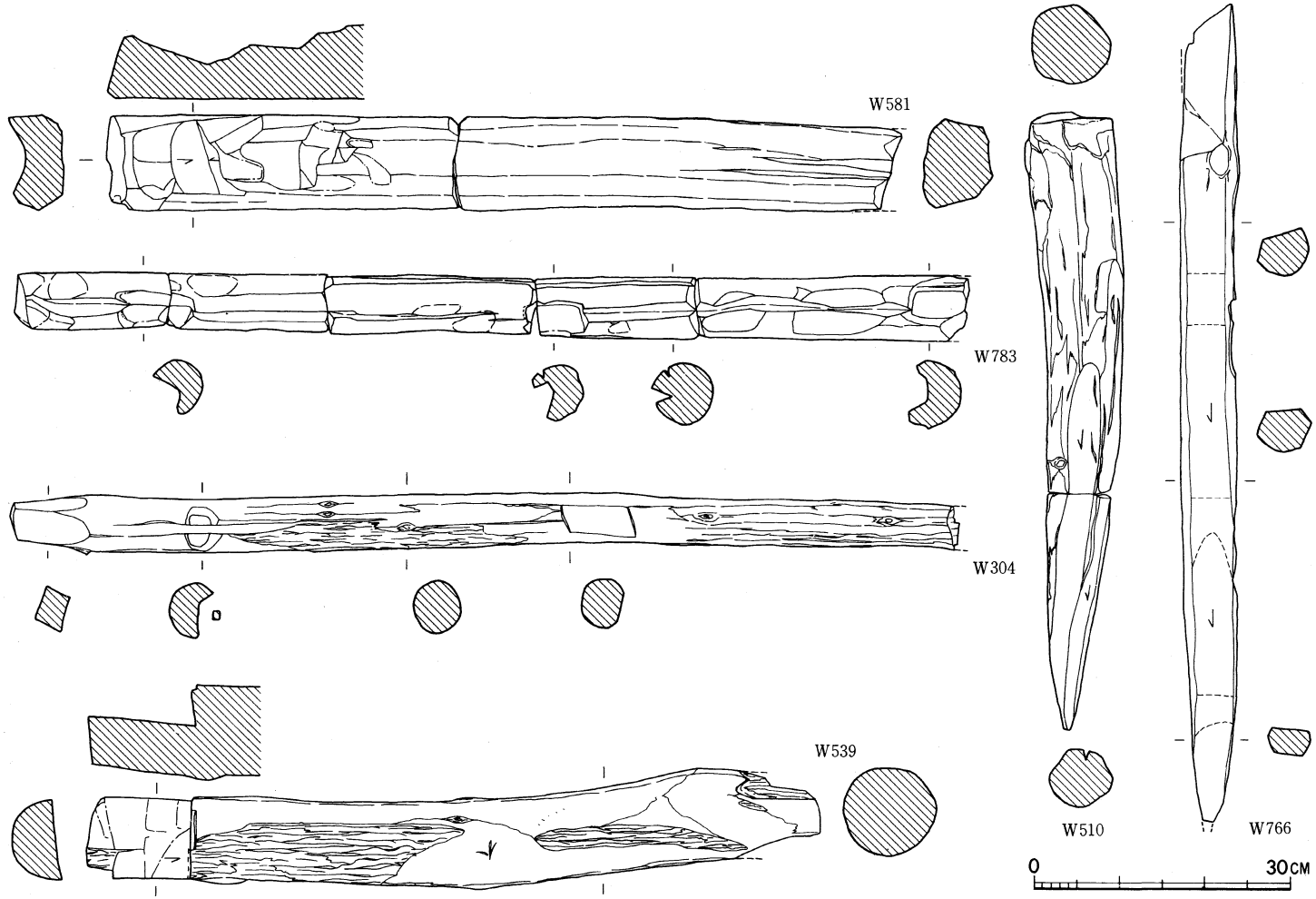


Fig. 42　出土木器・木材実測図(8)（1/8）

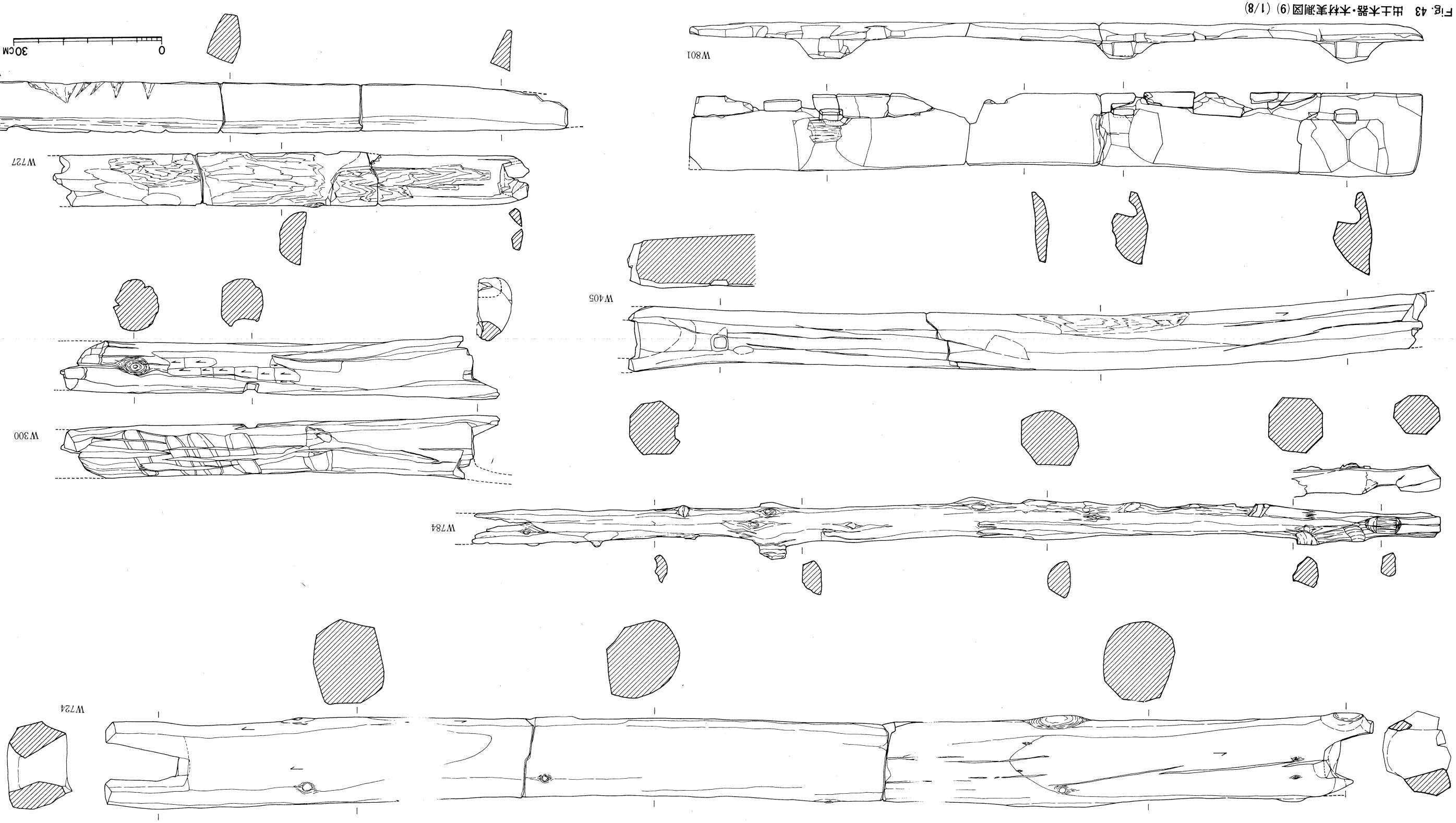


Fig. 43 出土木器・木材実測図(9) (1/8)

第3章　樹種の鑑定

嶋　倉　巳三郎

福岡市博多区那珂にある古墳時代（5世紀）の那珂深ヲサ遺跡から出土した柵状遺構構築材と若干の流木について樹種を調査した。

試料は数mmから1cm大の小片で、これらから切片をつくって調べた。中には乾燥収縮のため、切片にしても木材組織が著しく変形し、樹種を決定できなかったものもある。

Tab. 18　樹種鑑定表（1）

試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記
2	ヤナギ？	乾燥収縮材	324	サカキ？	収縮材	351	シイ		373	シイ	
9	ヤナギ？	〃	325	シイ		352	シイ		374	シイ	
10	ヤナギ？	〃	326	シイ？	乾燥収縮材	353	ミズキ		375	シイ	
13	シイ？	〃	327	シイ		354	ユズリハ？		376	サカキ	
—	シイ	札なし	328	シイ		355	シイ		377	シイ	
305	シイ		330	シイ		356	カシ		378	サカキ	
306	カシ		331	シイ		357	ユズリハ		379	カシ	
307	サカキ		334	シイ		358	サカキ		380	ツバキ	
308	ハンノキ		336	ムクノキ		359	シイ		381	サカキ	
309	ユズリハ		337	カエデ	収縮材	360	(不明)		382	シイ	
310	シイ		338	アワブキ		361	シイ		383	シイ	
312	—？	散孔材	339	サカキ？		362	カシ		384	サカキ？	
313	シイ？	乾燥硬化材	341	カエデ？		363	カシ		385	シイ	
314	シイ		342	ツバキ		364	シイ		386	シイ	
315	ユズリハ？		343	シイ		365	シイ		387	タブノキ	
316	シイ		344	アワブキ		366	シイ		388	サカキ	
317	アワブキ		345	サカキ	収縮材	367	シイ		389	シイ	
318	サカキ		346	シイ		368	シイ		390	シイ	
319	シイ		347	ツバキ		369	シイ		391	シイ	
320	アワブキ	収縮材	348	シイ		370	シイ		392	ツバキ	
322	(不明)	〃	349	シイ		371	サカキ		393	サカキ	
323	ハンノキ		350	シイ		372	ヒサカキ？		394	シイ	

Tab. 19 樹種鑑定表 (2)

試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記
396	シイ		439	シイ		476	クリ		520	シイ	
397	シイ		440	モチノキ？		477	(？)		521	カシ	
398	シイ		441	カエデ		478	シイ？		522	シイ	
399	ツバキ		443	シイ		479	シイ		523	シイ	
400	シイ		444	シイ		480	サカキ？		524	シイ	
407	シイ？		445	シイ		481	ユズリハ？		525	クヌギ	
409	シイ	強収縮材	447	シイ		482	クリ		526	シイ	
410	シイ		448	シイ		483	シイ	収縮材	527	コナラ	
411	シイ		449	シイ		484	サカキ	〃	531	シイ	
412	シイ		450	シイ		485	カシ		532	クリ	
415	シイ		451	シイ		489	ユズリハ？		537	サカキ	
416	シイ		452	シイ		490	ユズリハ？		541	シイ	
417	シイ		453	シイ		491	カシ		542	シイ	
418	シイ		456	シイ		492	アワブキ		544	シイ	
419	クリ		457	シイ		493	シイ		546	シイ	
420	シイ		458	スギ		494	ユズリハ		547	ユズリハ？	
421	ヒサカキ		459	シイ		496	シイ		548	ヒサカキ	
422	シイ		460	シイ		501	シイ		549	シイ	
423	シイ		461	シイ		502	シイ		550	シイ	
424	シイ		462	シイ		503	シイ		551	ムクノキ？	
426	シイ		463	シイ		504	シイ		552	シイ	
427	シイ		464	シイ		505	シイ		553	シイ	
428	シイ		465	シイ		506	シイ		554	シイ	
429	アワブキ		466	クリ		508	シイ		555	シイ	
430	(不明)		467	ヒサカキ？		509	シイ		556	アワブキ	
431	シイ		468	カシ		513	シイ		557	ユズリハ？	
432	ユズリハ？		469	クスノキ		514	シイ		558	ユズリハ？	
433	(？)		470	シイ		515	ユズリハ？		559	ユズリハ？	
434	シイ		471	シイ		516	カシ		560	カシ	
436	シイ		472	クリ		517	シイ		561	シイ	
437	シイ		474	シイ		518	シイ		562	シイ	
438	(？)		475	シイ		519	シイ		564	シイ	

Tab. 20 樹種鑑定表 (3)

試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記
565	アワブキ		609	サカキ		650	タブノキ		715	ツバキ	
566	シイ		610	ユズリハ		651	アワブキ		716	シイ?	収縮材
567	シイ		611	シイ		652	ユズリハ?	収縮材	717	サカキ?	
568	ツバキ?		612	シイ		653	アワブキ		718	(不明)	収縮硬化材
569	コナラ		614	シイ		654	シイ	収縮材	719	サカキ?	
570	シイ		615	シイ		655	シイ	〃	721	ツバキ	
573	ユズリハ?		616	シイ		656	シイ?	〃	722	ムクノキ?	
577	サカキ		618	サカキ		657	シイ	〃	725	ユズリハ?	
578	シイ		619	アワブキ		658	シイ	〃	726	ヒサカキ?	
579	クリ		622	アワブキ		659	シイ?	〃	728	シイ	
582	サカキ		624	ユズリハ		661	サカキ		729	ユズリハ	収縮材
583	サカキ		625	アワブキ		662	カシ		730	シイ	
586	シイ		626	シイ		663	—	欠	731	アワブキ	
587	—	欠	627	シイ		664	サカキ		734	シイ	
588	ユズリハ		628	シイ		665	シイ		735	アワブキ	
589	シイ		629	ヒサカキ?	強収縮材	666	カシ		736	シイ	
590	シイ		630	アワブキ		667	サカキ		737	シイ	
591	シイ		631	ハンノキ		668	カシ		738	カエデ	
592	シイ		632	ユズリハ		669	カシ		740	ヤマザクラ?	
593	カエデ		633	シイ		670	カシ		741	ユズリハ	
594	コナラ		634	シイ?	収縮材	702	サカキ		742	ヤマザクラ?	
595	ユズリハ?		635	シイ		703	シイ		743	ヤマザクラ	
596	シイ		636	タブノキ		704	(不明)	収縮材	744	ヤマザクラ	
597	シイ		639	ユズリハ?	強収縮材	705	コナラ		745	サカキ	
598	ユズリハ		640	ユズリハ?	収縮材	706	ツバキ	収縮材	746	ユズリハ?	
599	アワブキ		641	シイ		707	タブノキ		747	サカキ	
602	アワブキ		643	カシ		709	ツバキ		748	クリ	
604	シイ		645	シイ		710	タブノキ		749	シイ	
605	ユズリハ?		646	アワブキ		711	(不明)	収縮硬化材	750	シイ	
606	ユズリハ?		647	(不明)	散孔材	712	ミズキ		752	アワブキ	
607	ハンノキ		648	シイ		713	(不明)	収縮材	753	シイ	
608	サカキ		649	シイ		714	シイ		754	シイ	

Tab. 21 樹種鑑定表 (4)

試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記	試料番号	樹種	註記
755	シイ		759	アワブキ		764	カシ		772	シイ	
756	ヤナギ		760	ユズリハ		767	カシ		773	シイ	
757	ユズリハ		761	アワブキ		768	シイ		774	アワブキ	
758	シイ		762	クヌギ		771	シイ		777	ヒサカキ	

以上をまとめると次のようになる。同定にやや疑問があり、？を付けたものも便宜上、その樹種に含めた。

Tab. 22 樹種鑑定表 (5)

樹種	数	樹種	数	樹種	数	樹種	数
スギ	1	クヌギ	2	カエデ	5	モチノキ	1
ヤナギ	4	カシ	19	サカキ	30		
ハンノキ	4	ムクノキ	3	ツバキ	10	(不明)	12
クリ	7	クスノキ	1	ヒサカキ	7		
シイ	181	タブノキ	4	ミズキ	2		
コナラ	4	ユズリハ	32	ヤマザクラ	4		

柵材の大部分を占めるものはシイノキで、約51%に達し、それに次いで多いものでも10%以下に過ぎない。それらはユズリハ・サカキ・カシの順になる。2～3%のものにはツバキ・クリ・ヒサカキがあり、1%内外のものはヤナギ・ハンノキ・コナラ・クヌギ・ムクノキ・タブノキ・カエデ・サクラがある。これらの樹種は九州北部の山地にふつうに生育しているものである。

柵材の樹種構成は、板付や四箇遺跡の杭列材に似ているが、シイノキが極めて多い点では差がある。

第4章　ま　と　め

那珂深ヲサ遺跡の第1次発掘調査は、予想されたように古墳時代からの水利施設あるいは水田址を検出するにいたった。発掘区域内は各時期の遺構が重複しており、時代を遡るにしたがい調査は困難をきわめ、また時間的関係などから調査区を限定して行なわねばならない状況も生じた。以下今回の調査の結果をまとめてみたい。

第4号溝と柵状遺構　今回の調査で一番古い時期の遺物としては弥生時代中期の土器が出土しているが遺構を伴なわない。試掘時にも遺跡の西側、すなわち台地よりの部分で弥生土器が出土しており、台地の辺縁付近にまで弥生時代の営みがあったと考えられる。

古墳時代には遺跡は東の沖積地へと拡がりをみせ、現在とほとんど変らないまでの生産址(水田址）をもつにいたったのではないかと考えられる。第4号溝とそこに付設された柵状遺構がその事実を明らかにしている。

第1号柵状遺構は全長16m で溝に直交して築かれている。構築方法は長さ2m 前後の横木を両側から杭で固定する工程を連続して行なったものである。溝底からの高さは1m に満たない。この柵状遺構より出土した土器は、一部弥生中期のものも混るが「布留式」併行の古式土師器が主体であり、構築時期をこれに求めてまずまちがいないであろう。またこの遺構は何度か改修を受けたものの、その使用期間は長いものではなく、出水などにより一度埋没したものと考えられる。

第2号柵状遺構は第1号柵状遺構の下流に約20m 離れて構築されている。遺構の遺存状態は良くないが、総延長11m にわたって蛇行しながら第4号溝を横切っている。主要となる杭列の他、小杭列がみられる。出土遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器高台付埦などがあり、この遺構の時期決定を困難なものとしている。第2号柵状遺構が築かれた場所は第3号溝と重複することを考えれば、歴史時代の遺物・杭列の一部分は第3号溝との関係で求められるのかもしれない。また杭列の遺存状態の悪さも第3号溝に切られたためとすれば、主要杭列は第1号柵状遺構の構築時期とあまり差がないと考えることもできる。

第4号溝が自然的な流路であったのか、それとも開鑿されたものかは大きな問題である。溝底に弥生土器が存在することは、弥生時代からの古い流路があったのかもと思わしめる。今後の調査の結果を待ちたい。

第4号溝が開鑿されたものならなおさら、それでなくともこの溝底に全長十数m の柵状遺構を構築する技術には目をみはるものがある。まさに古墳時代前期において農業技術の大革新があったといえよう。柵状遺構は両岸の水田に取水するための集水用の堰と考えられるが、発掘区内

では明確な取水口を見出すことができなかった。しかし、多量の農具類の出土はこの地において耕作の行なわれていたことを裏付ける。まさに溝に堰を設け、取水をすることが台地から離れた沖積地に水田耕作を拡大するのに大きな意義をもったといえよう。同時にまた洪水等による耕作地、あるいは水利施設の埋没という危険性もあった。第1号柵状遺構の比較的短期間での埋没・破棄はそれを如実に物語っている。

第3号溝　第4号溝が完全に埋没した後第3号溝が発掘区南側から北に直線的に伸び、途中で西に方向を変えて流れる。調査が溝の流路を追う形になりその周囲の状況はつかめなかったが、溝に連絡する取・排水口は築かれていない。左岸には小丸杭による護岸用と考えられる杭列が密に連続するが、右岸にはこうした施設をもたず岸線の確認は困難をきわめた。出土遺物からこの溝が営まれた時期は12世紀後半頃で、第4号溝が何時埋没したかの問題は残るとしても時代の隔りが大きい。第3号溝は付属する施設が見出せず、その機能についても明確にしがたかった。

第1・2号溝　第1号溝と第2号溝はほぼ同様の流路をもつ。このうち第2号溝はその出土遺物からみて第3号埋没からあまり時期をあけないで営なまれたものである。溝の構造からみれば、新たに開鑿されたものではないかと考えられる。この溝の西北側の左岸には2ヶ所水口遺構が設けられ、うち第1号水口遺構には連絡して杭列が溝中に築かれ、これが集水用の堰となり、第1号水口遺構へと取水していたと想定できる。左岸には無数の足跡状のくぼみと、畦畔と思われる高まりが部分的にみられたが、1枚1枚の水田面の確認はできなかった。

第1号溝は洪水により第2号溝とそれに伴う水田面が砂に覆われた後、第2号をなぞるように開鑿されたものである。第2号溝と異なり、左岸には護岸もかねた畦畔が続き、それを切って3ヶ所に水口遺構が設けられている。うち第5号水口遺構には第1号溝を横切る杭列と連結し、堰—取水口の関係をもつものと考えられる。左岸には明確な畦畔はみられないが、取・排水口と思われる遺構が2ヶ所ある。右岸側には無数の足跡状のくぼみと、その間に直線的にのびる畦畔の跡がうかがわれる。しかし畦畔で区画される水田は見出せず、かろうじて9mの水田面の一辺が確認できただけであった。右岸はやはり無数の足跡状のくぼみが存在するが、うねではないかと思われる溝が東西方向に6条直線的に掘られている。溝をはさんだ両岸での耕作方法の違いを示しているのかもしれない。第1号溝とそれに伴う水田面の時期比定は出土遺物がほとんどなく困難であるが、水田面を覆った砂層の上の層から染付けが出土しており、少なくとも近世以前には営まれていたと考えられる。この溝と水田面も洪水によって砂をかぶり埋もれてしまう。しかし第1号溝左岸の畦畔部分にはその上に重なるようにしてつい最近まで板付—那珂を結ぶ間道が通っていた。

以上、今次の発掘の結果を古い時代からたどってきた。発掘調査は遺構の重複関係から困難なものとなり、また時間的制約もあり、その結果は決して十分なものではない。特に第4号溝

とその付設遺構については発掘区が限定され、両岸との関係を明確にできなかったのは非常に残念である。那珂深ヲサ遺跡の全体像については第２・３次調査の結果を待ちたい。(浜石)

今後の課題

遺構については以上に述べて来た通りであるが次に古代～中世期における那珂深ヲサ遺跡周辺について触れたい。先にも記したように日野尚志氏は「那珂郡家」について那珂郡条里の復元作業に基いて同推定地を御笠川・諸岡川にはさまれた大字那珂字群久に求めている[註1] (Fig.44) 一体に各国郡衙の成立期と規模等については不明な点が多い。九州内ではかって群にわたって40棟前後の礎石を有した倉庫群で瓦葺きではない建物の発見された肥後国王名郡衙[註2] (玉名市立願寺) や政庁にあたるのではないかとされる南面する瓦葺建物等が確認された同国菊池郡衙が知られてる。また筑前では穂波郡家が日野尚志によって穂波川の右岸 (穂波町秋松) の方２町区域に比定されている。次に三井郡小郡遺跡[註3]では３群に分けられる建物群が検出され、出土した土師器・須恵器・鉄鏃[註4]からこれらの建物群[註5]は少くとも７世紀末に一部が成立し、８世紀にはその大部分が成立したのではないかとされ、これらは筑後国御原郡郡衙に付属する郡倉ではないかと考えられるものなど断片的に知られている。このような中で那珂郡衙の比定されている群久地区には現在まで何らの考古学的調査もおこなわれたことが無い。周辺地区における奈良時代遺跡や発見された遺物をみると板付６丁目警察学校内で昭和10年代後半にこの台地が削正された際に多数の瓦とともに礎石が出土したことが伝えられている。また警察学校に隣接するＤ－10ａ地点における竪穴 (ＳＫ－01) では奈良時代前期から末期にかけての須恵器、土師器類とともに丸瓦、平瓦、塼などが出土している。特に平瓦は厚さ４cmをこえる分厚い種類で筑前怡土城址 (築城は天平勝宝８ (756)～神護景雲２ (768)の12年間にわたる) 出土のもの同様と考えられている。また単独ではあるが諸岡遺跡Ｄ区第６号地下式横穴埋土から老司一式に相当する軒平瓦が出土している。それから板付遺跡第１区台地上の包含層でも格子目叩きをもつ平瓦破片が出土している[註8]。那珂中学校内では奈良時代土師器の出土が知られているが[註9]、直接那珂郡衙の位置・規模に触れ得るものはなく、今後の那珂丘陵・麦野丘陵における調査[註10]に期待したい。続く中世期の那珂周辺の村落は鎌倉初期の武藤 (小弐) 氏の支配に始まり、15世紀以降大内支配の中におかれることになる。中世期は気候の変遷上で鎌倉時代が寒冷、15～16世紀には温暖となるとされることもあるが、各れにもせよ農業生産の主題となる河川の統制と農業技術革新は古代に比較してそれほど顕著なものではなかったと考えられている。深ヲサ遺跡で検出された溝遺構 (第１～３号溝) は鎌倉時代以降に属する水利遺構と考えられ、近辺地域に同時期の村落が存在したのは確実であろう。やや時代は下るが14世紀代に比定される村落遺構として周辺地域では諸岡[註11]、那珂川町井手ノ原[註12]、平蔵[註13]などが知られている。

これらは「方形区画」とされる溝遺構に囲まれた内部に数棟の掘立柱建物を含む構造のものでこれらは数個接続して生活単位をなすらしい。これらは建武３（1336）年　にみる合戦をはじめとする戦禍に対する防御的構造をもつとともに古代的な条里制を基本とする村落形態からこうした核的なものによって集合する村落形態へこの地域が変化していった一つの証左であるかも知れない。最後にまとめが付焼き刃的なものとなったことを記して筆をおきます。(横山)

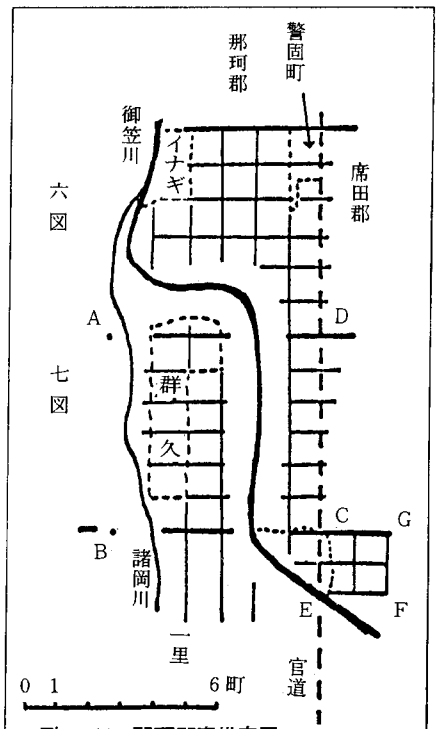


Fig. 44　那珂郡家推定図
（日野尚志氏による）

註１．日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」佐賀大学教育学部研究論文集24(1)（1976）

註２．田辺哲夫「玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構」熊本史学10　（1956）

註３．藤岡謙二郎編「日本歴史地理総説」古代編　（1975）　吉川弘文館

註４．日野尚志「筑前国穂波郡の条里と郡家および屯倉」人文地理19の６　（1967）

註５．福岡県教育委員会「福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査報告書」（1968）

註６．福岡市埋蔵文化財遺跡地名表―総集編―福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　（1971）

註７．板付周辺遺跡調査報告書(6)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　（1980）

註８．板付周辺遺跡調査報告書(2)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集　（1975）

註９．板付―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書 1971 ～ 1974―福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　（1976）

註10．註６と同一文献

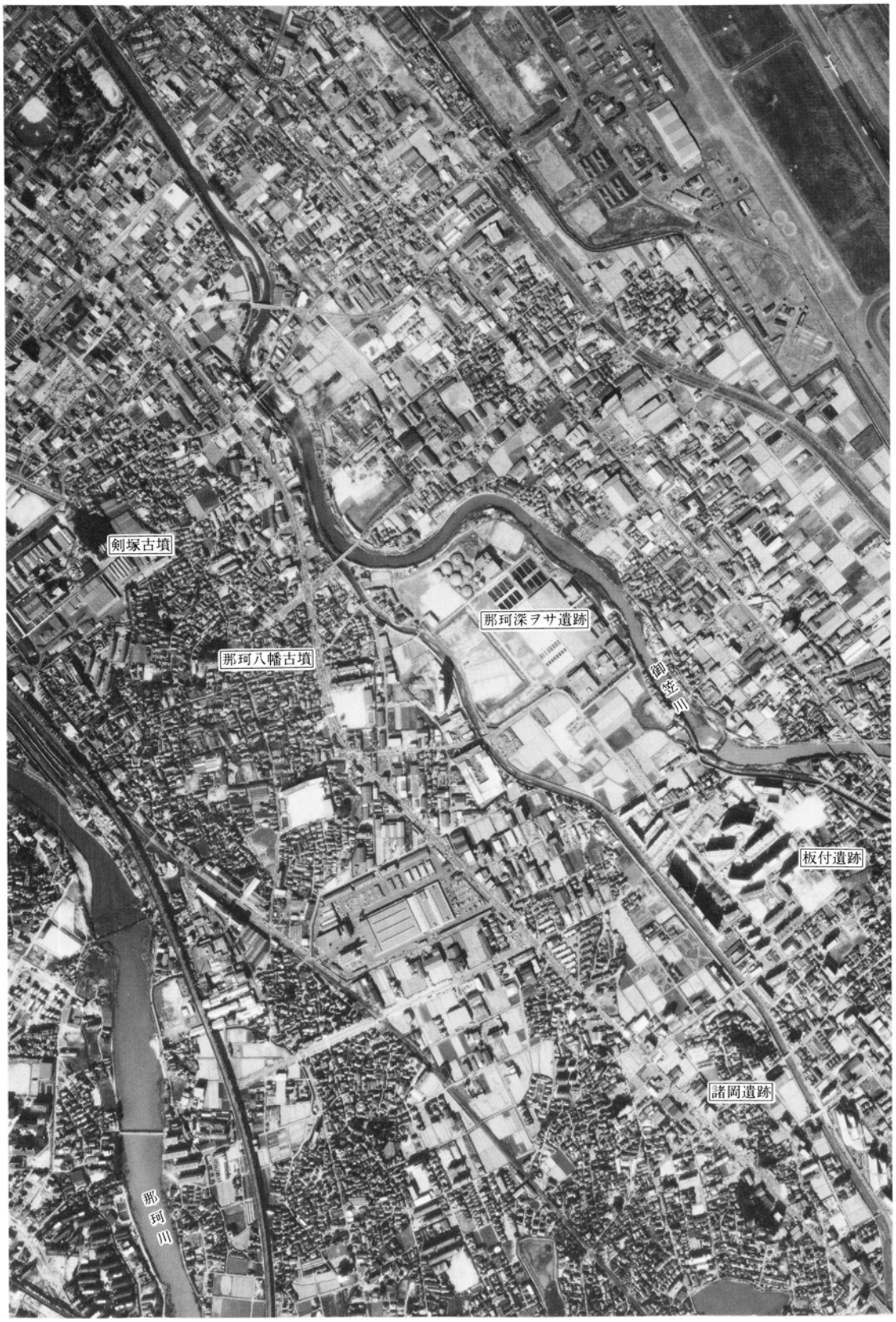
註11．註７、８と同一文献

註12．「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」第２集　（1976）福岡県教育委員会

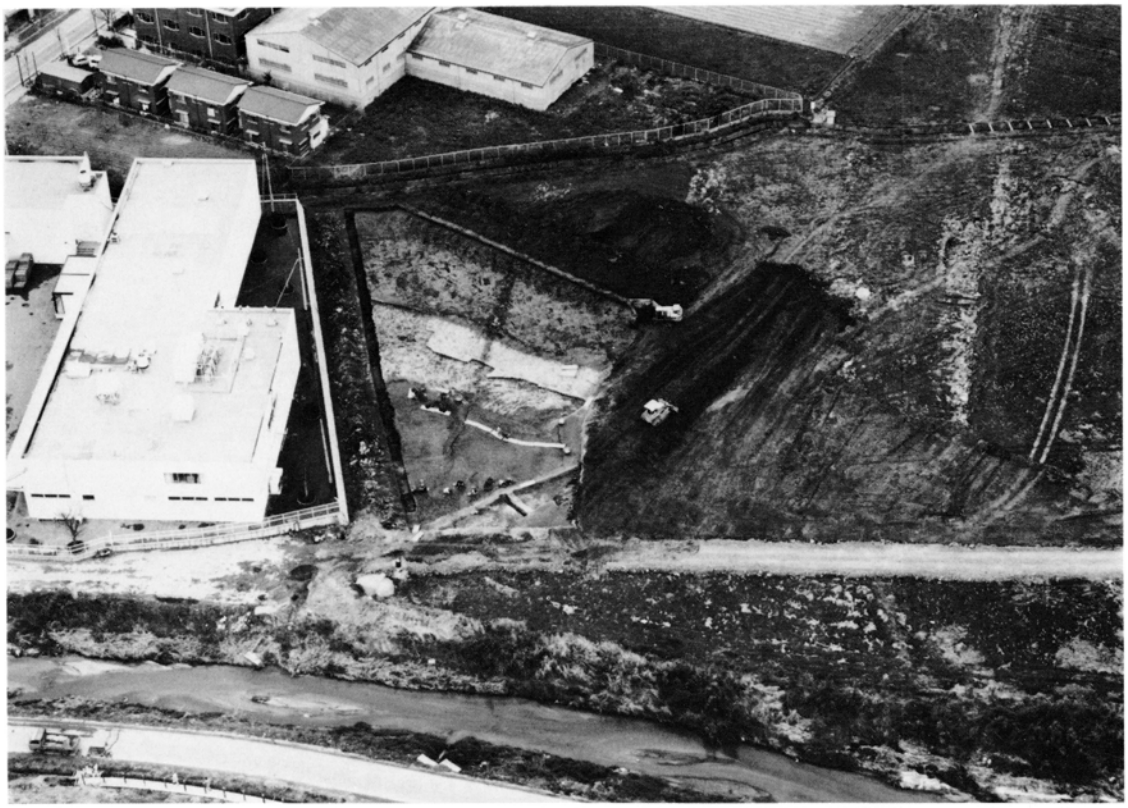
註13．「平蔵遺跡」那珂川町文化財調査報告書第５集　（1980）

図　　版

PLATES



那珂深ヲサ遺跡周辺航空写真（1980年11月撮影 約1/1.5万）

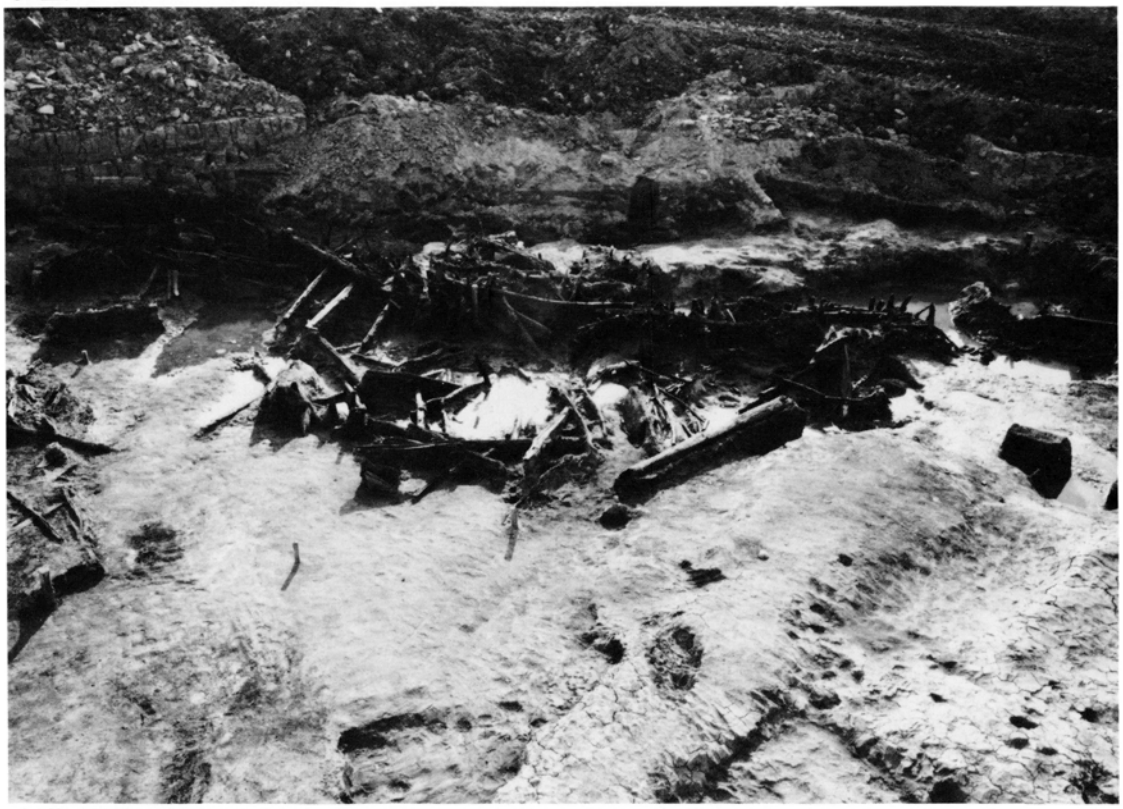


(1)東より

(2)北より

那珂深ヲサ遺跡全景

第 4 号溝全景(西より)



(1)第 1 号柵状遺構(西より)

(2)第 1 号柵状遺構(西より)

(1)第 1 号柵状遺構(南より)

(2)第 1 号柵状遺構(北より)

(1)第 1 号柵状遺構細部

(2)第 1 号柵状遺構細部

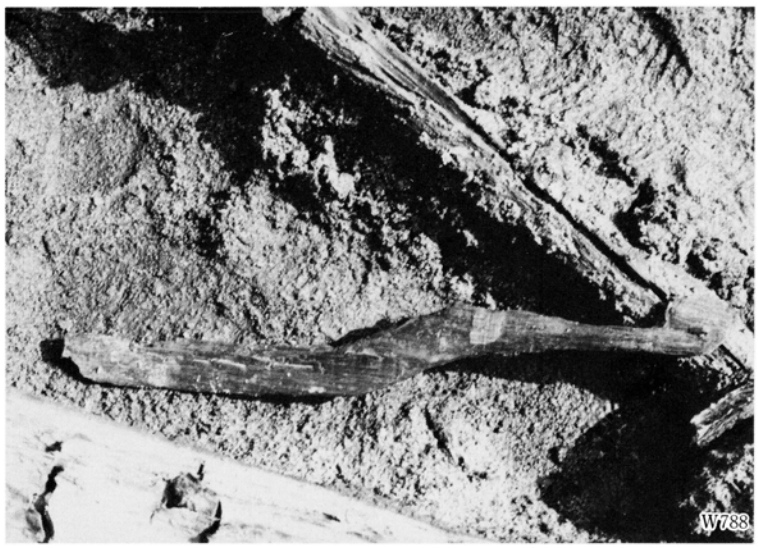
(1)第 2 号柵状遺構(試掘トレンチ内)

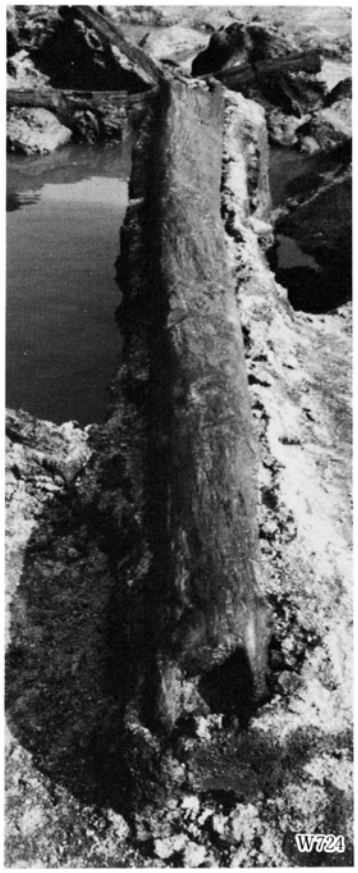
(2)第 2 号柵状遺構(試掘トレンチ内)

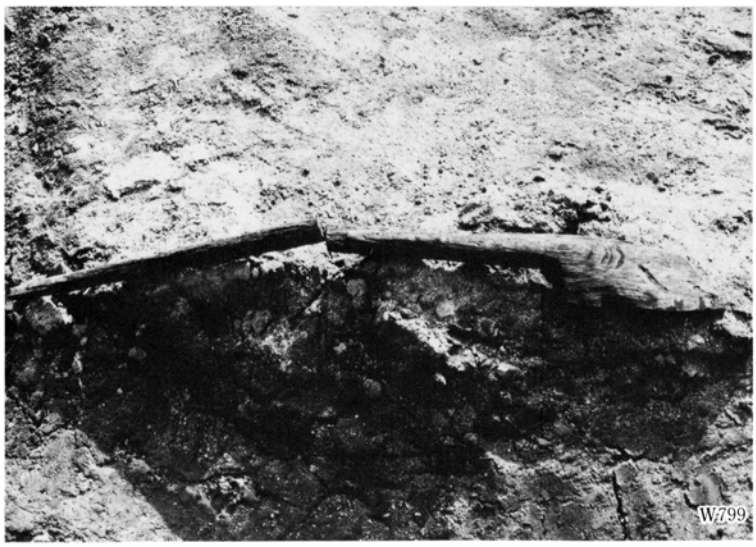
(1)

(2)

(1)第２号柵状遺構(西より)
(2)第２号柵状遺構と北側台地

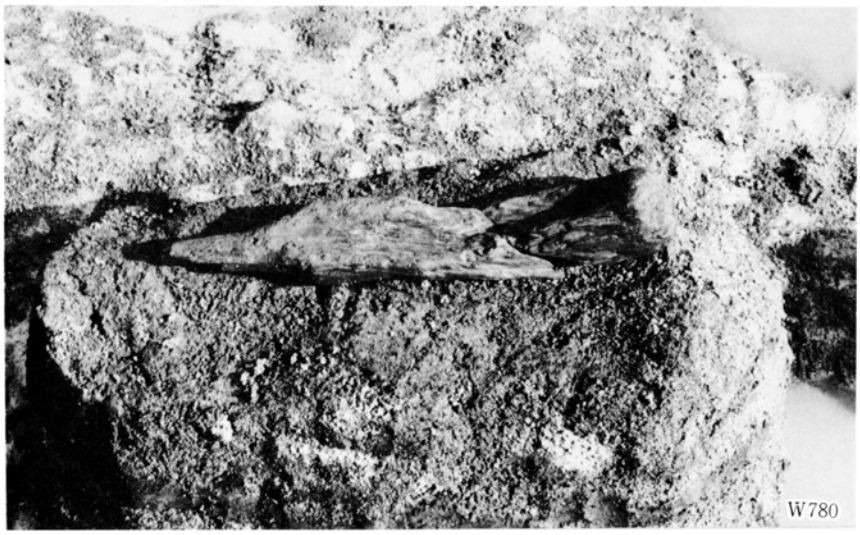






木器出土状況

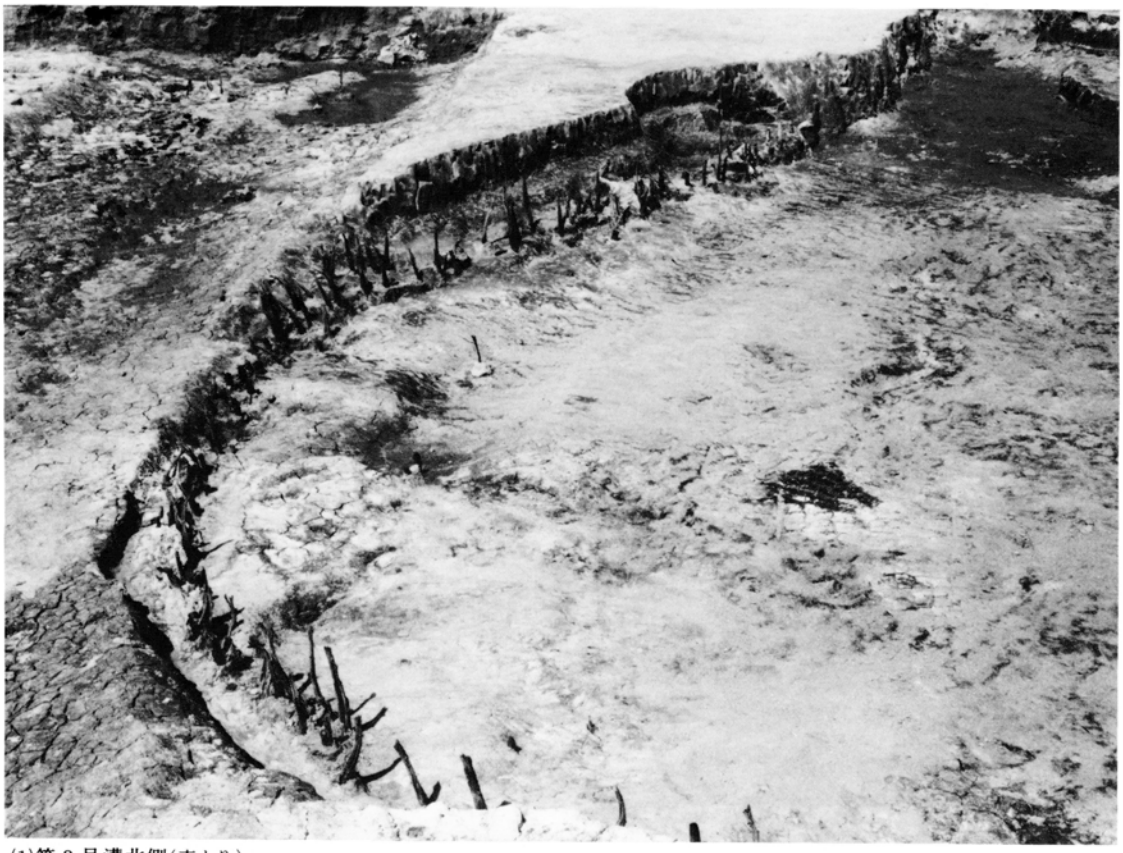
PL. 10



木器出土状況

(1)第 3 号溝南側(東より)

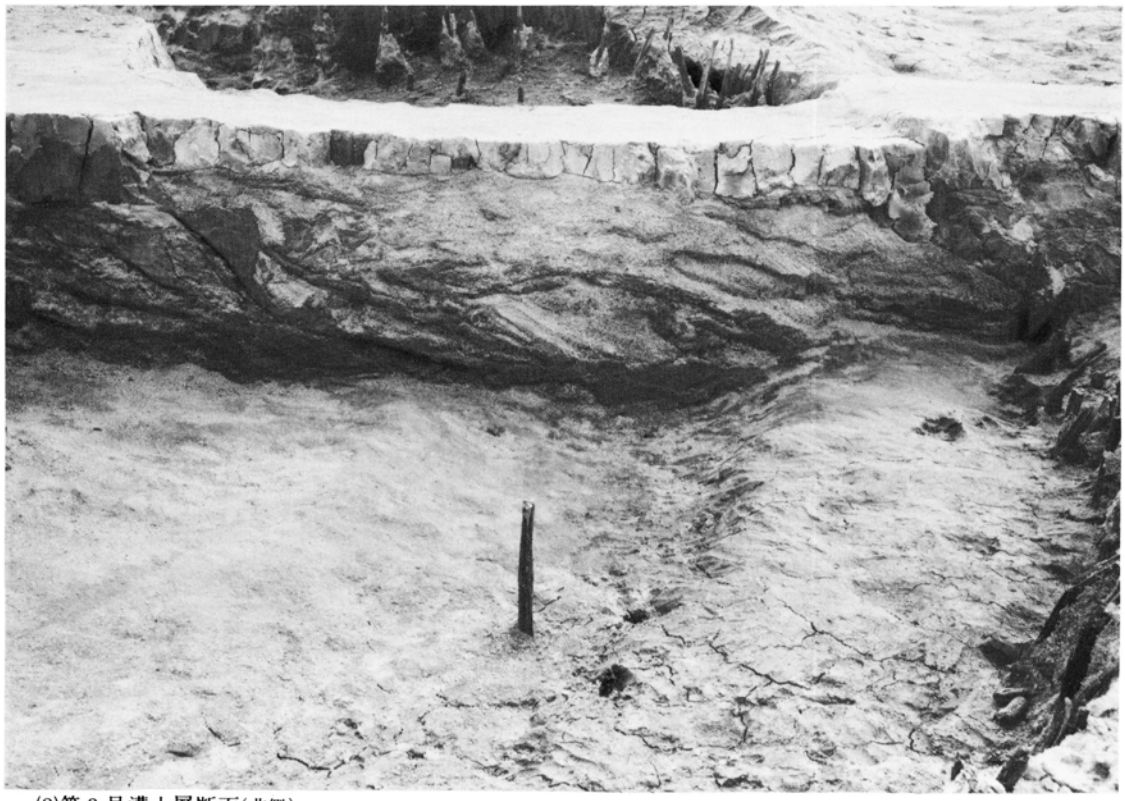
(2)第 3 号溝南側(北より)



(1)第 3 号溝北側(東より)

(2)第 3 号溝北側(西より)

(1)第 3 号溝土層断面(試掘トレンチ内)



(2)第 3 号溝土層断面(北側)

PL. 14

第２号溝全景(西北より)

(1)第 2 号溝東南側(東より)

(2)第 2 号溝西北側土層断面(西北より)

(2)第 2 号溝西北側杭出土状況

(1)第 2 号溝西北側(西北より)

(1)第１・２号溝土層断面

(2)第１号溝畦畔断面

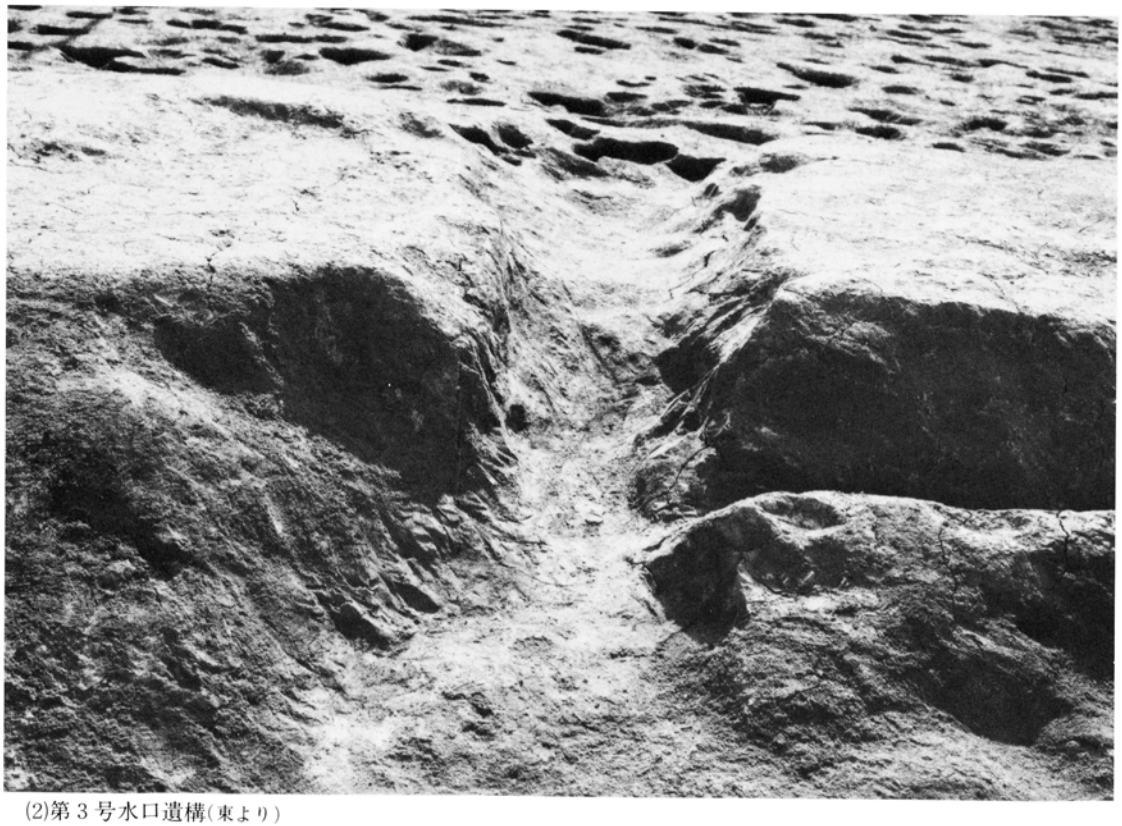
第１号溝と水田面(東より)

第１号溝と水田面(南より)

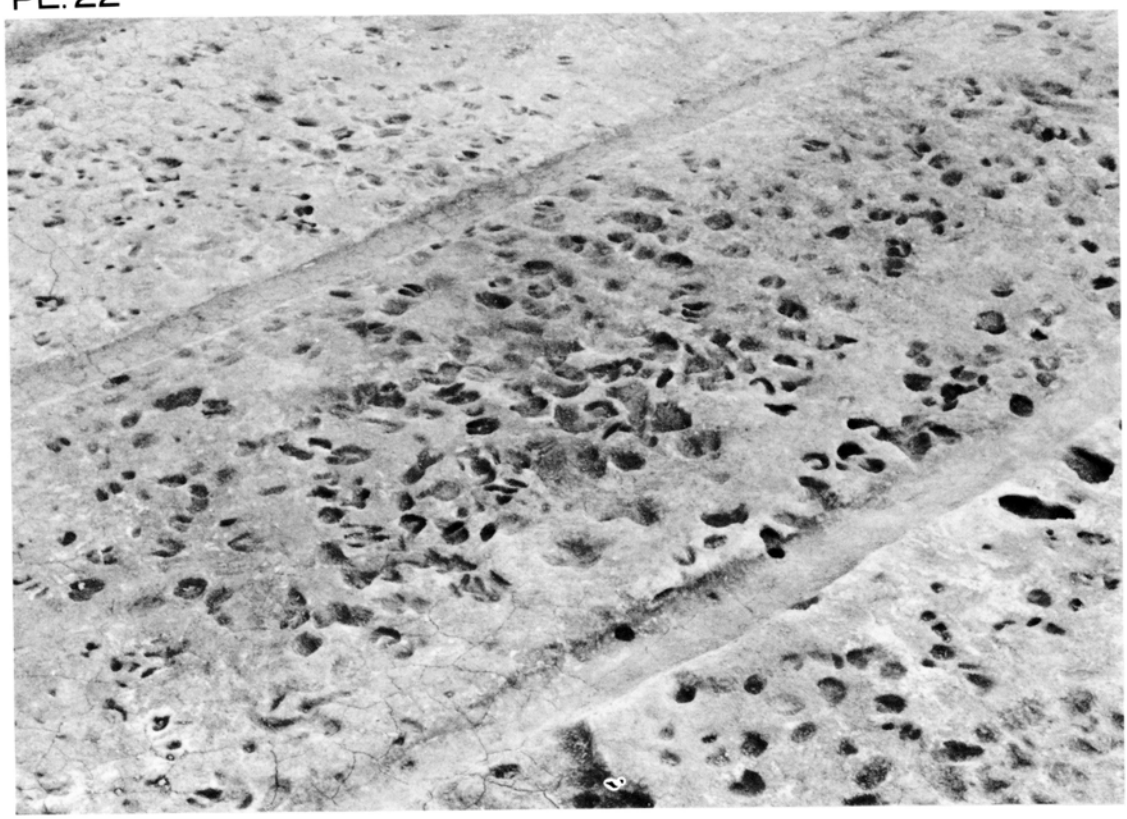
(1)第１号溝と東側水田面(南より)

(2)第１号溝周辺(北より)

(1)第３号水口遺構(南より)

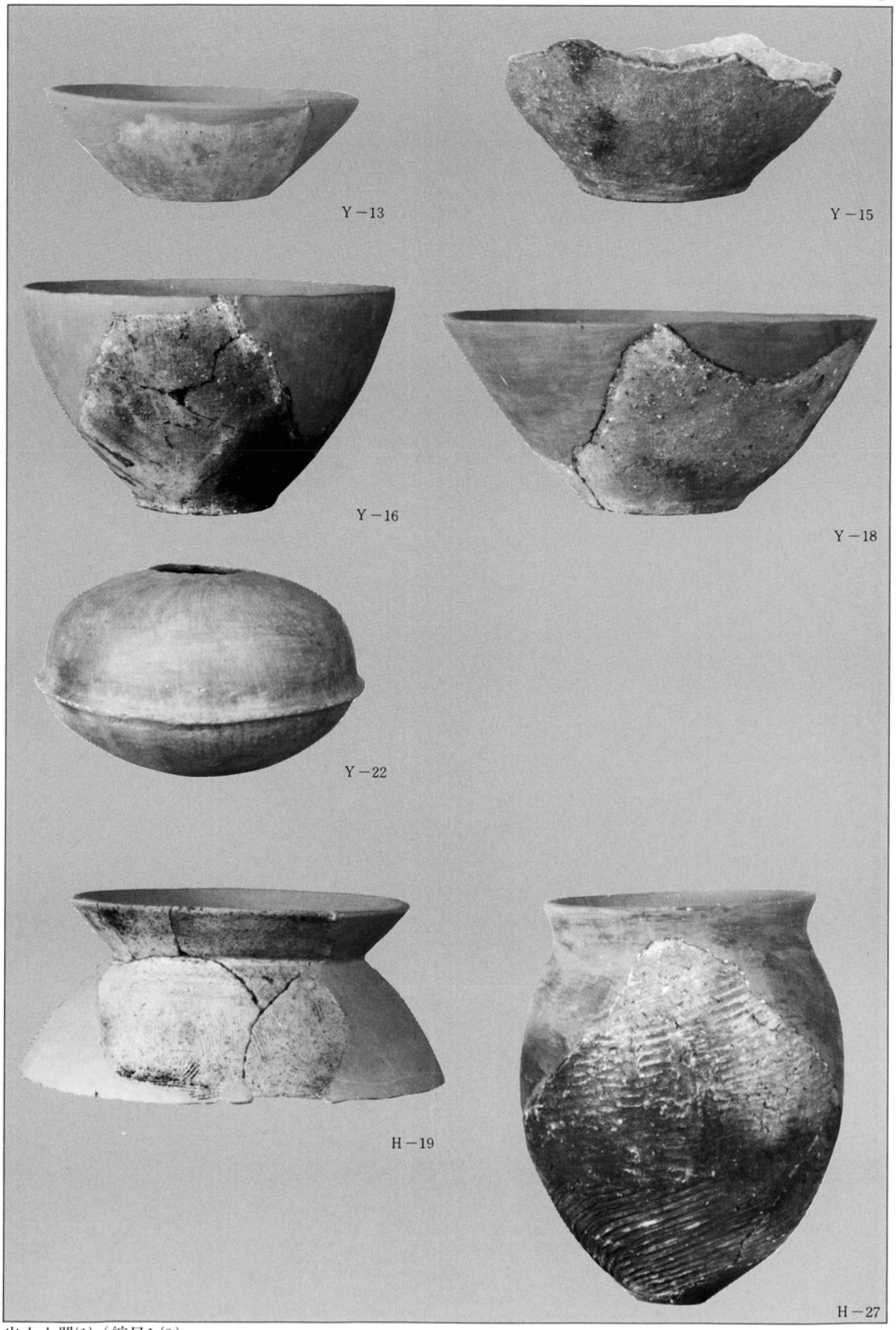


(2)第３号水口遺構(東より)

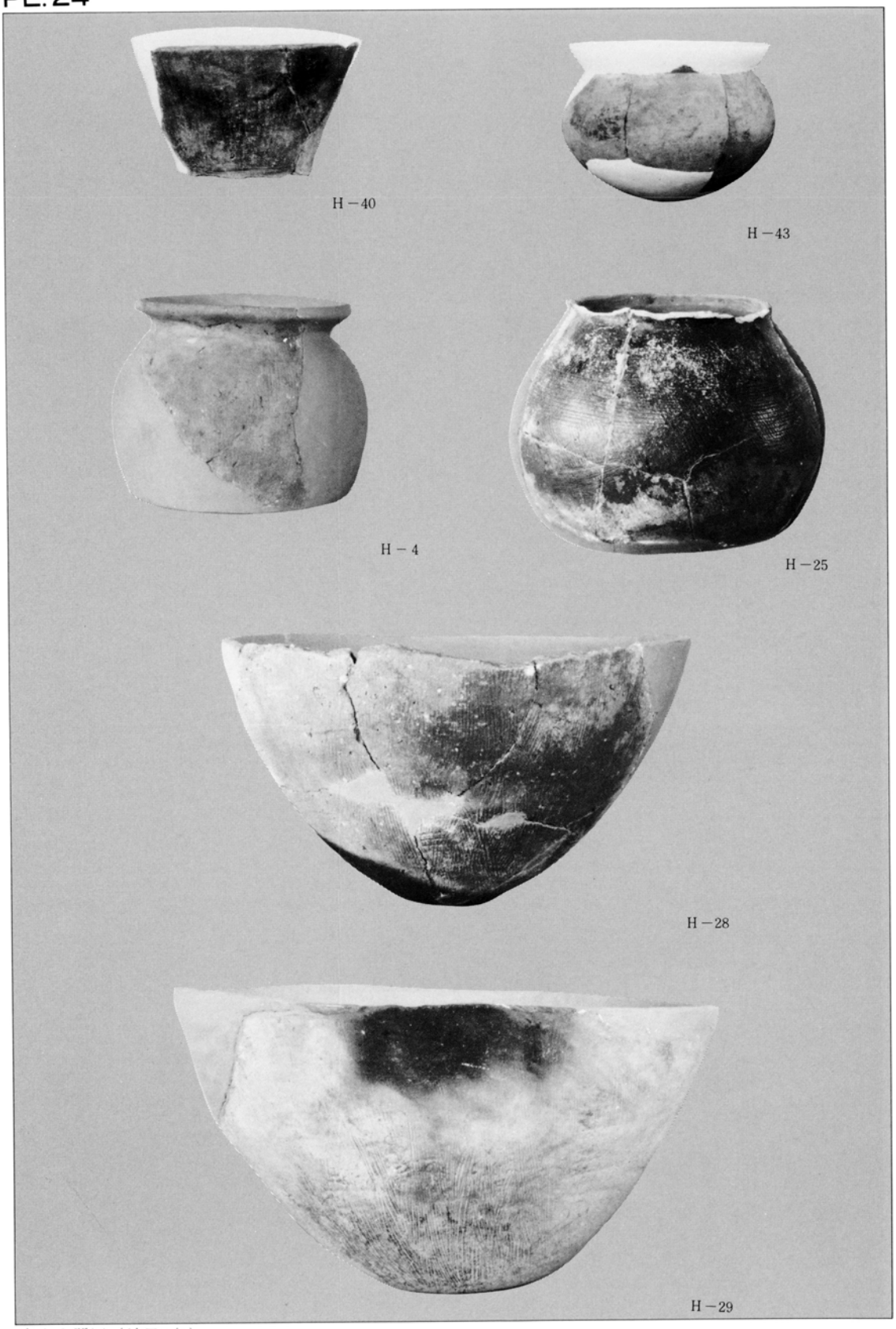


(1)足跡状遺構(第1号溝東側水田面)

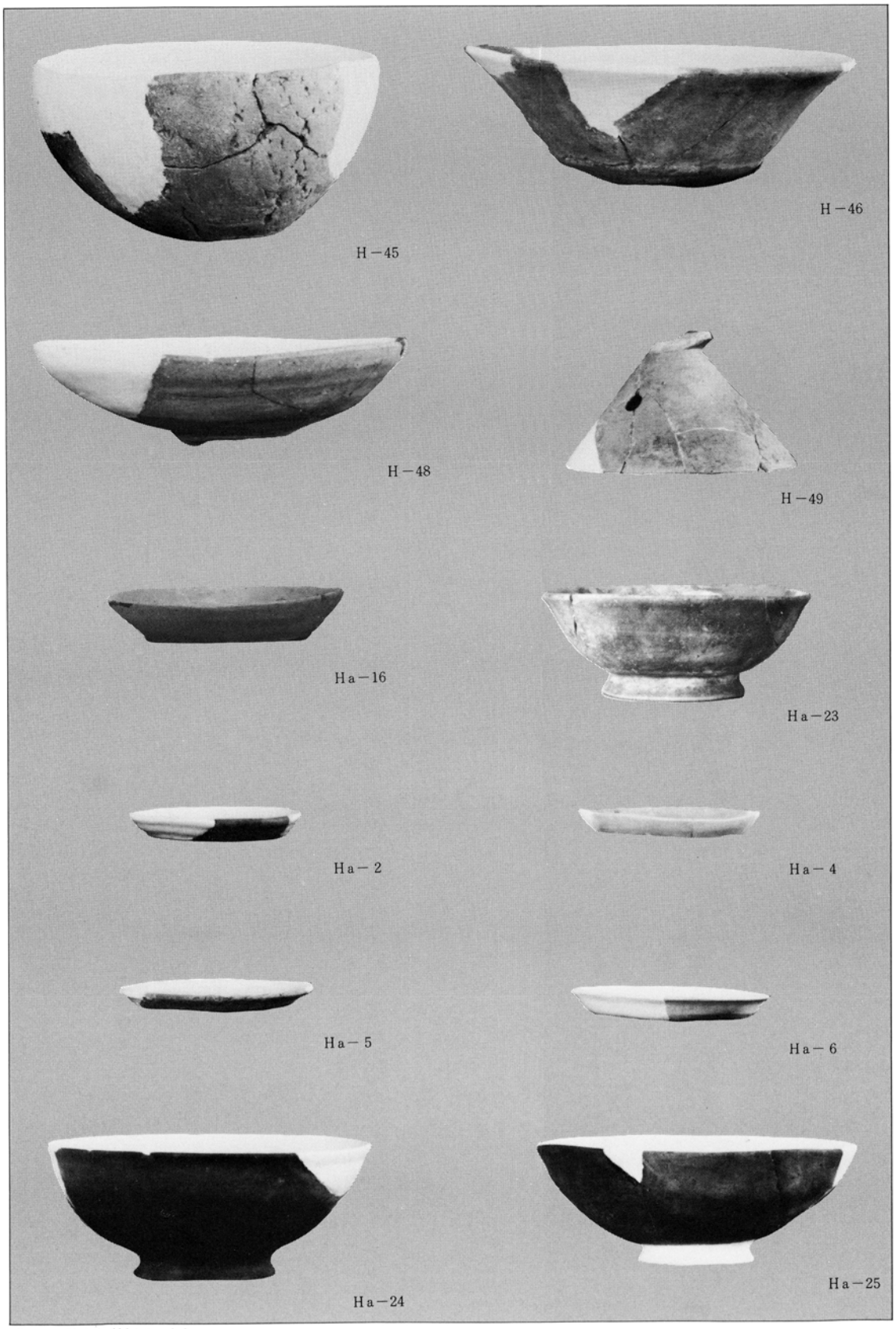
(2)足跡状遺構細部



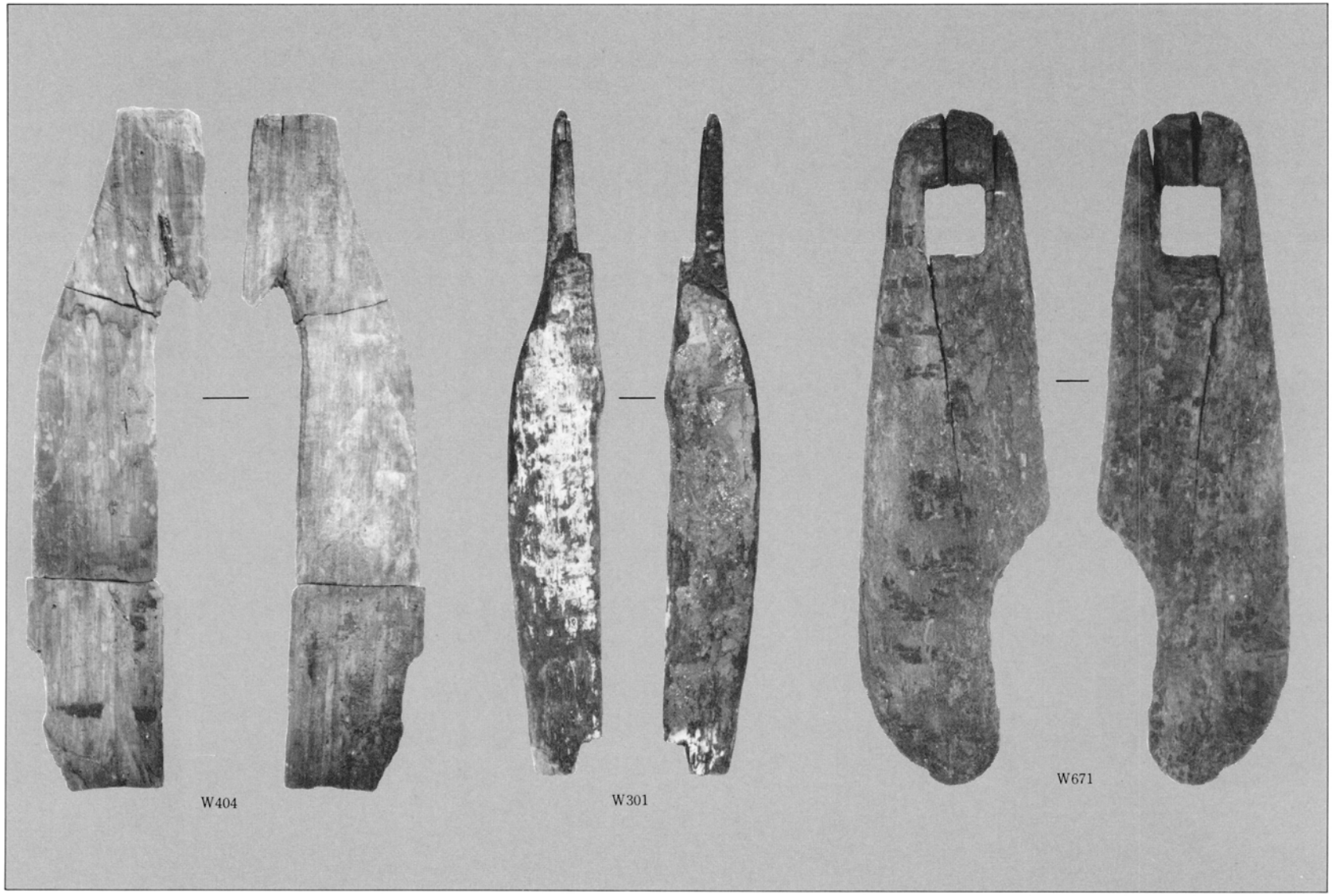
出土土器(1)（縮尺1/3）



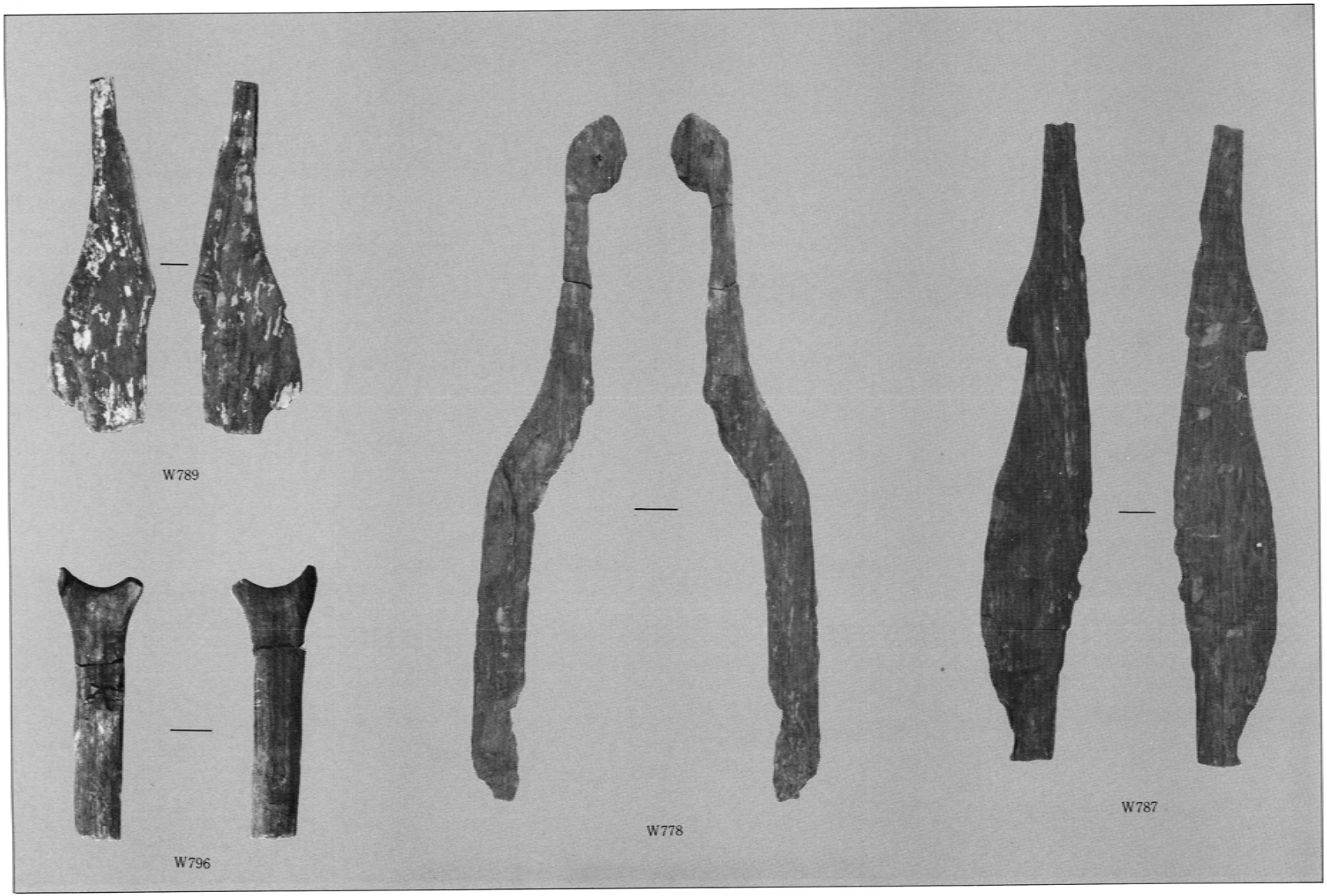
出土土器(2)（縮尺1/3）



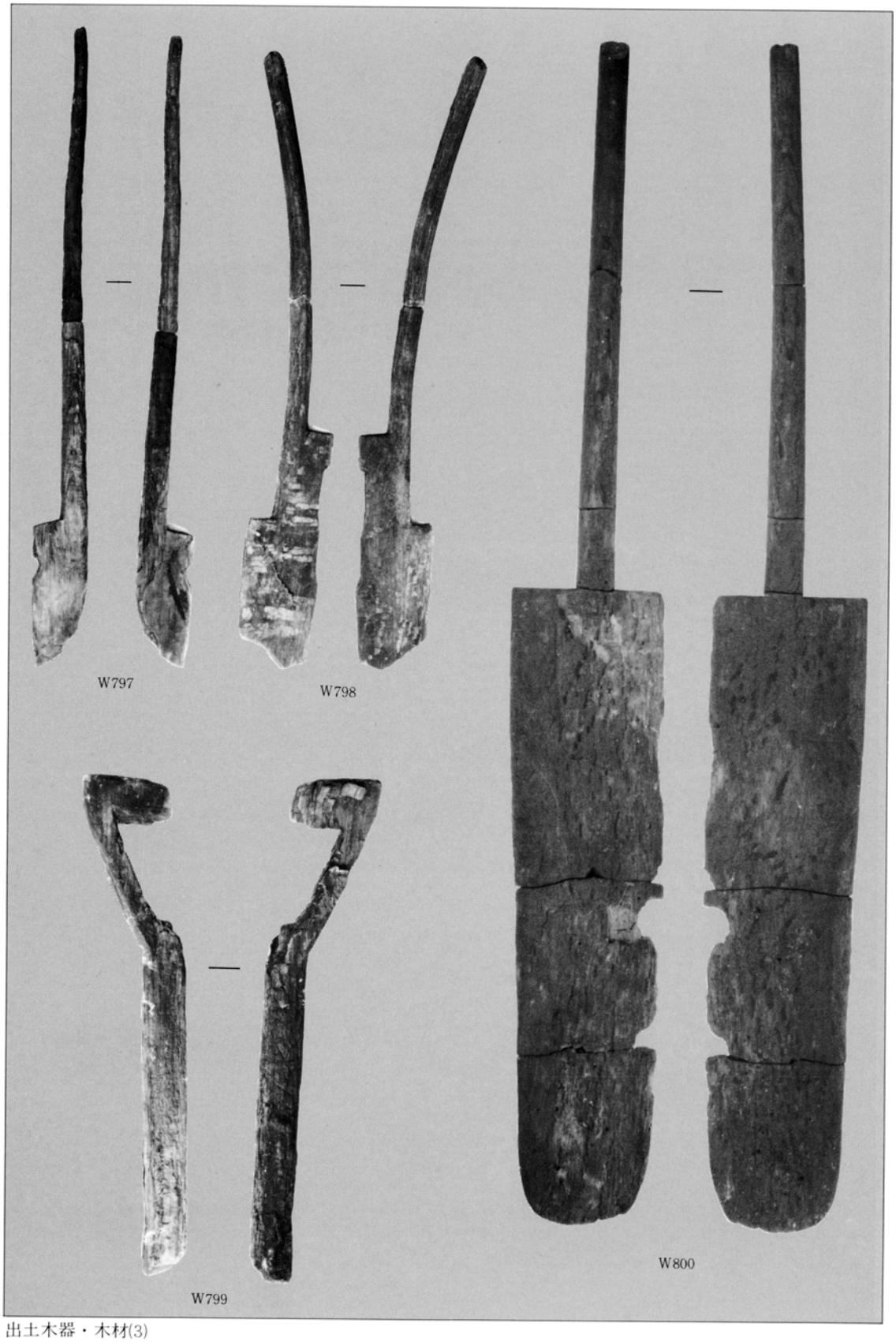
出土土器(3)（縮尺 1/3）



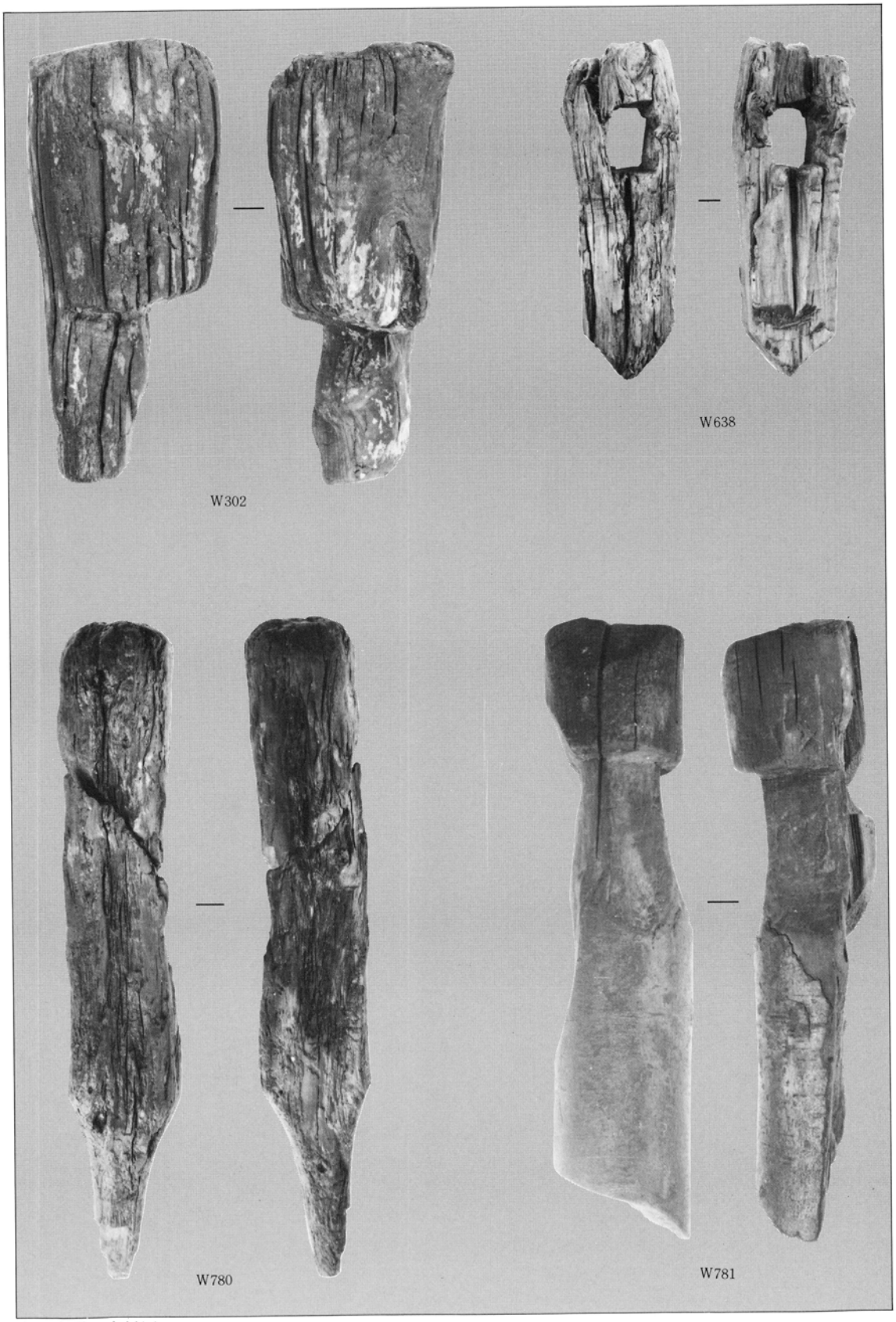
出土木器・木材(1)



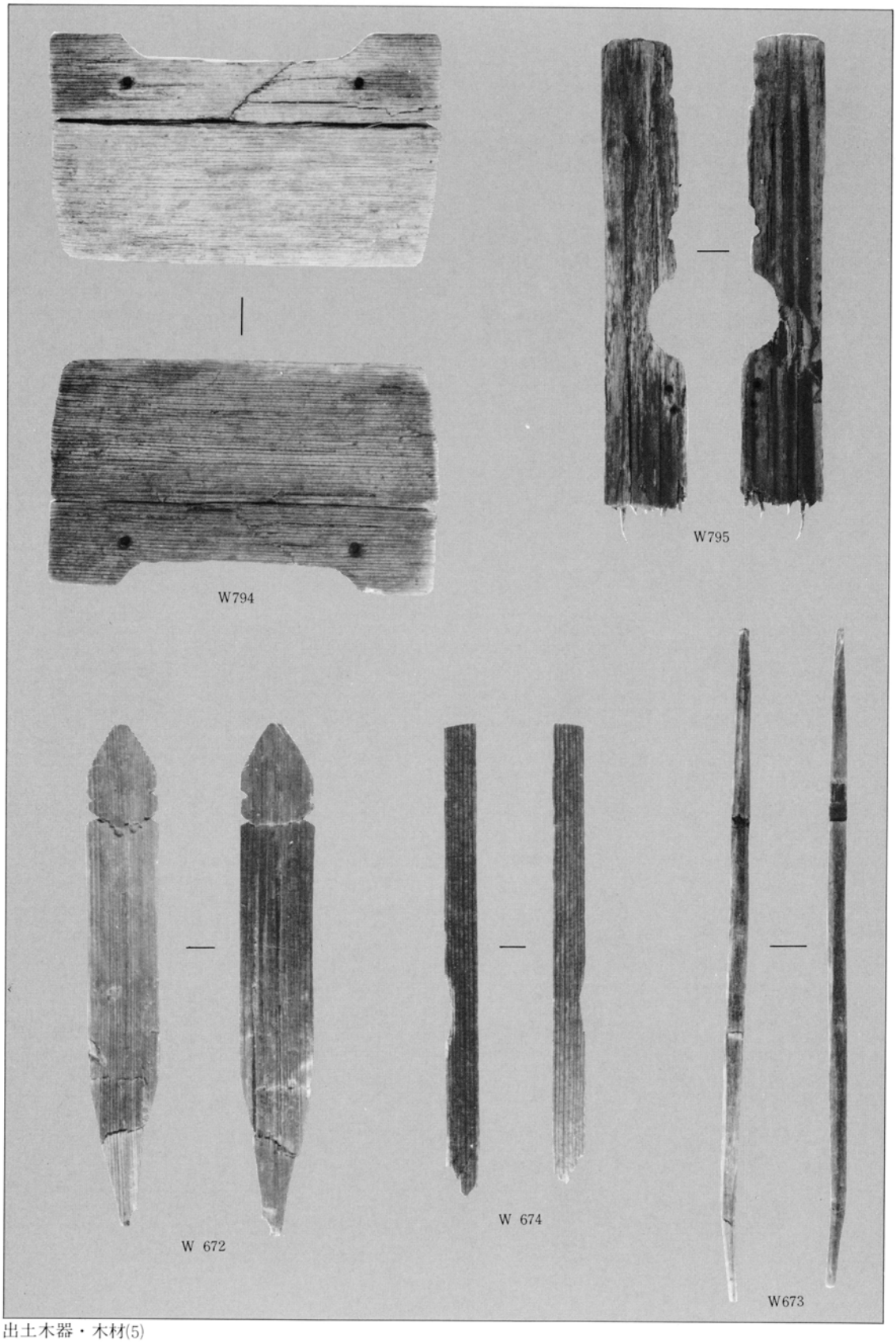
出土木器・木材(2)



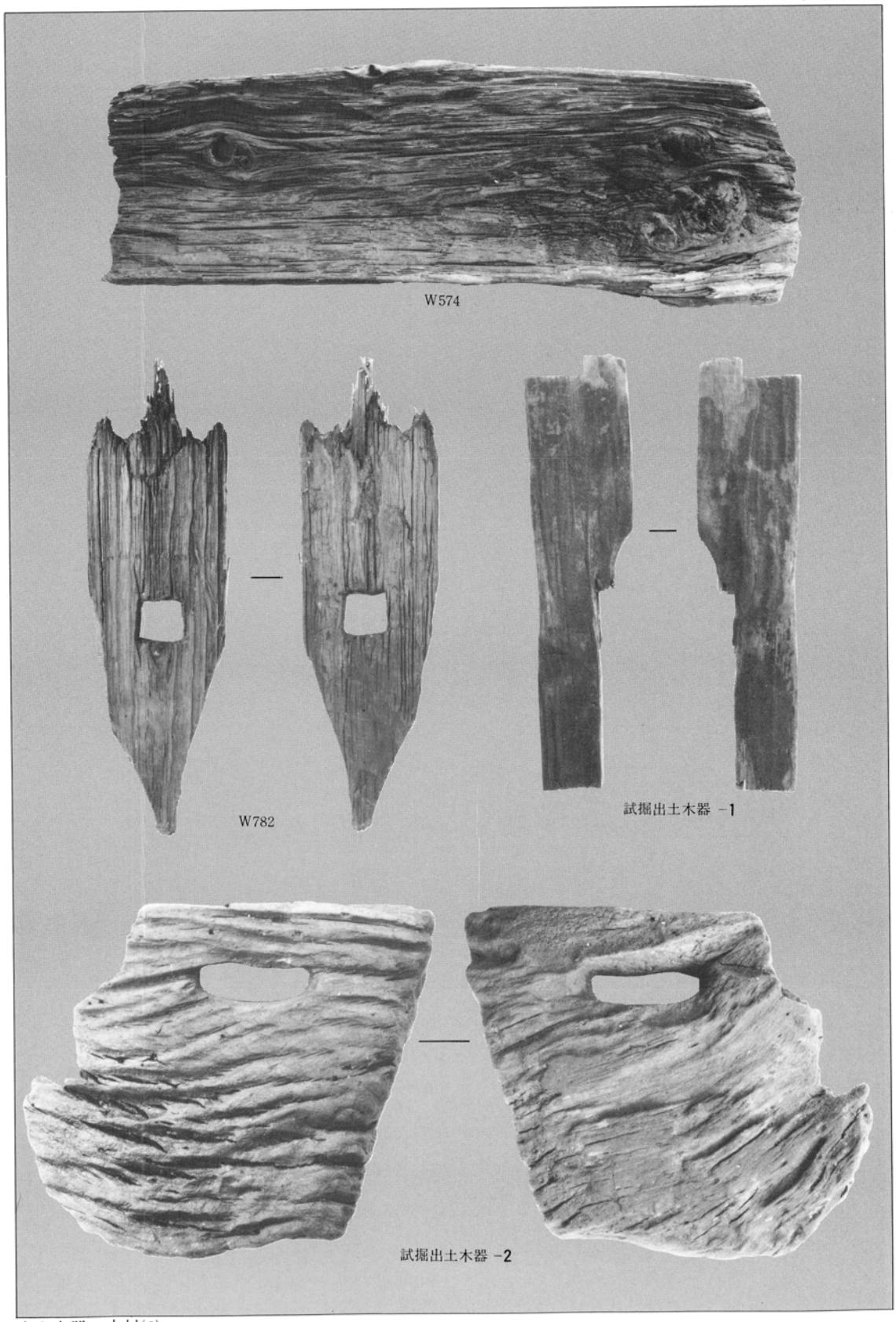
出土木器・木材(3)



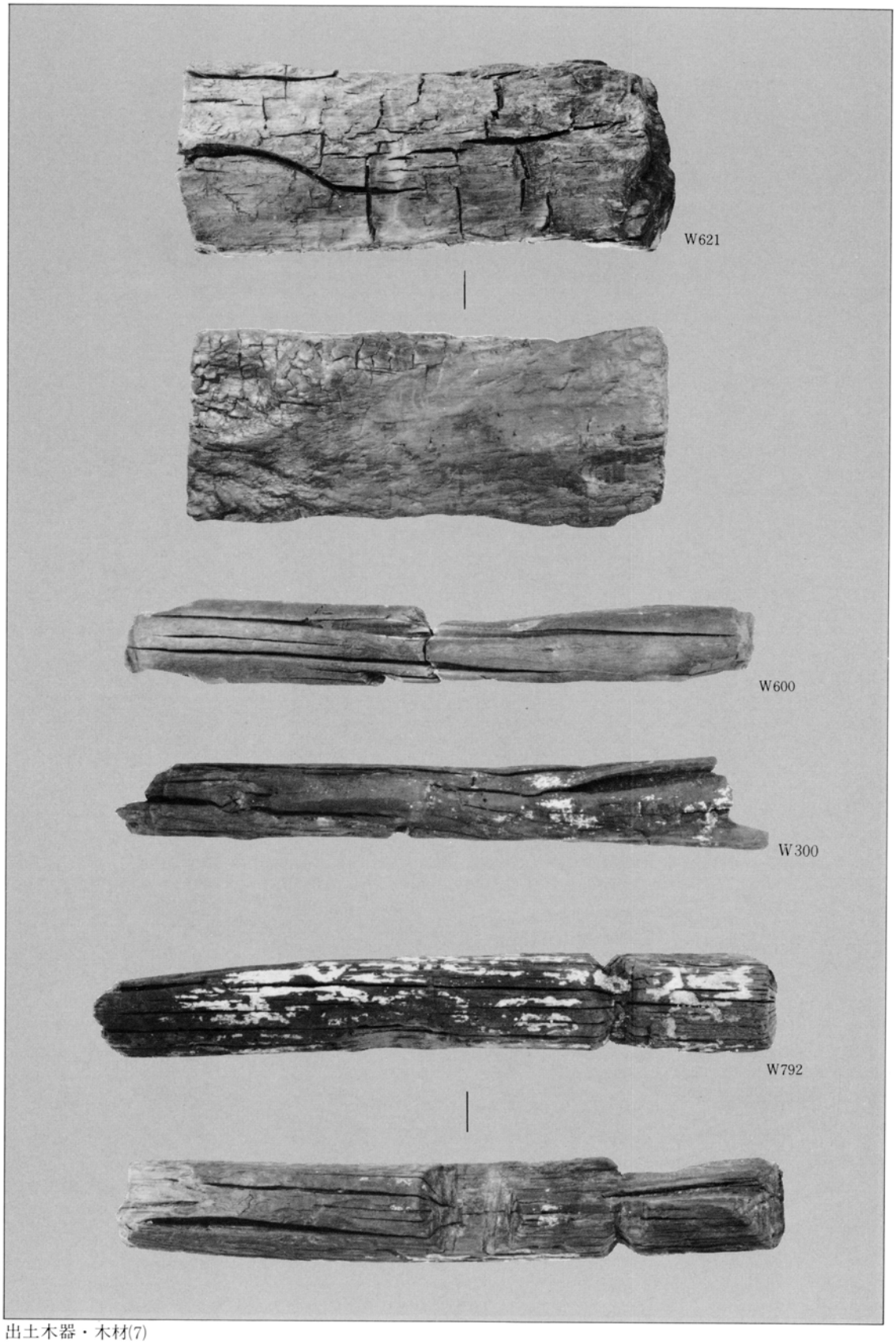
出土木器・木材(4)



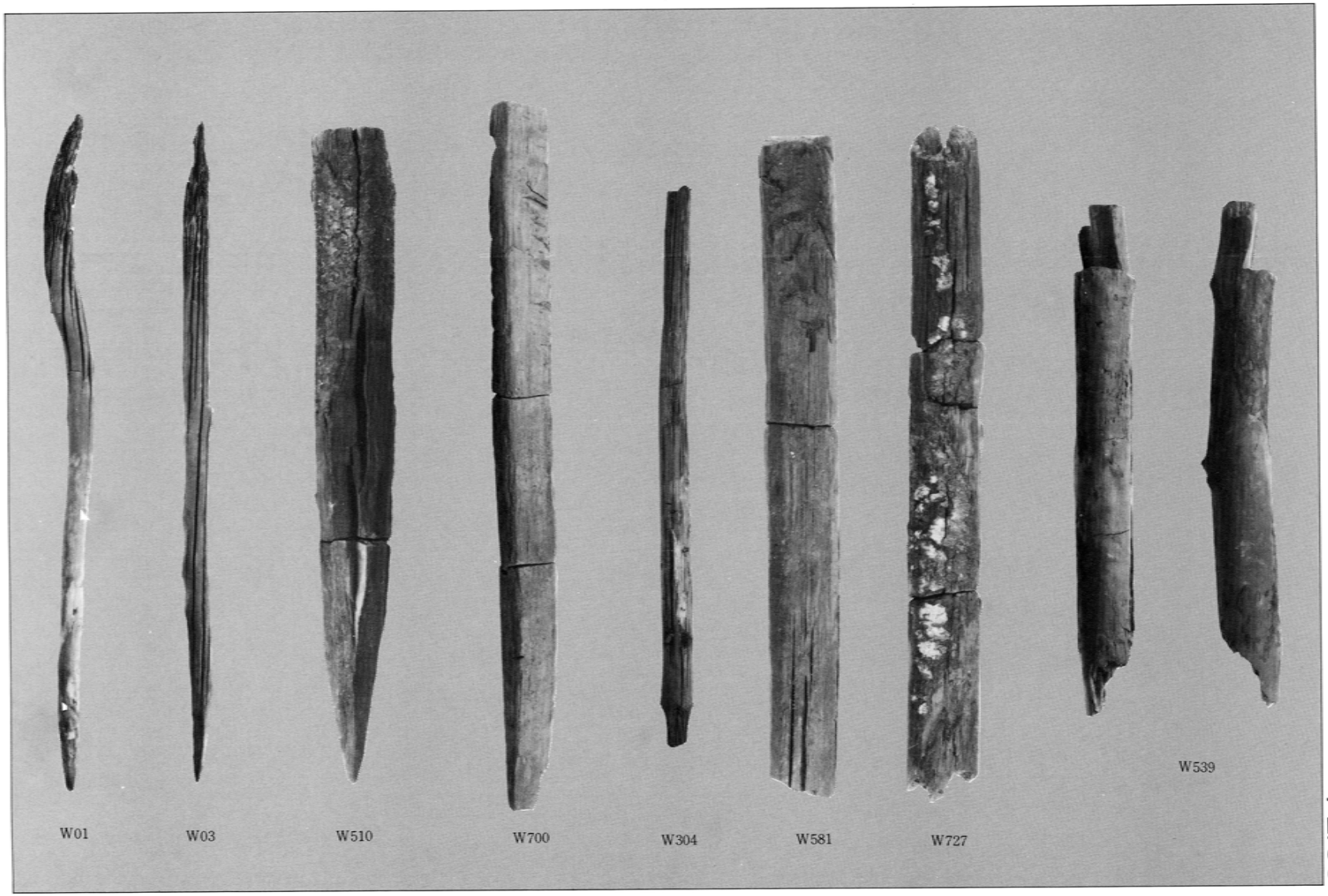
出土木器・木材(5)



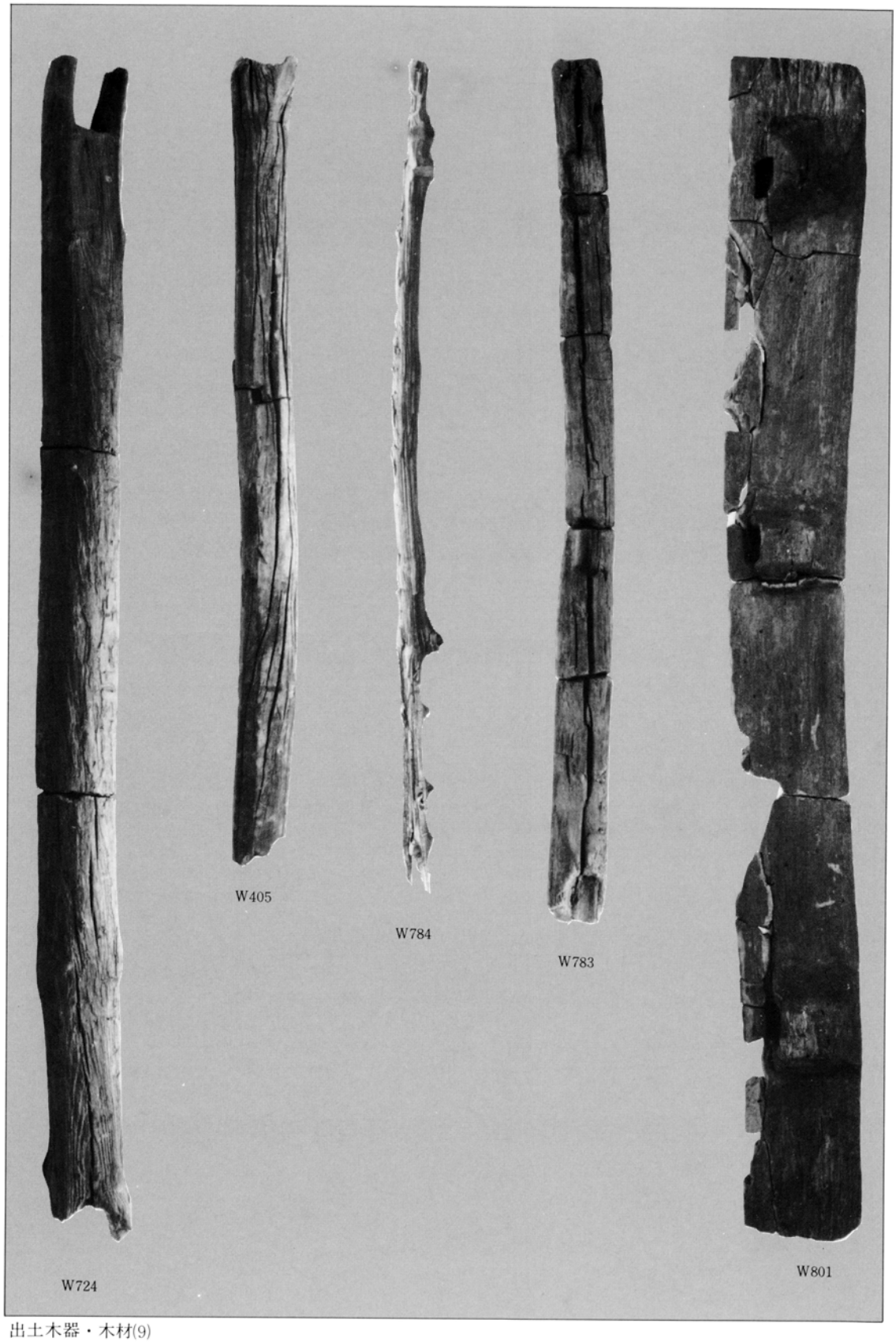
出土木器・木材(6)



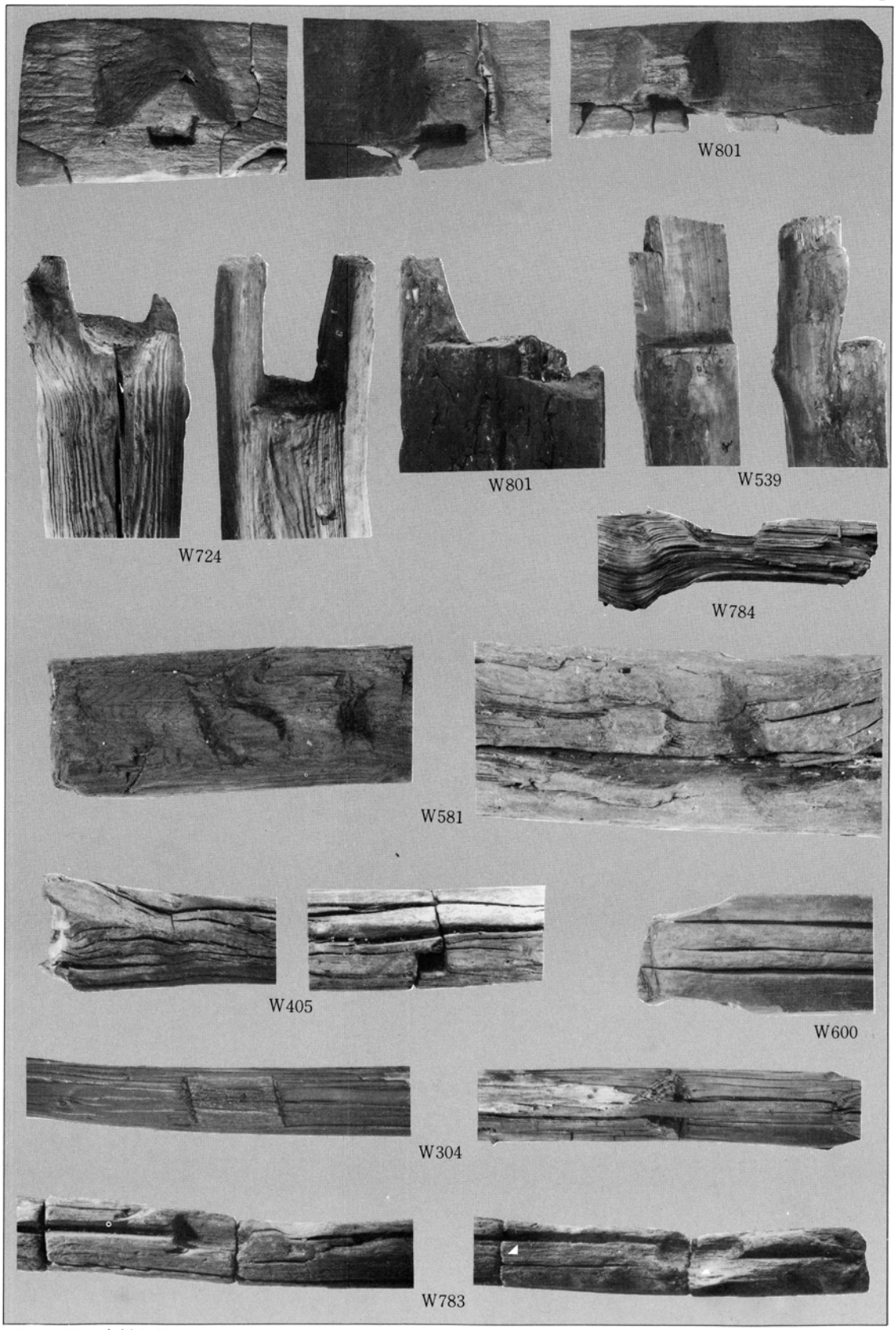
出土木器・木材(7)



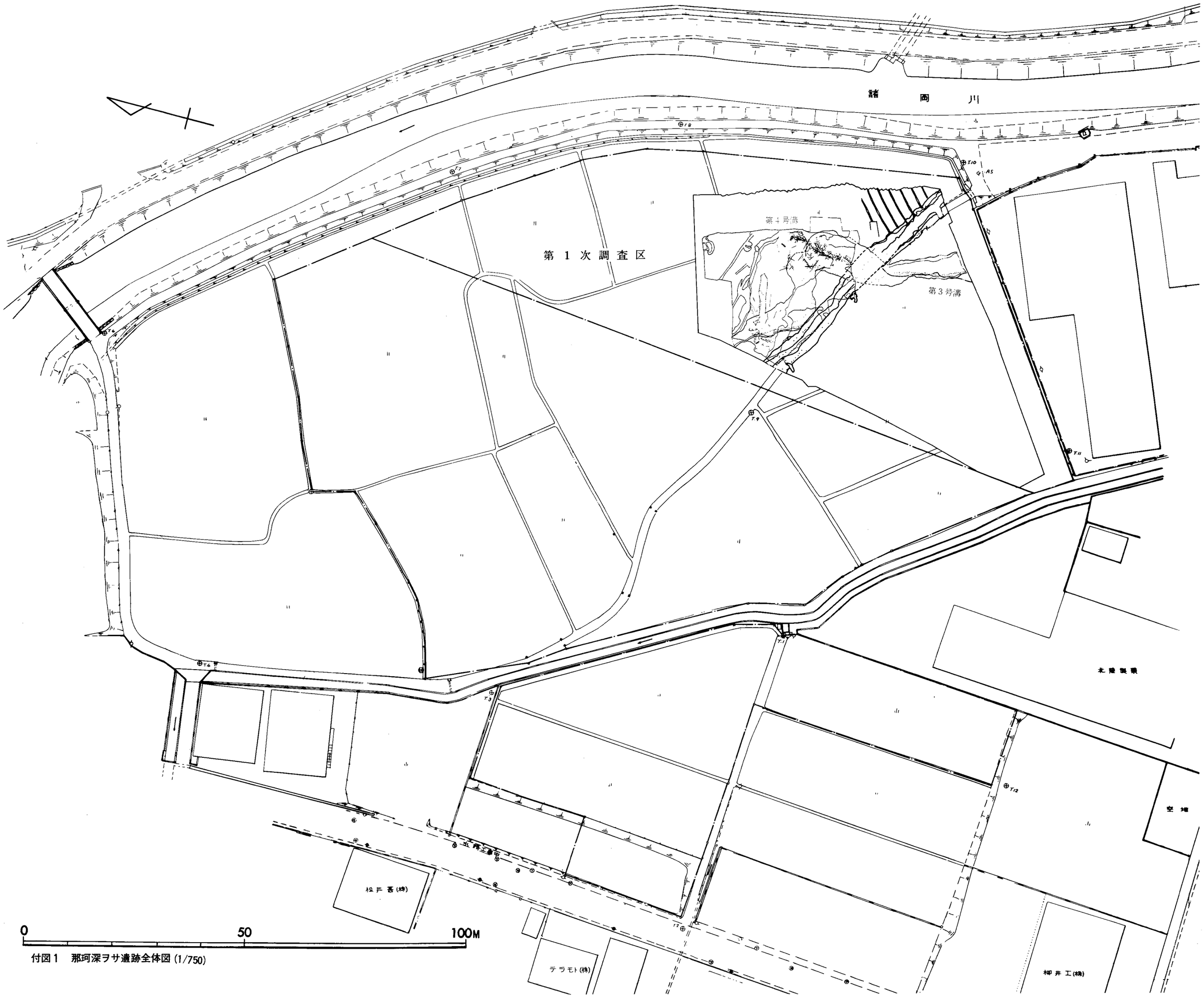
出土木器・木材(8)



出土木器・木材(9)



出土木器・木材細部



付図1　那珂深ヲサ遺跡全体図 (1/750)

付図2　第4号溝全体図(1／100)

付図3　第1号溝全体図（1/80）

那珂深ヲサ遺跡 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集

1981

福岡市教育委員会